

超次元GAME Neptune  
with EX—AID ~What  
is your name? ~

星ノ瀬竜牙

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、記憶喪失の少年と少女達の物語――

※これは超次元ゲームネプラヌ×仮面ライダーエグゼイドのコラボ小説です  
オリジナル主人公やハーレム等が含まれますので、苦手な方はブラウザバックを推奨  
します。

※現在は超次元ゲームネプラヌRe;Birth1編です

# 目

# 次

情報収集——それはRPGのBasic

！—————— 62

エム 情報資料（隨時更新予定）  
1

プロローグ—————— 8

R e ; Birthl 編 I, m A K

A M E N R I D E R ! 覚醒する力！

出会い！そして変身！I, m A K

A M E N R I D E R ?—————— 19

初戦闘、そしてまた変身！——その名  
はEX—AID！—————— 29

S e l f — i n t r o d u c t i o n—————— 黒い

V S B L A C K G I R L ! 黒い  
太陽だつたら勝てなかつた……——————

J o i n i n g a g r o u p ! 黒  
！俺の名は—————— ?—————— 123

い少女は何者?

150

無事Return!これから行う事を

整理しよう

160

ときめき!?デートのPromise!?

184

どたばた!Data time!

204

仕事の依頼前のPreparation

n movement!

M a g i c i a n

登場

224

!

250

# エム 情報資料（隨時更新予定）

エム 男性 年齢??（見た目は18前後）

イメージCV 島崎信長

正体不明の青年兼この小説の主人公。

謎の力であるガシャットとゲーマードライバーを所持している。

そして、意外とオープنسケベ。

童顔で、イケメンというよりは可愛い系男子である。

髪色は黒で、瞳の色は橙色。

右目が少しだけ髪の毛で隠れている

服装はTシャツの上に黒いライダースジャケットを着込んでおり、

紺色のジーパン、マゼンタ色と黄緑色のゲーマードライバーを意識したカラーの運動靴を履いている

仲間思いの熱血漢で、困っている人は見過ごせない。

意外と冷静な一面もあり、ピンチの時ほど、冷静に判断し行動に移す。

記憶喪失であり、名前も覚えていない。

エムという名はネプテューヌが考へた仮の名前である。

ちなみに喪失した記憶は

思い出などだけであり、一般的な知識は持つている。

だが、女神やその他諸々のゲイムギョウ界の知識は無いらしい。

時々、誰かの夢を見る事があり。エム自身はこれが自分の過去なのでは、と睨んでいる。

その中で知らない筈なのに、見覚えのある少女を見ることがある。

その少女に出会えれば自分の正体が分かるかも知れない、探している。

ゲームドライバーとガシャットの使い方を

記憶喪失でありながら知つており、本人も不思議に思つてゐる。

基本的に他人の好意には鈍い方だが、察しは良く相手を良く観察するので

そういう態度を見せられたら、なんとなく気付く。

マゼンタ色の仮面ライダー 仮面ライダーエグゼイドに変身する。

Lv・2への移行の掛け声は「大・変・身！」

基本的な戦闘時の立ち回りは格闘。

アクションゲームのような技を使う、  
ジャンプしてからのキックや、ジャンプからの踏みつけなど。  
使用する武器はガシャコンブレイカー

ハンマーにも剣にもなる優れもの。

ハンマー時は何処ぞの配管工のような使い方をしたり、  
モグラ叩きの要領で相手を攻撃する。

剣時は結構難に、当たれば斬れるの精神で振り回している。

ネプテューヌ達には そのりくつはおかしい ヒツツコミをいれられている。  
一人称は「俺」

だが、ゲームプレイ時、

もしくはゲームドライバー使用時のみ  
「オレ」という一人称に変化する。

声に出すと多少のアクセントの違いがある程度でしかない。

二人称は「お前」「あんた」「○○」<sup>名前</sup>「○○ちゃん」

ゲームプレイ時、

ゲームドライバー使用時は

「アンタ」と「○○」。

こちらもアクセントが多少違う程度である。

ちなみに好きなプリンはツッ chin プリン。

高級なものよりは安くて美味しい方が好きらしい。

「エムから、相手への認識」

（ネプテューヌ）

手間のかかる妹みたいな感覺。

ネプテューヌのボケにツッコミを入れるが、

それに無駄に体力を使い疲れている事がしばしば。喧嘩する事も多いが、本気で喧嘩したことは無い。

いつもの喧嘩はじやれあいのようなモノである  
ゲームを一緒にする事が多いが、

基本的にエムの圧倒的ワンサイドゲームになる。  
ネプテューヌ曰く

「ポシェモンで戦うとエム君のパーティの相手対策がガチ過ぎて勝てる気がしない」らしい。

ちなみにだが、エムのパーティは

好みのポシェモンしか居ないのに勝っているのだから恐ろしいものである。

(パーティルハート)

お前本当にネプテューヌ?と疑つている。

なんというかお姉さんみたい。ただ元が元なので、ううむ……となつていて  
この姿だと責めてくるというか攻めてくるというか……いろんな意味で辛くなる。

(コンパ)

穢してはいけない天使。

穢れを一切知らない純粹さが眩しすぎて辛い。

怪我をすると涙目になつて心配してくるので無茶はなるべくしないようにしている。

(アイエフ)

自分と同じ気配を感じる（厨二病的な感覚）

ネプテューヌにツッコミを入れる組のもう一人。

ネプテューヌの愚痴をよく言い合う仲。

割と息が合う。

(ノワール)

ツンデレ可愛い。

中々素直になれない彼女を見て苦笑する事がしばしば。

ネプテューヌにツッコミを入れる組のもう一人。

基本彼女が一緒に居るとツッコミを任せっきりにしてしまつており、そこは申し訳ないなあと思つている。

服の露出度高くない？と思つており、

意識しないようにするのに一苦労らしい。

——現在エムが使用できるガシヤツト——  
『マイティアクションX』

# プロローグ

夢を見た

誰かの夢を

誰の夢だつただろう？

……。  
……。  
……。

目を覚ました。

目の前には雲一つない青い空が広がっていた。  
今日で3日目。○月×日。  
昨日も進展無しである。

……此処何処だよ……なんで森に俺は居るんだよ。  
考えれば疑問しか出ない。

気付いたら、この森に居たのだ。

自分の名前は分からぬ。

年齢も分からぬ。

職業も不明。

これはやつぱりアレか、記憶喪失か。

そうとしか考えられない

名前不明 年齢不明 住所不明 職業不明。

「…………怪しすぎていつそ清々しいな。

今の俺の自己紹介

ふと声に出したのはそんな一言だつた。

起きて第一声がコレとか幸先不安でしかない。

仕方ない。行く宛もないが、この辺りを探索してみよう。

もしかしたら、親切な人と会つて助けてもらえるかも知れない。

……些か希望的観測過ぎるかもしれないが。

起き上がり、周囲を見渡す。

特に異常なし。

強いて言うなら、春っぽい気温のこの地で  
オレンジやバナナが木になつてるのが不思議なぐらいだろうか。  
何處にでもありそうな普通の木になつてる。……バナナすらも。  
……幻聴が聞こえた。重症なのかもしれない。

『オレンジバナナそんな馬鹿な♪』

小一時間程度探索をしてみた。

結果、UMAを見つけた

なんだろう……俺の知つてる

最初に出てくる例の青い雑魚キヤラには

犬耳と尻尾はなく、

そして顔すらも犬ではなかつた気がする。

パツチリした目に

U字型を平らに伸ばした感じの口だつた気がする。

声もスラーではなくピキー！だつたり  
時々 プルプル、僕は（ry的な感じで喋った氣がする。  
記憶喪失なので

単なる氣の所為かもしだれないが。

……にしても絶賛ピンチである。

武器もなし、服装も普通のモノ

レベルなんてそもそもそもないのでどうし。

そんな状況でスライム。

仮称としてスライムと犬だから

スライヌとでも言おうか

そのスライヌ達に囲まれているのである。

……はい……詰みです。

出直してまいらねば。

Q、武器もなく、防具もない状態で

スライヌの群れに囲まれました……どうすべきですか。

A、全速力で逃げましょ。

「結局こうなるのかあ―――!?」

ただひたすら逃げた。

走つて走つて走つて逃げた。

「あ」

その途中で思いつきり転んだ。

それはもう思いつきり。

「くふう!?

その時カラカラカシャンといった感じの音と共に

俺が着ていた上着のポケットから

マゼンダ色のゲームのカセットのようなモノが出てきた。

「、」れは……?】

俺が持っていた。 という事は

俺の所持しているモノなんだろう（多分）

その力セツトを拾つた時、何か頭の中にノイズが走つた。

「グツ！？」

なんだこれ……？

ゲームドライバー？ ガシャット？

ガシャットってこれか？」

その走ったノイズの中にある情報を  
冷静に纏めた結果。

これはガシャットという代物なんだと分かつた。

文字は英語で

M i g h t y · · · A c t i o n · · · X。

マイティアクションXか。

何処かで聞いた気もする。

「「「「ヌウラアー!!」」」

しまつた。考え方をしてる間に追い付かれた。

Q、二次小説よろしく、記憶喪失状態で

自分の異能らしきものを知りました。

どうすればよろしいでしょうか。

A、出来るなら、安全なところでどんな異能か確かめましょう。

出来ないのであれば雑魚モンスターで確かめましょ。

「一か八か。やるしかないか！」

オレはそう言い、

ガシャットのスイッチを押す。

すると、

『M i g h t y A c t i o n — X ! 』

という音声とともに愉快なBGMが流れだす。  
スライヌ達は警戒したのか動きを止める。が  
ヒュウー。と少し寒い風が吹いた気がした。

……さて、どうしたものか。

ゲームマドライバーって持つてたつけ……

Q、特撮ヒーローよろしく変身道具を持つてているのですが  
肝心のベルトがありません。どうすれば良いでしょうか。

A、そんな事、俺が知るか！（仮面ライダー→ストーロンガード→）

違うそうじやない。

こういう時は眞面目に答えろよ。マジで。

「「「「ヌーラー!!」」」

「ぎやああああああああ!?」

拝啓、顔も知らぬお父様、お母様へ。

記憶喪失になつて3日目で天に旅立つ不幸をお許しください。

## 『GAME START!』

ウエ!?

そんな音声が流れたのを聴き、  
腰周りを見る。

するとそこには黄緑とマゼンダで配色された  
バツクルのようなモノが巻かれていた。

うん、間違いなくゲームドライバーだこれ。

え、これ両手をお腹の下周りに翳すと出てくるの?

それなんて靈石アマダム?

まあ、好都合。

これで変身できる。

「変身！」

俺はそう言い、  
マイティアクションXガシャツトを  
ゲームドライバーの真ん中に近いスロットに差し込む  
すると、

GA SHAT! ≈

LET, S GAME! MECHA GAME! ≈

MUCCHA GAME! WHAT, S YOUR NAME? ≈

という音声と共に、オレの姿が変わっていく。  
そして、そこには……。

『I, m A KAMEN RIDER!』

ゆるキャラオが居た。

.....。

Q, ヒーローよろしく変身したらゆるキャラでした。

どうすれば良いでしょうか。

A, 僕に質問するな!! (ACCCEL!)

そもそも質問する相手が参考にならなかつた。  
まあ良いか……

とりあえず……散々追い掛けてくれた  
お礼は返させてもらうぜ!

戦闘シーンは丸々描写カットだ。

残念だつたな。

とりあえずスライヌの処理はできたので一安心。  
今は変身を解除して彷徨いている。  
どうしたものか……

と、そんな風に考えていた時だつた。  
底が抜けた。

底が抜けたのだ。

文字通り、穴が空いたのだ。地面に。  
しかも俺の足元で。

……これまでくね？

「アアアアアアアアアアアアアア———」

———  
| W H A T , S T H E N E X T S T A G E ? |

R e ; B i r t h 1 編 I , m A K A M E N R I  
 D E R ! 覚醒する力!  
 出会い！そして変身！I , m A K A M E N R I D  
 E R ?!

此処は洞窟の中。

そこである事が起きていた。

「ハーツハツハツハツ！やつとだ！

やつと私の悲願の第一歩が、  
 今ここから始まるのだ!!」

「ねぶねぶ！」

「ネプ子！」

ねぶねぶ、ネプ子と言われている少女が

謎の魔女のような姿をした女性に襲われそうになつていた。

その時だつた。

「あわわわわわわ!?」……あれ?

今誰かの声が私と被つたような……？」

そんな悲鳴と共に1人の少年が洞窟の上から落ちてきたのだ。

勿論、少女は避ける暇などないので……

ガツシヤアアアアンー！

と聞こえてくる勢いで

落ちてきた少年と思いつきりぶつかつた。

否少年の下敷きになつた

なんだというのだ……

流石に魔女も困惑していた。

当たり前だろう。

現に他2人もボカソとした表情で少年が

落ちてきた場所を見つめている

「痛たたたた……まさか地面に穴が空いて洞窟に

真っ逆さまに落ちてくとは

思つても「ぐへえつ」……ん? ぐへえ……?」

身体を起こし、頭を擦りながら

起き上がろうと青年が左手を動かすと、

下から変な声が上がった。不思議に思つた少年は

左手の部分をマジマジと見つめると……

そこには紫色のショートカットの髪の少女が  
下敷きになつていた。

「…………。

うわあつ!? 悪い!! 大丈夫か!?

それを見て一瞬、少年はフリーズしたが

すぐさま少女の上から退き、心配そうに様子を聞く。

「ううーん……な、なんとか……」

「ほんとゴメン……立てるか?」

「ありがとう……つて、本当にビックリしたんだよ!!

人がいきなり落ちてくるし!」

少年に差し伸べられた手を持ち起き上がつてから頬を膨らませ、怒ったように言う

「いやー……本当に申し訳ない。

行く宛もなく、途方に暮れ、彷徨い歩いていたら  
いきなり地面に穴が空いてなー……

うん、本当にごめん」

「分かれば良いよ、分かれば！」

謝罪する少年に

少女は無い胸を張りながら笑う

「ん、ん、っ！」

「ハツ!?」

たははー。と笑い合う2人。

その途中、魔女が咳払いをする

その時、ポカンとしていた少女2人が動き出す。

「ネプ子! それとそこのあんた! 下がつてなさい!!」

「ハツ!? そうだつた! 君、下がつてて!!」

( : 0 w 0 ) ウエ!? ドウイウコトデイスカ! ?」

青い服の少女と

紫髪の少女にそう言われ、

唐突に少年の滑舌が悪くなる。

「そこに居るおばさんは、私を狙つてるんだよ！

だから、危ないの！」

「( ; 0 w 0 ) ウエ!?

……えつとつまりそこのおばさ 「あ、あ、!?

魔女さんは……悪い人つて事でOK?」

少年は驚く、

そして魔女におば ( r y と言おうとする)

睨まれ、少し小さくなつたが、

そのまま紫髪の少女に質問する。

「OKだよ！」

と、ここで少女ばかりで、混乱する読者も居ると思われる所以、

キヤラクター紹介といこう。

少年の下敷きになつた紫髪の少女はネプテューヌ。現在記憶喪失の少女だ。

後ろに居るクリーム色の髪 首にハートのチョーカーをつけた  
です。口調の少女はコンパ。

ナースであり、某犬神家よろしく頭を地面に突っ込んでいた状態の  
記憶喪失のネプテューヌを見つけた少女である。

そして、青い服にポニーテールの少女は

アイエフ、厨二病を少し拗らせている自称 ゲイムギョウ界に吹く一陣の風  
そして魔女の姿をした肌色が悪い女性は  
マジエコンヌ。見ての通り悪役である。

では、本編に戻ろう。

ネプテューヌは少年に正解だと返答する。

「なるほど……

なら、俺も手助けするぜ！」

「は!?何言つてるのあんた!?

あんた普通の一般人でしょ!?

危険過ぎるわよ!」

「大丈夫だつて、旅は道連れ世は情け。 だろ?」

アイエフが危険だと言うが

少年は笑い、大丈夫だと言う。

「ふん、まあ良い。

1人増えたところで所詮は雑魚の集まりだ」

「……どうかな？」

マジエコンヌの自信満々の言葉に

少年はニヤリと笑う。

「何？」

「ハツ！」

なに？と怪しむマジエコンヌ

そして、少年はお腹の下周りに両手を翳す  
すると彼の腰に黄緑とマゼンダのカラーの  
バツクルのようなモノが現れる。

「ねぶ!? アークル的な登場の仕方!？」

「なんだ……それは……!？」

マジエコンヌとネプテューヌが驚く。

「行くぜ……ゲームなら、オレに任せとけ!!」

「はあ!? あんた、ゲームって……ふざけてるの!?」

「なんだか……お兄さんの口調が変わった気がするですう……」

その腰周りにバツクルが現れた途端。

少年は性格が変わったように笑う

アイエフはふざけているのか!?と怒り

コンパは口調が変わった少年を

不思議そうに見つめる。

「まあ、見てなつて」

そう少年は言い。

服のポケットから

マゼンダ色のゲームのカセットのようなモノを取り出し

そのカセットのスイッチを押す。

すると――

〝 M I G H T Y   A C T I O N - X !   〟

そのカセットからそんな音声が鳴り、

青年の後ろにゲーム画面のようなモノが映る

そして、洞窟の様々な場所に

メダルのようなモノと  
プロツクが現れる。

「ちよ、あれってマイティアクションXじゃない！」

「知ってるのあいちゃん！」

「ええ、あのゲームは昔流行ったアクションゲームらしいわ。

でも……いつたいなんでアイツが……」

アイエフが

ネプテューヌの質問に答え、少年に疑問を浮かべる。  
「……変身！」

少年は顔の横で

カセットを左手の指で一回転半させる。

そして、カセットをバックルのスロットに挿し込む

GA SHAT! 』

LET, S GAME! MECCHA GAME! 』

MUCCHA GAME! WHAT, S YOUR NAME? 』

『 I, m A KAMEN RIDER! 』

N A M E? 』

』

「な……に……!?」

「え……」「ええええええええ!?」

音声が流れ、

ゲームのキャラクター選択コマンドのようなものが現れる

そして、桃色の枠を選択した後、少年の居た場所に居たのは

| W H A T , S T H E N E X T S T A G E ? |

# 初戦闘、そしてまた変身!――その名はEX-AID!

『LET, S GAME! MECCHA GAME!』  
 『MUCCHA GAME! WHAT, S YOUR NAME?』  
 『I, m A KAMEN RIDER!』

「な……に……!?」

「え……」「ええええええええ!?」

変身した少年の居た場所に居たのは……

珍妙な生き物(?)だつた。

なんというか……誰もが驚愕すると同時に

思つていたのと違う。と言いつうな姿だつた。

『へへん! どうだ、驚いただろ?』

「貴様、ふざけているのかあ……!」

『あり? 思つて反応と違うな……!』

『こつちの台詞よ!! 何、その姿! 馬鹿じゃないの!?!』

少年は自分の思つていた反応と違う事を不思議に思い、

それはこつちの台詞だ。と怒られる。

『え!? そんなにおかしいか!?』

「おかしいわよ!! 鏡見て確認しなさいよ!!」

ツッコミを入れられ、

手渡された手鏡で少年は自分の姿を見る。

『な……!?』

「ようやく気付いたのね……」

少年は驚いたように固まり、

アイエフは頭を抱えてため息をつく。

『な……』

何だこのかっこいい顔!?!』

「「違うそこじゃない（ですう）!!」」

少年の反応が全く違う所への反応だった為  
敵味方関係なくツッコミが入る。

この少年、もしかしなくとも天然の氣が有るのである。

「あれ? そう言えば、ねぶねぶは……」

コンパは

思い出したのか、ネプテューヌの方を見る

「……ポカーン」

ポカーンと完全に固まっていた。

『あれ? 固まつてる。

ははーん……さては驚いて頭が追い付いてないな!』

「ええ……きっと、別の意味でね!」

少年の台詞に

アイエフは再び頭を抱える。

『おーい、起きろー、敵はまだ健在だぞー?

ねふねふさーん? 聞いてますかー?

おーい、起きろー。もう昼ですよー』

奇妙な生き物は

少  
年

ネプテューヌの周囲をぐるぐる周りながら  
揺さぶつたり、目の前で手を振つたりしながら言う

「ハツ!?

『お、気付いた。

大丈夫だつた k 「ねえ、何今の!

特撮!? 特撮系ヒーローなの!? もう1回見せて見せて!!  
お、おおう……思つてたより凄い食い付きっぷり……』

正気に戻つたネプテューヌは

そのまま勢いよく、少年に質問する。

ちなみにだが、目は凄く輝いている。

「ええい！いい加減にしろ貴様らああああ!!」

「うわあああ!?」

マジエコンヌがキレた。それはもう、恐ろしい程に。

勿論、目の前でこんなふざけた茶番をされれば

誰でもキレるだろうが。

「まあ、良い……纏めて全員倒せば良いだけの話だ！」

そう言い、マジエコンヌが攻撃してくる

『おつと危ない！』

「ねぶ!?」

その攻撃をネプテューヌを抱えて、

少年は跳躍し回避する。

『さて、いきなり戦闘だけど……

行けるか？……えーっと？』

「ネプテューヌだよ！」

『そうそう、ネプテューヌ！ 行けるか？

それとそここの……あーっと……？』

『アイエフよ』

「コンパですう」

『OK、アイエフにコンパも！

一緒に行けるか？』

「言われなくともガンガン行くよーー！」

「当たり前よ！」

「私も頑張るです！」

『そりや、

頼りがいがあるな!』

ネプテューヌ、アイエフ、コンパと共に  
少年はマジエコンヌに向かい合う。

「ふん、纏めて掛かつてくるが良い!」

『さあて……ノーコンティニュード

「ねつぷねぷに』クリア 「してやんよ (やるぜ) !』

『そらよ!』

「ふん!」

『おつと、危ねえ!』

少年の攻撃を

躱し、マジエコンヌは反撃する。

が、少年もその程度は想定済みなのか  
あつさりとその反撃を躱す。

「くらいなさい!」

「甘いな！」

アイエフの素早い攻撃も  
容易くマジエコンヌは躱す。

「うええ……やつぱり強過ぎるよ……

ステージ1のボスじやないよ……!!」

『あれじやね？ SなDXで

初見で仮面つけた丸い騎士に

ピンクの悪魔が挑むようなもんじやね？』

萎えだしているネプテューヌに  
例を上げて、教えるゆるキヤラ<sup>年少</sup>  
正直言つて、シユールである。

「なるほど納得……つて！

開幕負けイベのボス戦とか驚き以外の  
何でもないんだけど!?」

『ごもつともで！』

「ふん、茶番は終わりか？

そろそろ終わりにしてやる」

「ねぷ!? 嫌な予感!!」

『奇遇だな。オレもだ……』

終わりにするというマジエコンヌの言葉に  
ネプテューヌ達が全員が冷や汗を出す

『チツ、こうなつたら!えーっと……ツ!

なるほど……やつてみる価値はありだな……!

……大変身!』

少年は何かを呟き、

バックルのレバーを左から右に倒す。

G A C H A N ! 』

LEVEL UP ! 』

M I G H T Y

J U M P !

M I G H T Y

A C T I O N - X ! 』

『

』

すると、そこにはマゼンダ色の

仮面の戦士が立っていた。

「なに!?」

「おお!更に姿が変わった!」

マジエコンヌは驚き、  
ネプテューヌは更に目を輝かせ  
少年を見つめる。

『エグゼイド……頭の中に響いた言葉……』

そうか……こいつの名前はエグゼイドか！  
そして、今の姿は……

アクションゲーマーLV. 2つてどっこか……！

少年、否、エグゼイドはそう言う。

「ようし！なら私も……」

——行くわよ!!』

ネプテューヌもエグゼイドを見て、姿を変える。

その姿はまるで女神のようだつた。

『マジか……ネプテューヌも変身できるのか……』

驚いたように、そして関心するように

エグゼイドはネプテューヌを見る。

「エグゼイド!一緒に行けるかしら?」

『ああ、勿論だ。ネプテューヌ!』

ネプテューヌはエグゼイドに手を差し伸べる。

エグゼイドはその手を掴む

そして、

『「さあ、協力プレイでクリアしてやるぜ（あげるわ）！」』  
2人でそう決めた。

『ネプテューヌ!』

「分かったわ!」

「くつ、厄介だな……!」

ネプテューヌとエグゼイドは  
息の合ったコンビネーションで  
マジエコンヌを相手に立ち回る。

「ねぷねぷもエグゼイドさんも凄いです……!」  
「ほんと、まさに阿吽の呼吸ね」

アイエフとコンパは

素直に関心してしまった。

『ネプテューヌ……』

エグゼイドの合図に

ネプテューヌは領き、エグゼイドの肩を使い、跳ぶ。

そして、その勢いで得意な技を魔女に向かつて使う。

「くらいなさいっ！クロスコンビネーション!!」

「ふん、無駄だ。

残念だつたな。その程度は予想済みだ」

「あら、そう。残念……」

でも……私は本命じやないわよ？」

「何!?」

ネプテューヌはクスリと自分の技を受け止めた  
マジエコンヌに笑う。

「そうだ！ヤツは!?」

マジエコンヌは気付いたかのように

エグゼイドを探すが周囲には見当たらなかつた。

『G A S H A T!』

「つ！何処だ!?」

音が聞こえ、

マジエコンヌは周囲を探す。

『残念だつたな。魔女さん！詰めが甘いぜ!!  
トドメ、貰いだ!!』

「まさか!?

マジエコンヌは上を見る。

だが気付いた時には既に遅かった。

そう、エグゼイドは彼女の上にある  
ブロツクの上に居たのだ。

『K I M E W A Z A ! 』

『M I G H T Y C R I T I C A L S T R I K E ! 』

『デエリヤアアアアアアア!!』

「ぐあああああああ!?」

エグゼイドの蹴りをくらつたマジエコンヌは  
大きく吹っ飛ぶ。

『K A I S H I N N O I P P A T S U ! 』

『へへっ！決まつたぜ！』

「やつたわね、エグゼイド！」

ネプテューヌとエグゼイドは2人でハイタツチをする。

『GAME CLEAR！』

そして、最後にバツクルからそんな音声が流れた。

「鍵の欠片は返してもらうわ」

ネプテューヌはそう言い、マジエコンヌが奪い取った  
鍵の欠片を拾う。

「くつ……！」

おのれネプテューヌ！」

「先程から気になつていたのだけど、

貴女は私を知つていてるの？」

悔しがるマジエコンヌに対し、

ネプテューヌは質問する。

『え？ ネプテューヌって

もしかして記憶喪失だつたりするの？』

と、エグゼイドは変身を解除しないままの状態で  
アイエフに質問する。

「そらしいわ。

私も詳しい事は知らないんだけどね」

『ふーん……』

オレと…………かあ……』

「興味なさそうね……それと、何か言つたかしら?」

『いや、別に何も言つてねえよ!』

小声でエグゼイドは何かを呟いていたが

アイエフの耳には届いていなかつたようだ。

——私は貴様をよく知つているよ』

「なら、教えて。

私が誰なのかを』

「何を訳の分からぬ事を言つている。

さては頭でもぶつけたか!』

マジエコンヌがネプテューヌの言動に疑問を持ち、  
頭でもぶつけたのか。と問う。

「違うです！ねぷねぷは記憶喪失なんです！」

だから、お願ひです！

ねぷねぷの事を知つていたら教えて欲しいです！」  
コンパは少し怒つたように否定して、

そうマジエコンヌに言う

「ハーツハツハツハ！」

まさか貴様が記憶喪失になつていたとはな！

貴様を見失つた時はどうしようかと思つたが……  
どうやら、まだ運命は私の味方のようだ！

鍵の欠片はしばらく貴様らに預けておいてやろう！  
さらばだ！！

「待つて！！」

ネプテューヌはマジエコンヌを追おうとするが  
マジエコンヌは姿を完全に消してしまつた。

「……居ない？」

『文字通り、逃げられたみたいだな……』

エグゼイドは肩を竦めて、そう述べる

「にしても、あのおばさん何者なの？」

ネプ子を狙つてたみたいだし……」

「分からぬいわ……。」

こんな時こそ、いーすんと話せたら……』

アイエフの疑問にネプテューヌは答えながら少し手を強く握り締める。

「ねふねふ……。」

コンパは心配そうにネプテューヌを見つめる。

『まあ、分かんない事を考へても仕方ないだろ?』

今やるべき事は違うんじゃないか?』

エグゼイドはそう告げる。

「そうね、エグゼイドの言う通りだわ。

今はこつちをどうにかしましよ!』

アイエフはディスクを指しながらそう言う

「さつき、モンスターが出てきたディスクね

どうしましようか?』

『その時の状況をオレはよく知らないんだが……。』

モンスターが出てきて危ないなら、  
ディスクを壊してしまえばどうだ?』

「それもそうね、えい!」

ネプテューヌの質問に

エグゼイドが案を出す、

アイエフはその案に賛成し、ディスクを壊す  
ガシャン!と良い音がなつた。とだけ追記しておこう  
「さて、おばさんもなんとか追い払つて、  
ディスクも壊した事だし、

一先ずここを出て休まない?』

『それもそうだな……

L V. 2の初戦闘でここまでやれるとは自分でも  
正直……思つてなかつ……』

エグゼイドは喋つている最中に倒れる。

『G A S H U N . . .』

倒れると同時に力セツトが

バツクルから外れ、変身が解除された。

「ちょ!? あんた、しつかりしなさい！ 大丈夫!?」  
「……エグゼイド……貴方はいったい何者なの?」

初戦闘とエグゼイドは言つていた。

だが、特殊な人でもない彼が  
何故自分と共に戦えたのか疑問に思い……  
ネプテューヌは不安そうに少年を見つめた。

——この時の彼女達はまだ知らないだろう。  
この少年には隠された秘密がある事を。  
エグゼイドという存在がどういうものなのかという事。  
そして、これはまだ序章に過ぎないという事を……

—WHAT, S NEXT STAGE? —

S e l f — i n t r o d u c t i o n ! 僕の名は——  
——?

夢を見ている——

誰かの夢を——

それは、俺の夢かそれとも——

「ねえ■■。■■はさ、どうして■■■と一緒に居るの?」

「あー……なんでだろう……

でもまあ、お前と居ると楽しいからな

「ほにや!? 変な冗談言わないでよ!? 恥ずかしいでしょ……!

バカ、バカ、バーク!」

「いや、そこまで馬鹿連呼しなくても……」

「2人共、此処に居たのか」

「あ、●●! ●●もこつちにおいてよ!」

「ああ、本当に……」

「いつになつたら、この永い夢は終わるのだろうか  
いつまでも、この刹那が続けば良いのに」

「……さか……ディス……が」

声が聞こえた、

これは最近聞いた声だ。

「……あ」

俺は目を覚ます。

すると見た事ない天井が目の前に広がっていた。

これはあれか。言うべき時だな。

「知らない天井だ」

「あら、目が覚めたみたいね」

テンプレな台詞を言つた後で、

声が聞こえた方向を見る。

美少女が3人居た。間違いなく美少女だ。

十人中九人は間違いなく振り返るレベルはある美少女が。  
名前はたしか——アイエフ、コンパ、ネブテユース。  
だつた気がする。

「えつと……ここまで運んで来てくれたのつて……」

「私ですう」

コンパだつたらしい。

男1人を連れてくるとは……

人は見た目で判断してはいけないらしい。

「すいません……あの後倒れちゃつたみたいで……」

「ああ、気にしないで良いのよ。

目立つた外傷もなかつたし、疲労で倒れただけだと思うわ」

なるほど、あの時の気分の悪さは

疲労が原因だつたようだ。

「ありがとうございます。

ほんと迷惑掛けちやつたみたいで……」

「良いよ、良いよー! こっちも助けてもらっちゃつたし!」

そう言つて貰えるならありがたいものだ

「それで、早速本題なんだけど……」

あなたの名前は何かしら。

ああ、別に大した事じやないのよ。

ほら、変身時あなたが言つてた

エグゼイド だつたかしら?あの名前で呼ぶのもおかしいし

私達の名前をあなたは知つてゐるのに

私達はあなたの名前を知らないいつてのは

ちよつと……ね?」

なるほど、確かにその通りである。

それは失礼な事だつただろう。

「そうですね、それは失礼しました。

では自己紹介させていただきます。

俺の名前は——

そこで止まる。

……はて、俺の名前は何だつたろうか。

というより……今は記憶喪失だつたような？

……余りにも自然に話していたから

自分の状況をすっかり忘れていた。

「俺の名前は……」

俺の名前……

俺の……」

「「「……？」」

3人が？を頭に浮かべてコチラを見る。

まずい、だいぶ怪しまれてる気がする。

えつと……どう説明すれば良いんだ……？

名前不明 年齢不明

住所不明 職業不明。

……うん、怪しすぎてどう説明しても  
警戒されるね！

ウソダンドコドーン……

よし、とりあえず今できる最大の妥協案を言つてみる事にした  
「すいません」

「何よ?」

「……俺の名前ってなんでしたつけ?」

「知らないわよッ!?」

「あらら(ですう)!?」

思いつきり選択肢を失敗したようだ。

馬鹿じやねえの?俺。

——ネプ&アイ&コン&? 「[['超次元ゲームネプティヌス! with.

D!]]」——

「で、つまりあなたはつまるところ  
記憶喪失つてわけ?」

さつきの出来事から数分。  
一通り俺の事は話した。

氣付いたら、森に居たこと。  
スライヌに襲われた事。

そこで変身した事。

名前も年齢も住所も職業も分からぬ事。  
そして、一般的な知識はあるものの  
自分の過去 所謂思い出だけが  
すっぽりと抜け落ちてしまつてゐる事。

「ねぷねぷと同じですか？」

「やつたね！私とお揃いだよー！」

さすがW主人公！主人公同士は、同じ運命にあるんだねー！」

「悪い。ネプテューヌ

言つてることよく分かんない」

「ねぷ!?」

どうやらネプテューヌと同じ状況だつたらしい。

とはいへ、ネプテューヌは

名前と一般的な知識+ $\alpha$ でゲームの知識などの余計な知識がある程度残った状態のようだ。

「困ったわね……名前を覚えていないとなればどうする事もできないわ……せめて私物に身分証明ができるモノがあつたら良かつたんだけど……」

アイエフは困った表情で

こちらを見る

いや、もうなんか本当にごめんなさい……

「エムとかどうかな!!」

「え?」

唐突なネプテューヌの意見にアイエフと

2人で困惑する。どういうことだつてばよ……。

「ごめんなさい、ネプ子。それ、どういう意味?」

「さつき話を聞いてる間にこんぱと考えてたんだ!」

お兄さんの名前! エムって名前はどうかなー。つて!

ほら、エグゼイドに変身してた時の髭っぽいところを

逆さまにするとちょうどアルファベットのMに見えるし！」

なるほど、ネブテューヌは

俺の名前を考えてくれていたようだ。

にしてもエムか……

『エム！』

ツ!?……今はいつたい？

……まあ良いか……

うん、エムって名前なんだかしつくり来るな。

「えっと、じゃあその名前。ありがたく頂戴するよ」

「ちょ！良いの!?その名前で!!」

「大丈夫だ、アイエフ。

エムって名前、意外としつくり来るんだよ。

それに……個人的にも気に入ったしな」

「そう、あなたがそれで良いのなら……私は文句は言わないわ

これからよろしくね。エム」

「こちらこそ、よろしくな

アイエフ、コンパ、ネプテューヌ。

……つてあれ?なんだかその台詞。

既に仲間みたいな感じなんだけど……

「ねふ!?違うの!?——とかIXでは

基本的に名前をつけると仲間だよね?!

「え?俺の名前そんな感じで考えてたのか!?

俺の名前の決め方がゲーム感覚だつた件。

——ネプ＆エム 「私（俺）達！主人公!!」 ——

「ディスクはギルドで対策されるだろうし

あのおばさんの事が気になるわ」

「そうだな、ネプテューヌさんの事知ってる様子だつたし……」

色々話した結果

最終的にあの魔女の話になる。

色々と意味深な発言を残していくつた分

余計に気になつてしまふ

「ねえ、エム」

「はい、エムです。なんだ?」

「その……口調どうにかできない?」

こう言うのはなんだけど……

変身してた時と違つてちょっとね……

「そ、そんなにか?」

「ええ……ネプ子に比べればマシだけどね」

アイエフに言われるとそうなのだろうと思う。

自分では変わったかな? 程度の認識だつたのだが  
そんなに変わつていたのか……

「あー……悪い……ゲームとかをやると

性格変わつちやう質なんじやないかなあ……と思う

いや……記憶無いから分からないけど……」

「ごめんなさい……触れて良い話題じやなかつたわね……」

軽率だつたわ……」

「気にすんなつて。アイエフ!」

多分誰でも困惑すると思うし……それに記憶喪失なのは自分が悪いからなあ……」

まずい……少し空気が沈んだ気がする

……本題に戻った方が良さそうだ

「コホンツ！ 本題に戻るけど……とりあえず、

あの魔女について今後調べていく方が良いかも知れない。 つて感か？」

「まあ、 そうなるわね」

「鍵の欠片を知っていたです。

そして、 集めているようだつたです」

「なら、 先を越されないためにも

早く出発した方がいいかも知れないね！」

言うべきか悩むが……言つた方が良いのだろう。

現に俺が全然知らないワードが出てきている。

「あの——」

「ん？ エム君。 どつたの——？」

「鍵の欠片つてなに？」

「あ、 そう言えばエム君は知らなかつたつけ……

えーっと鍵の欠片つていうのはね——」

——ネプ「かくかくしかじか!」——

「なるほど、そのイストワールさんを元に戻す為に鍵の欠片が必要って言う感じか……」  
一通り、ネプテューヌから説明を聞いた。

なんというか……大変な冒険になりそうかもな。

「となれば、やつぱり早く出発した方が良いのかもな。」

「そうですね。早く出発するです」

俺の発言に賛同するようにコンパも言う。

「ところで、あいちゃん

私どこんばは鍵の欠片探しの旅に出るんだけど  
あいちゃんも一緒にどうかな?

私達初めての旅だからさ、

あいちゃんがついてきてくれると思強いんだ!」

「別に良いわよ」

「わーい! やたー!」

「あいちゃん、ほんとうにいいんですか?」

「特にプラネットユースにとどまらなきやいけない

用もないし、正直、ここまで巻き込まれて今更抜けるのもね……。

それに、あんた達二人だけだと危なつかしいし、私が面倒見てあげるわ」

「やつたね!……あ、それと――――――

気付いたようにネプテューヌ達がこちらを見る。

そうだな……ここまで見させられて断るのはなんだしなあ……よし、決めた。

「勿論、俺も行かせてもらうよ。行く宛もないしな。

それに、個人的な話だけど……：

ネプテューヌ達と一緒に居ると俺の記憶に関して何か分かるかも知れないからな

俺は少し苦笑しながら、

ネプテューヌ達にそう言う

「よーし! これで四人パーティの完成だね!

ようやく町の外に出掛けれるよ!!」

「いや、そんなRPGみたいな話されてもな……」

「ふつふつふ、知らないな……エム君！」

「元々この小説の原作はRPGなんだよ!!」

「はいはい、ネプ子。あなたのメタ話にエムを付き合わせないの！」

まあ、なんとかやつていけそうで良かつた……のかな？

—WHAT, S THE NEXT STAGE?—

## 情報収集—それはRPGのBasic!

「さて、そんな訳で……プラネットワードに行くための情報集めに

プラネットワードの町に出たんだが、本当に此処に情報があるか?」

「甘いね、エム君!私のこの十字キーの髪留めが、

此處でストーリーを進める為のイベントがあると言つてているのだよ!!」

「お前の髪留めは妖怪レーダーかなんかか……」

思わずそうツッコミを入れてしまう。

何故だろう……ボケられると無条件でツッコミを入れてしまつていてる気がする。

「すっかりツッコミ役が定着してきてるわね」

「定着したくはなかつたよ……ちくせう……」

苦笑いをするアイエフのそんな感想に思わず頭を抱えてそう言つた。

「お!第一村人発見!」

そう言つてネプテューヌが指を指した場所には、

二足歩行の猫が居た。

「待て待て待て待て!? なんで二足歩行の猫が居るんだ!? おかしいだろ!? 常識的に有り得ないだろ!?

てか、どういう進化したら立つ!? 人類と同じ進化したってのか!?

「まあ、ゲームだしね!」

「その一言で纏めて欲しくはなかつた……!」

俺のツツコミに一言で返すネブテユース。

思わず o r z と手と膝を地面についてしまう。

知りたくなかつた……知りたくなかつた現実……!

「見つけて早々失礼だニヤ」

「あ、ハイ。なんか……スマセン……」

猫に言い負かされることは……

なんだか悔しいです。<sup>まる</sup>

「それで、情報が欲しいのかニヤ?」

「んー。まあそんなどこかな?」

「なら、ちよつとだけ良い物をくれてやるニヤ」

凄い上から目線……なんだろう……ちよつとイラつてした。

いや、落ち着け……殴つたらとある愛護団体から法廷に連絡させられる……

そしたら……名前 工ム（仮称） 年齢不明 住所不明 職業不明 || 有罪判決。

……あれ？……敗訴確定じゃね？

……既に俺の人生が詰んでいる件。

ようし、この話はやめようか！

俺の人生お先真っ暗な事しか分かんないし！

「ダンジョン内で取れるアイテムを変化させる仕様書だニヤ。

何が取れるようになるかは、取つてからのお楽しみだけどニヤ」

「ほう……そんなアイテムがあるのか……」

あれ、それって地味に凄くね？」

俺はネプテューヌが受け取った

その仕様書を見つめながらそう呟く。が……

「まあこれは小説だから仕様書は

殆ど意味を成さないんだけどニヤ」

ブチツ つと嫌な音が鳴った。

「だつたら……」

「「あ……」

「ニヤ？」

「最初から……渡すんじやねええええ!!」

KNOCK OUT CRITICAL SMASH!!

そんな幻聴と共に俺はネコに見事なアツパーかつを決めた。

ネコは見事に吹っ飛んでいた。

空高くに

「おー、見事に吹っ飛んだねー！　K.O.だよ！」

「まあ……アレはキレイても仕方ないわね……」

メタ話になるとは私も正直思わなかつたわよ……」

ネプテューヌはネコが打ち上げられた空を見つめ  
アイエフは頭を抱えていた。

うん、俺は悪くねえ！

「えむえむ！動物さんをイジメちゃメツです！」

「メツですよー。」

「あつはい、ごめんなさい……」

ツツコミも天使には勝てなかつたよ……  
コンパ様が天使過ぎて俺のハートが辛い。

——エム 「リアルで格ゲー技を決める事になるとは……」 ——

「さて、気を取り直して、真面目に探そうか……」

「既に哀愁漂つてるわね……」

アイエフは俺を見て少し口を引き攣らせながらそう呟く。

……ほつとけ。

「んー、あの娘とか情報持つてそうじやない?」

ネプテューヌがそう言い指を指した場所には

幼女が居た。いやいや……さすがに子供に情報聞くのは……

「今日もぽかぽかあつたかいにゅ……

こんな日は渋いお茶が飲みたくなるにゅ」

…… にゅ つてなんだ にゅ つて

そして渋いお茶好きなのかよ……

見た目だけ子供だとか言わないよな……?

「こんなにちはー。ねね、ちょっとお話いいかな?」

「なんだにゅ? ブロッコリーに用かにゅ?」

「ブロッコリー……?」

『なんなんだあ……今のは……』

……いやいや、連想するのが違うだろ俺。

アレの何処が子供だよ。悪魔じやねえか……。

「へえ、ブロッコリーっていう名前なんだ。

思わず、「ぶち」とつて呼びたくなるね」

出会い頭に失礼じやね?

いや、俺も他人のこと言えないけども。

「ぶちこじやないにゅ、ブロッコリーにゅ」

ほら、お相手さんも少し機嫌悪そうに……。

「そんな細かいこと気にしない気にしないーい!」

「細かくないにゅ」

せやな。

全然細かくはないな。うん。

「エム君!」

「なんだよ?」

「ツツコミを入れるなら、しつかり声に出さないと!」「だあああああ!それを言うのはこの口か?」

この口なのか!?あ、あ、!?」

ネプテューヌのその言葉に思わず、キレて

ネプテューヌの服の襟を掴んで身体をグラグラ揺らす。

「エム君!?それは色々と中身でちやうからダメえ〜!?」

「うるせえええええ!」

ガルルルルルルル……

「ひえええ!?エム君が狼になつた!?

獸だよ〜!?食べられちゃうよ〜!?

「はいはい、二人共ストップストップ。

周りが追い付いてないから、一回冷静になりなさい」

「ガルルルルウ……ル……」

コホン……そうだな。さすがに冷静さに欠けたか……

アイエフに言われ、俺は冷静になり、

ネプテューヌの服の襟を離す。

「ねぶうく死ぬかと思つたよく……」

誰のせいだと思つて……全く……はあ……

「い……いつたいなんなんだにゅ……？」

「悪い困惑させたな。……それで聞きたい事なんだが  
ここからプラネタワーに行くにはどうすれば良い?」

「それなら、この道をまーっすぐ行くにゅ。

そうすると看板が出ているはずにゅ」

「親切にありがとな!よし、それじやあ行くか!」

「「おー!」」

ブロッコリーに教えて貰い、

俺達はプラネタワーに向かうことにする。

「……そりいえば、

今の人達どっこかで会つたような気がするにゅ……  
誰だつたか考えるにゅ……

……………そ  
うだにゆ！

ネブ子達にゆ!!…………でもあるお兄さんは誰にゆ?  
』

—W  
H  
A  
T,  
S  
T  
H  
E  
N  
E  
X  
T  
S  
T  
A  
G  
E?  
—

# 新たなContinent! その名はラステイション!! プロステージやないぜ!

と、まあそんな訳で……ぷちk……じやなかつた。

ブロツコリーという幼女の情報から

教会前にやつてきた俺達だつた。

「おおーっ!?なんか大地が割れてるよっ!?

まさかこれが……古の戦いの傷痕!?

「そうそう、此処で女神と邪神が互いを無数の剣で

封印し合う戦いが……つて、そんな訳ないだろ!?

「おお!見事なノリツッコミ!!ナイスだよ!エム君!!」

「黙らつしやい!!」

「何やつてるのかしら……あの二人……」

「ねふねふは記憶が少し抜け落ちちゃつてるとから根気強く、  
付き合つてあげて欲しいです」

「エムに関しては普通に付き合つてゐだけなのよね……

たまにあの二人が記憶喪失なのを疑わしく感じるのは私だけかしら?」  
そんなアイエフとコンパの会話が聞こえた。

なんかホントすいません……

「あいちやん、こんば、はやく来てよー!

大地の端つこいい眺めだよー?

もしかして怖いー? 怖いんだー!!

「あー、確かに良い景色だな」

俺はそう言い空を眺める。

うん確かに良い眺めだ。

「えーと、ねぷねぷにえむえむ。

このあたりは接岸場といつて、

大陸と大陸の陸地が時々くつつく場所なんです

別に一つの大陸が割れてるわけじやないですよ?」

……大陸が動く?

ラピ○タなのか……?

「へーそなうなんだ。でもコレってどうやつて渡るの?」

やつぱりジャンプ？

イヤツフー！とか言つた方がいいかな？」

「仮にも女性がオーバーオール着て、赤い帽子被つて  
ちよび髭つけてケツワープでもする気か……？」

それと最近はジャンプの声はホツ！とかホホウ！だぞ  
「でじま！」

「でじま」

てかなんか古いなでじまつて。

……昔流行つたギャル語だつたような気がするぞ。

「はいはい、漫才はその辺にしてちようだい」

「いや別に漫才してる気は……ないけどしてたな。うん」

「話を本題に戻すけど、

他の大陸に渡るには教会での手続きが必要なの

手続きさえ済めば今後は自由に通れるようになるわ」

「「(、・▽・、)ヘー」

「どうでも良さそうね……後、その顔文字やめなさい」

「「(、・ω・、)」」

「ショボンもダメ！そもそもソレをやめなさいっての！」  
「はーい」

——エム 「いざ、新たな大陸へ……イクゾ——！」

ネプ 「デツデツデデデ！」

エム 「(カーン) が入つてない —114514点」

ネプ 「(・ω・) そんな」 —

「さて、そんな訳でやつて来ました羅素亭師四!ラステイション

いよ～ベンベン！」

「なんでわざわざ漢字にしたのよ……」

「いや……ちょっとある熱血硬派な男のゲーム風にと……」

「それ別の大陸ですべきものじやないかしら？」

此処、機種が違うわよ?」

「違ひないな。アレ、ファミリーなコンピューターのだし」

と、どうでも良い会話をアイエフとしているのだが……

「うわあ！いかにも鋼鉄島一つて感じ!?」

あいちやんあいちやんっ！

「ここはなんて大陸だつけ？」

まあご覧の通り、横のハイテンションなネプテューヌに関わりたくないでのスルーする為に会話していたのだ。

「さつきエムが言つてたじやない……聞いておきなさいよ。

まあいいわ、ここは守護女神ブラツクハート様が治める大陸、ラステイションよ。重工業が盛んで、工場なんかが多いの」

「こういうさ……ディティールっていうの？」

大陸ごとに建物が違つたり雰囲気が違うのってさ、

やっぱり女神様の趣味なのかな？」

「うーん……違うんじゃないか？」

たしかに神様が大陸を守護するのかもしれないけど……

結局のところ、文明を築いて発展させるのって俺達人間だろ？」

「そうね、思つてた事を全部言われるとは思つてなかつたわ……」

「あー……それは悪かつたな……」

「もうー……エム君とあいちやんは夢がないね」

悪かつたな。夢がなくて。

『K E I T A I H I T O T U D E 5 5 5 !  
C O M P L E T E』

M O S H I M O S H I Φ, s ↘♪ ≈  
なんで、その音声流れるんですかねえ!?

俺はたつくんじやないし、オルフェノクでもないぞ!!

「こんばはどう思う?この大陸」

「工場とか煙突とかが目立つていて

産業革命つて感じがするです

でも、私にはちよつと

マニアックな感じかもですう』

「まあ女の子が食いつきそうな感じではないかもね。

わたしは割と好きだけど……

まあ、意外だったのは……エムが食いつかなかつた事かしら?』

「ん?俺?……あー……なんでだろうな?」

……こういうのは少々俺には合つてないのかもな。

どつちかつて言うとゲームの方が俺は食いつきそうだよ』

「あー……違ひないわね」

アイエフは苦笑しながら俺を見つめる。

おそらく、俺が変身した時のアレを思い出してるのだろう。

「つて、こんな事、話してる場合じゃなかつたわね。

教会に行きましょうか」

「賛成だ」

——ネプ「私つてエム君みたいにレベルアップ的なモノで姿は変わらないのかな?」

エム「ピクトリー<sup>ピクトリー</sup> V I Iまで……待て、然して希望せよ。だな」

ネプ「先は遠いね……」

エム「作者のモチベーション次第だからな……」——

そして……現在、

ラステイションの教会に向かっている途中なのだが……

「ねえ、あいちゃん。教会にはまだ着かないの?」

「おかしいわね……」

「こっちの方向だと思ったんだけど……」

「もしかして、迷ったとか?」

「んー……しばらく来てなかつたからなあ  
ご覧の通り、絶賛迷子中である。

なんでき。

「ま、まあ……とりあえず、誰か捕まえて訊いてみようぜ? な?」

「そうね、そうしましようか」

「じゃあ、あのいかにも”冒険者”って人はどうかな?」

ネプテューヌが指を指す。

その先にはまさに”冒険者”と思わせる姿をした

赤髪の少女が居た。

「あのー、そこの赤髪の人すみませーん!」

「ん? あたしに何か用かな?」

「ブラックハート様つて女神様に会いたいんだけど、

どこに行けばいいか知つてたら教えて欲しいんだ」

「ブラックハート様……? ああ、ノワール様のことか

それなら、この道を真っ直ぐ行つて、  
突き当たりを右に曲がつたところに教会があるよ」

「方向は合つてたみたいだな。サンキュー、助かつたぜ」  
「困ったときはお互い様だからね」

……なんかほんと助かります。

「そうだ、ここで会ったのも何かの縁だし、名前教えてよ」

「いきなりは失礼じやないか……?」

「エム君、細かい事気にしてると禿げるよ?」

「禿げねえよ!むしろ、お前のボケのおかげで色々な意味で禿げそうだわ!?

「あはは……」

お相手さん苦笑いしてるじゃないですかーやだー!?

「わたしはネプテューヌ!」

でこつちがこんばとあいちやん!

そしてコレがエム君!」

「おう、コレって言うなし。俺は部品か何かですかコノヤロー」

「あはは……コホン、あたしはファルコム。

駆け出しの冒険家なんだ。

こつちで会つたのも何かの縁だし、

もし困つたことがあつたら声をかけてくれれば力になるよ」

ん?『こつち』?

……どういう事だ?

つて、疑うのは流石に失礼だな。うん。

「ほんと!?

「助かるわ。

それじゃ、わたしたちは急いでるから、  
これで失礼するわ。また会いましょ」

「悪いな。いきなり呼び止めたりしてさ」

「ううん、全然気にしなくて良いよ!

それじゃあ、またね!」

「ああ、じゃあまたな。

ホラ、とつとと行くぞ。ネプテューヌ

「アイタタタ!『ごめんつて!コレ扱いしたのは謝るから!?

耳引つ張らないでえええ……」

ファルコムに教えてもらつた通り、  
教会に俺達は向かう事にした。

——ネプテューヌの耳を引っ張つて。

「……ふう。まさか、こっちの世界に来てすぐに  
ネプテューヌさんたちと出会うなんて  
ちよつとびっくりしたかも

それにもしても……あのエムさんって人は誰だろう?

向こうには居なかつた気がするけど……

わたしが会つたことがないだけなのかな?」

—W H A T , S    T H E    N E X T    S T A G E ? —

小さな工場のPresident!……アヴニールって  
？ ああ！それって（ry

「だあああ！ムカつくなあ！！

なんだよあの教会の職員!!ふざけてんのか!?」

「ほんとだよー!!あつたまくるなー！」

あの教会の人もだけど、あいちやんもあいちやんだよ！

どうして引き下がつちやうの!?」

いきなりだが、こうして俺達が怒っているのには理由がある。

あの後ラステイションの教会に行つたのだが……邪険に扱われたのだ。

あああああ！思い出すと、また腹が立つてきた！

「はいはい、落ち着きなさいな。それに……気づかなかつたの？」

あの人、女神様に仕える身でありながら女神様を呼び捨てにしていたわ

「たしかに、言われてみればあの人、

女神さんを呼び捨てにしてたです。

呼び捨てにするなんて絶対におかしいです」

「どうして？」

実は超仲良くてお互いを呼び捨てる

超フレンドリーな関係つて可能性はないの？」

「ネプ子やエムは知らないと思うけど、

普通なら自国の女神様を呼び捨てにするなんてありえないわ」

「まあ……そうだろうな……普通に考えれば

一般社員が社長を呼び捨てにしてるようなもんだろうし……」

そもそもそんな態度をすればどうなるかなど予想できるだろう。

だが、それにもかかわらずあの態度だつた……つまりラステイションには何か裏がある筈だ……

「それに、プラネテュースの教会で会つた人覚えてる？」

性格はちょっとアレだつたけど、

普通は例え女神様がその場にいなくても、

あの人みたいに敬意をもつて呼ばれるものなの」

ああ……あの変態紳士ロリコンの氣がある職員さんか……

たしかに性格はアレだが……

プラネテュースを守護する女神であるパー・ブルハート……だつたか。

その女神様に敬意をもつていたのは分かつた。

「なのにこの国では”たかが女神”扱い……。

絶対おかしいわ」

「あいちゃんは、わたしたちと会うまでは世界を旅していたですよね？何か知らないんですか？」

「ごめんなさい、コンパ。最近はずつとプラネットユーヌにいたし、「ここ」に来たのだつて数年ぶりだからあまり詳しくないのよ」

「旅人キヤラなのにいざという時に頼りないなー、

あいちゃんはー……けど、安心して。

そんなことでノシするほどブラックなパーティじゃないから！

例えレベルが低くとも、ラスボスどころか次回作までずーっと一緒だよ!!」

というか操作キヤラにならなかつた事はあつたが

ほぼ毎シリーズ出てる気がするぞ……アイエフとコンパ。

最早、第2の主人公だよな。

実際セガハードではアイエフは主人公ポジだつたし。

……はて、今俺は何を考えていたのだろう。  
凄くメタい事を考えていた気がする。

「……悪かったわね、頼りなくて。

てか、記憶喪失のアンタにだけは言われたくないわよ！」

「それな」

「えむえむ。ブーメラン刺さつてるですよ？」

「ごもつともで。

「あははははつ、ごめんごめん」

「まつたく……。とりあえず話を戻すわね。

これからギルドに行つてクエストを受けようと思うんだけど、どう？」

「クエストなんて受けてどうするの？」

「まだまだお金はたくさんあるよ？

ハツ!? もしかして、あいちゃん……

「私やこんば、エム君に内緒でこつそり使い込んじやつたとか!?」

「別に路銀が心細くなつたわけでもなければ、

ネプ子みたいにこつそりプリンを買い食ひしてゐわけじやないわ」

「ぎくつ！？バレてたの！？」  
「バレバレよ。

……もしかして、気づかないと思つてたの？」  
「ああ……なるほど、それでこの前……」

資金の勘定したら合わないなあつて思つたわけだ……  
ちよつと O☆H A ☆ N A ☆ S H I しないとな……  
ナア……ネプテューヌウ……？

「う、うん……つてあれ？ エム君？」

なんで近付いてきてるの？あの……もしもし？

無言でにじり寄らないでくれませんか……？

うわああん！？お金を使う手に使つたのは謝るから

手の指を素晴らしいそな世界のクズ系主人公さん風に動かしながら寄つてこない  
でええ！？」

「ええい！ 黙らつしやい！」

貴重な資金を使つてプリンを食つたのはこの口か！？この口なのか！？」

俺は手を使い、ネプテューヌの頬や口をぐい一つと指で引っ張つたりする。  
傍から見ればセクハラとかに見えるかもしねないが

これはお仕置きなので問題ない。

はい、そこ。ほんとお？って感じの疑いの目を向けない。

涙目のネプテューヌを見てナニカに目覚めかけたりは決してしてないからな！してないぞ！！

「ふへえええん！ほへんはひやいい～！」  
 私が悪かつたから……ひつはははいへ～!?」

ヤバイ、不覚にもネプテューヌに萌えた。

……もうちよつとだけやりたいつて邪な感情が芽生えた。

「コホンツ！」

「あ……」

「んえ……？」

アイエフの咳払い気付く。

俺とネプテューヌ……凄い注目の的になつてた。  
 だよな。こんな事してたらそんな風になるよな！  
 ああ！そこのお母さん！

お子さんがこつちを気にしたのに気づいて、よく見かける  
シツ！見てはいけません！をしないで！？

されると割と傷つくから！？

ネプテューヌもこの状況に気づいたのか顔を赤くしていた。

……是非もないね

——エム「いつそ殺せ……一思いに殺してくれ……」

ネプ「うう、貝になりたい……貝に転生したいよ……」

アイ「やれやれ……」——

「それで……話は戻るけど、思い出してみて。

プラネテューヌではエネミーディスクがあつた場所に鍵の欠片もあつたのよ。  
なら、ラスティションもその可能性があるつて思わない？」

「おおつ！？さすがあいちゃん！

さつきは頼りないとか言つたけど、

前言撤回だよー！まさしく、汚名挽回だね！」

「ねふねふ、いろいろ間違つてるです……。

そして、死亡フラグです」

「うん、ネプテューヌ。

それを言うなら、汚名返上と名誉挽回な。

汚名挽回は……うん……誤用じゃないんだけど  
なんて言えば良いんだろう……：

詳しくはニコ〇コ大百科でも見といてくれ」

「色々丸投げしたわね……」

だつて汚名挽回ってややこしいから……

説明しようと思うとかなり文字数使うし……

——エム「これが戦争だろうがツ！」

ネプ「それ、今の感じ的に私が言うべきじゃない!?」——

さて、色々あつたが……ギルドにて

モンスターを倒してほしいという依頼を受け、

その依頼主である会社の社長さんのもとに向かう俺達だった。

「あ、きっとあの人です！」

モンスターさんを倒してほしいっていう社長さんは!!」

「えー？なんか一回り小さいよ？」

社長さんて言うくらいだから、

もつと風格のあるがつちりした人じやないの？」

「ヴァカめ！この世の中にはHappy Birthday！って叫びながらケーキ作る社長や、

人間皆ライダーとかほざく社長や、

三次元アーリアルでシャフ度を使いこなし一人劇場をするゲームマスター 自称神の社長や、幸せなりたかつただけなのに鏡の世界で消滅した社長なんかも居るんだぞ！」

そう考えたら小柄な社長が居てもおかしくはないだろ？」

「エム……それは全員個性極振りの社長ばっかりよ……？」

「世の中、どんな人が居るか分からぬもんだね……」

というより私としては、

粉碎玉碎大喝采！の社長さんが出なかつたのが驚きだよ」

俺が例に挙げた社長の話をするとアイエフからツツコミが入つた。

ネプテューヌはそれを聞き苦笑いしている。

うん、たしかにあの人も社長だけど……

これ一応仮面ライダーの二次創作だし、決闘者は……ね？

にしても……言われてみれば

たしかに日曜日朝八時、朝八時半の社長は個性極振りが多い気がする。

なんでの時間帯の社長は個性が強いのだろうか……

ちょっと疑問だ。

「あ、気が付いたですよ。

……顔をしかめたです。手を振つてくれたです。  
やつぱり間違いないですう！」

「向こうの人も、

もしかしたらこっちと同じ気分でしようね……」

「まあ……記憶喪失の男 一名 記憶喪失の少女 一名

ギルドのメンバー 一名 看護師 一名……

上二名。というか俺とネプテューヌが字面だけ見ると凄い頼りないってメンツだも

んな」

「でも、実際のところ、一番頼りがいがあるのが  
記憶喪失の二名つてのが複雑ね……」

「分からんでもない。俺がアイエフの立場だつたらそなうなるつて確信があるし」

と、そんな雑談をしていると

向こうの社長さんらしき

ゴーグルをかけたしかに青髪の少女がこつちに来た。

「もしかして、仕事を受けてくれた

女の子三人と男一人の四人組つていうのはお前らなのか？

……つて、本当に大丈夫なのかなよ」

「見かけによらないのはお互い様よ。

わたしはアイエフ。

で、後ろの三人がコンパとネプテューヌとエム

アイエフに紹介され

俺は軽く、お辞儀をする。

「はは、ま、確かにそりやお互い様だな

わたしはシアンだ。

この町で、パツセつて言う小さな工場の社長をやつてる

立ち話もなんだし、詳しい話はうちでしようか」

で、そんなわけで……シアンさんの工場に来た……筈なんだが……  
「あなた、さつき工場の社長って言つてなかつた？」

「こー、誰がどう見ても食堂よ？」

そう、食堂なのである。

何処からどう見ても料理系の店にしか見えないのである。

「うちは実家が食堂なんだ。工場はここ隣

話をするならお前らも機械と油だらけの場所より

こつちの方がいいだろ？」

ま、好きなところに座つてくれよ」

シアンさんにそう言われ

それぞれ席に座る。

「じゃあわたしカウンター席とつた一つ！」

「じゃあ、俺はここかな……つと、色々あるんだな。

お、このWハーフボイル丼サイクロン山葵とジョーカー海苔載せつての美味しそうだ  
な」

ネプテューヌの隣に座りながら

ふと、名前のインパクトが凄い品名が  
目に留まつたので言つてみる

♪  
KAZOERO! OMAENO TUMI WO♪  
MEITANTEI W!』

また幻聴が聴こえた気がする。

CV立木さんな変身道具は俺持つてないんだけどなー……  
というか俺の変身道具つてCV影山さんなんだけどネ。

「エムはエムで何で普通に注文を見るのよ……

というか凄い名前ね……そのどんぶり……」

「名前のインパクトは凄いよな。このどんぶり。

食べたら、ありとあらゆる情報を調べる事ができるようになりそうな名前だけど

……

「あ、わたし知ってるよ！」

それって、ズバリ！地球の本だn……ムグ!？」

「はいはい、探偵ライダーはこの世界じゃ（多分）出ない（と思う）から  
能力名言うのやめような」

俺の発言にズバツとネプテューヌは言おうとするので  
口を塞いで、言わせないようにする。

「ムググ……ふはあっ！」

……それについても実家が食堂なんていいよね。

パフェでもプリンでもなんでも頼み放題なんだよね！」

「自分の家で頼み放題しても仕方ないだろ？」

それに、工場の稼ぎだけじゃ苦しいから母さんが

ここを片手間でやつてくれるんだ。

ただで贅沢はできないよ」

あ、この娘……良い娘や……立派な娘さんやで……ううつ……

「えむえむ、どうして泣いてるですか？」

あ、ティッシュどうぞです」

「いや……親の為に頑張れる良い娘なんだなあ……って思つてさあ……あ、ティッシュ  
ありがとな……こんば……」

ズズズピー……チーンツ！

と鼻をかみながら、俺は涙を流していた。

「よ、よしてくれ……恥ずかしいだろ……」

恥ずかしそうにシャンさんは頬をかく。

別に恥ずかしがらなくてええんやで……

「コホンツ！」

「あ」

「……それで、さつそくだけど

仕事の詳しい話を聞かせてくれないかしら？」

切り替えるの早いな……アイエフ……

「あっ、ああ。

单刀直入に言うと、アンタ達には  
交易路のモンスターをどうにかしてほしいんだ。

……少し前まではモンスターなんて居ない安全な交易路だつたんだが、

最近モンスターが出るようになつちまつてさ

そのせいで、せつかく作つた商品の流通が滞つているんだ

なるほど……それはおそらくエネミーディスクの仕業だろうな……

つまり、アイエフの予想通りつて事か。

「ビンゴね。

いいわ、その依頼、確かに受けたわ」

「助かる。ただでさえアヴニールのせいで

こつちは景気が悪いつていうのに、

それにモンスターまで加わつてたまつたもんじやなかつたんだ」

「……？」

「シアンさんシアンさん。

そのあぶにいる？ つて何ですか？」

「何だお前ら、アヴニールも知らないのか？」

「はいです。

ラステイションには今日來たばかりなので、

何もわからないんです」

「アヴニールつていうのは、

実質このラステイションを支配している大企業だ

家電から武器や兵器までなんでも作つて、

その製品ラインナップの多さと低価格で

ほぼ市場を独占していると言つても過言じやないんだ  
おかげでこつちの商品は種類も価格もアヴニールに負けて物は売れないし  
下請けをさせてくれるわけでもないしで、

今月に入つてから知り合いの工場も……

何件潰れたことか……!」

「酷いな……そんな会社が存在するとは……」

「そうです! どくせんきんしほーいはん です!」

にしても偶然か……?

まるで……アヴニールが動きやすくする為に

エネミーディスクが交易路に出現したみたいだ……

敵になりそうな工場を潰す為みたいで……

偶然にしては……あまりにも出来すぎてる……

まるで裏から誰か手引きしているような……

まさか……あの魔女か……?

クソ、情報が少なすぎる!……だけど確信できる

アヴニールって会社が一枚噛んでいるつて事は……

教会の職員が女神をあんな風に扱うのも……

エネミーディスクの件もおそらくだが……  
だからといって迂闊に動けばまずいな……  
手詰まりか……クソツタレ……

「エ……ム……ム……！」

エム！」

「ぬおおおお!?

なんだよ!? いきなり耳元で大声だすなよアイエフ！」

「あんたが反応しないからでしようが……」

どうしたのよ? 黙り込んだりして、考え方?」

「あ……えつと……そうか……悪いな。

んー……ま、そんなとこか……

でも多分俺の考え過ぎだと思うし気にしないでくれ

それで? これからどうするんだ?」

「聞いてなかつたのね……」

「ははは……悪い悪い……」

「はあ、まあ良いわ……簡潔に言うなら、

今から例の交易路に行くのよ。エネミーディスクを探しにね」

「ん、了解。じゃ、とつとと行くか」

そんなわけで俺達は

その交易路……西風の吹く渓谷に向かうのであつた。

W H A T , S T H E N E X T S T A G E ? —

現れるG o d d e s s ! モンスター討伐も大変です !

「どうちやーつく !

「ここが噂の交易路だね !

どんなモンスターが出てくるのかな !

ま、このわたしにかかれば、

古今東西ありとあらゆるゲームのモンスターなんて一瞬で倒しちゃうんだもんね !」  
「ええく ? ほんとにござるかあく ?」

「ほんとにござるよう。信じてないなあ、エム君は !

おーい ! あいちゃーん ! こんぱー ! 早く早くー !」

なんて、軽く雑談しつつ「西風の吹く渓谷」にやつてきたわけだが……

「はあ……、はあ……。

ねぶねぶ、少し待つて欲しいです。

わたし、もうヘトヘトですう……」

案の定運動が苦手なコンパがヘトヘトになっていた。

まあ、ネプテューヌのヤツ……ぐんぐん進んでいつたし

この辺、地形の関係で歩きづらいから尚更しんどいんだろうな。  
ん？俺？俺はほら……鍛えますから。

『 D O D O D O N   D O N   D O D O D O N !  
D O D O D O N   D O N   D O D O D O N !  
K I T A E T E M A S U K A R A !   H I B I K I !  
』

また幻聴が聴こえた。

最近多いけど疲れてるのか……俺？

「まったく、ネブ子つたらはしやいじやつて。

元気なのはいいけど、あとでバテても知らないわよ」

「疲労度なんてそんな時代遅れなステータスは  
わたしにはないから平氣だよん！」

悪いモンスターなんてさつさと倒して、

シアンに報告してあげようよ！」

「そうだな、それどちらみにだが……

HPつて体力つて意味だからHP減る＝疲労度上昇的な意味だつて知ってるか？」

「なん……だと……!?」  
ネブテュースの一言に突っ込んでしまう俺である。

「お前、その台詞は死神のだろうが……」

「お前は死神じゃないだろ……」

「えー？ ジヤあエム君はわたしの事

なんだと思ってるのー？」

「少なくとも変身後のお前は女神かなと思つた」

「うつ……面と向かつて言われるとなんだか恥ずかしい……」

俺の発言に顔を赤くするネプテューヌ。

【ネプテューヌ的好感度が上がった！】

なんだ今のテロップ。

え？ 今の俺のせい？ ……俺のせいなの？

「はいはい、そこ。イチヤつかないの」

「いや……そんなつもりはないんだが……」

「そ、そうだよー！ あいちゃん！」

決してイチャついてなんかないんだからねッ！

あ、でももうちょっと褒めて欲しいかなあ……って

アイエフの一言に俺とネプテューヌはツツコミを入れるが  
ネプテューヌの方は本音ダダ漏れである。

「はいはい、後でな。

んじゃ、そろそろ行きますかね」

「おーっ！ ガンガン行っちゃうよー!!」

——エム＆ネプ 「エグゼイド＆ネプテューヌ！」 ——

「はあ……はあ……。あいちやあー……ん。

待つてえ……疲れたよお……」

渓谷とは道が険しいモノである。

そんな場所をぐんぐん進んでいけばスタミナ切れがすぐに来る訳で……  
案の定、ネプテューヌがバテました。  
え？ 予想ついてただろつて？

当たり前だよなあ？

「ネプ子、アンタねえ……。

疲労度とかいうシステムだかステータスは  
ないんじやなかつたの？」

「た、確かに言つたけどさあ……。

思つてた以上に坂道が多いんだもん。卑怯だよお……」

「わたしも、足の裏が痛くてもう一步も動けないですぅ……。

あいちゃん、えむえむ、ここでちょっと休憩するです……」「やれやれ……

コンパはとにかく……ネプテューヌ……お前の場合はガンガン行き過ぎだな。  
こういう場所は道が険しいのが普通だから

あまり飛ばさずゆっくりと行けば良かつたんだぞ？」

「うつ……そこを突かれると痛いなあ……」

というかなんでエム君は平気なのさ？」

「鍛えますから」

「エム君つて鬼だつたつけ……？」

「鬼じやねえよ。ついでに言うなら音撃もしてねえよ」

「はいはい、またコントしないの。

仕方ないわね、ここら辺りで、休憩にしましょ」

「うい、了解」

「やつと休めるですう……」

アイエフの意見に俺は了承し、

コンパは大きく息を吐き地面に座り込んだ  
よっぽど疲れてたのな……

「そうだ！せつかくだし、休憩ついでに  
みんなでおやつ食べようよ！」

街を出る前にプリンを買つておいたんだよ！

大自然の中で食べるプリンは格別だよ、きっと！」

「ネプテューヌ……また皆の資金で買つてないだろうな？」

「むー！失礼だなあ！ちゃんと今回は  
わたしが貯めたお金で買つたよ!!」

今回はつて……は つて事はまたする気かよコイツ……

そんな風なやり取りをしていた時だった――――

G Y A A a A A A !

と、

モンスターの雄叫びが聴こえたのだ

あ、そういえば……ここつてたしか――――

『ちなみにシアン、その例のモンスターは何処に？』

『ああ、ソイツは渓谷の中心辺りに住み着いていると思うぞ』

『サンキュー、それが分かればだいたい何処にいるかは探せそうだ』

——交易路を塞いでるモンスターの住み着いてる場所だつけ。

「……と、言いたいんだけど、

実は例のモンスターが出没するのつて、  
ここ辺りなのよね』

「…………え？」

ネプテューヌのえ？という言葉と同時に

例のモンスターが目の前に現れた。

つて、おいおいコイツは……

「…………あ、あのおー……、あいちやん？

この明らかに戦つたことのないような

モンスターってもしかして……？」

「ええ。シアンからの情報通りよ。

そいつで間違いないわ』

「またまたあいちやんつたら。

そんな冗談に騙されるわたしじやないぞ☆

なんちやつてーー！」

「ネプテューヌ……現実逃避はやめる。

コイツがシアンの言つてた例のモンスターだ」

「モンスターさん、

もう少し空気を読んで欲しいです。KYですう……」

「うう……。せつかく美味しくプリンを食べれると思つたのにー！」

「つたく……文句言うなよ。

そんなに食べたいならコイツを倒してから食えば良いだろ？」

俺は苦笑しつつ、

ゲーマードライバーを腰に巻き、マゼンタ色のガシヤット

マイティアクションXガシヤットを取り出してスイッチを押す。

『 M I G H T Y   A C T I O N — X !   』

「変身ッ！」

オレはそう言い、ガシヤットをゲーマードライバーの右側のスロットに挿し込む。

『 G A   S H A T !   』

そして、その音声と共に目の前にキャラクター選択のコマンドが現れ、オレはエグゼ  
イドの顔が描かれたコマンドを殴る事で選択する。

LET, S GAME! MECCA GAME! 』

MUCCHA GAME! WHAT, S YOUR NAME? 』

『 I, m A KAME RIDER! 』

音楽が終わつた時、オレの姿はいつものL<sub>v.</sub><sup>ゆる・キラ</sup>1と化していた。

「やつぱりその姿なのね……」

「相変わらず、可愛いですう」

相変わらずこの姿は、ツツコミニどころが多い気がするぜ……。

アイエフから呆れられて、コンパからは可愛いと言われた。

可愛いって言つてくれるのは嬉しいけど男としては

カツコイイって言つて欲しいぜ。

ま、一気に片付けるし……このままレベルアップさせてもらおうかね

『大・変・身!』

オレはそう言い、ゲーマードライバーの真ん中にあるマゼンタ色のレバーを左から右に倒す。

『 GACHAN! 』

『 LEVEL UP! 』

その音声と共にオレの目の前に

エグゼイドアクションゲーマーL v. 2の姿が描かれた桃色の壁が現れ  
オレはその壁を通り抜ける。

△△  
M I G H T Y J U M P ! M I G H T Y K I C K ! △△  
M I G H T Y M I G H T Y A C T I O N - X ! △△

その音楽に合わせ、ジャンプ キックをする。

そしてL v. 1のアーマーが外れ、

オレは逆立つた髪が特徴的なマゼンタ色の戦士

仮面ライダー エグゼイド アクションゲーマーL v. 2に変身完了した。  
『つしゃあ！仮面ライダー エグゼイド！ここに参上!!』

そして、オレが変身完了すると同時に

ネプテューヌも、いつもの幼さの残る少女の姿から  
凛とした大人の女性の姿に変身した。

「仮のネプテューヌと言われたこのわたしも、  
今日ばかりは鬼になるわ！」

『お前、オレと一緒で記憶喪失だろうに……

それ、何処で言われたんだよ……？』

相変わらずツッコミを入れてしまう辺り

オレもツツコミ役が定着している気がしてきた。

「相変わらず、ねぶねぶは変身すると見た目だけじゃなく、性格もまるつきし変わるですね。」

えむえむは姿こそ大きく変わるんですけど

あまり性格は変わつてないです」

『ま、仮面ライダーって基本的に身長とかは何故か変わるしな。大人の都合だけど。』

あ、それとこの時はエムじやなくてエグゼイドつて呼んでくれ。

たしかにネプテューヌは……大人になつたらこんな感じじやないかつてのはあるよ  
なあ……』

本当にネプテューヌなのか疑いたくなる程に別人で、美人だけど』

「び……美人つて……もう！お世辞が過ぎるわよ！エ g……エグゼイド!!』

顔を赤くしながらネプテューヌはそんな風に言う。今囁んだな。

というか……別にお世辞は言つてないしなあ……』

実際、今のお前はクールな美人だから、頬を赤らめられると

なんだか不意つかれたレベルで悩殺されそくなんだよ……

『可愛すぎかよ』

「か、かわつ!?」

……何故か熟したトマトみたいに更に顔が赤くなつた。  
もしかしてさつきの声に出てた……？

「ねぷねぷ、顔が赤いですけど大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫よ、問題ないわ」

その台詞は大丈夫じゃないフラグだぜ。ネプテューヌ。

『まあ、なんにせよ。早く終わらせてシアンのところに報告に行きましょ  
『だな。とつと片付けてプリン食べようぜ！』  
『うう……わたしはまだヘトヘトですう……』

「こんば！あいちゃん！エグゼイド！」

雑談なんてしてないで、さつさと倒すわよ！』

これほどまでに綺麗なおまいうは初めて聞いた気がする。

「はうう……」

「ネプ子もやる気満々のようだし、もう一頑張りしましょ」

『わかってるつての、んじやお決まりの台詞言わせてもらうかね。

……ノーコンティニュードクリアしてやるぜ！』

「G Y A A A !」

鳥のようなモンスターがオレに向かつて襲い掛かつてくる

あの鷹みたいな鋭い足の爪を喰らつたらまずそうだ!――

『ぬおおつ!? しかも鳥っぽい姿してるだけあつて素早いなコイツ!』

「エグゼイド! 油断しないで!!」

『わかつてるネプテューヌ!! つて危ねえ!?』

オレは転がつて避ける。そして、転がつた場所の目の前には赤いメダルがあつた……

『エナジーアイテムか…………へへッ! 使わせて貰うぜ!!』

そして、オレは少し仮面の下で笑みを浮かべ……

筋肉ボーナスの絵が描かれた赤いメダルを取る。

すると……

〔M<sup>マッ</sup>U<sup>ス</sup>S<sup>ル</sup>C<sup>化</sup>L<sup>E</sup>!〕

という音声が流れる

このエナジーアイテムというのアイテムは仮面ライダーに変身した時に現れるメダルのようなアイテムだ。効果は回復からステータス異常に能力アップと様々だ。

そしてこの赤いメダルは「マッスル化」  
文字通り筋力をアップさせるエナジーアイテムだ。

そして、これでパンチ力とキック力などを含めた攻撃力を底上げできるって寸法だ。

『ネプテューヌ！コンパ！アイエフ！』

「「わかったわ！（ですう！）」」

オレの動きに合わせて

ネプテューヌ達が動く。頼んだぜ！三人共！

「行くわよ！烈火死靈斬！」

「G Y A a A A ?」

アイエフがまず、お得意の剣技でモンスターの動きを止める。  
アイエフが作ってくれたこの隙に――――――！

『今のうちにっ！』

選択コマンドのようなものがオレの目の前に現れ、  
桃色のハンマーを選択する。

『 G A S H A C O N   B R E A K E R ! 』

オレはそのハンマー ガシャコンブレイカーを握るが  
それを好機と見たのかモンスターが襲い掛かってくる！

「G Y U A A A !」

クソ！この距離だと回避できねえか！？

「させないですよ！コンパ・ラブ・ハートですっ！」

「G Y A A A A ?」

回避をできないところでコンパが桃色のハートの波動を撃ち  
モンスターの足を止める。

「ここがチャンスだな！」

『ネプテューヌ!!』

「わかってるわ！喰らいなさいッ！」

クロス……コンビネーションッ！」

オレの掛け声に合わせ、

ネプテューヌがお得意の技 クロスコンビネーション で空中から  
モンスター相手に怒涛のラッシュを畳み掛ける。

「G Y U a a a A a a ?」

その猛攻の後、モンスターはネプテューヌに空から叩き落とされる。

「エグゼイド！頼んだわよ!!」

『任せろ！』

オレはネプテューヌが叩き落としたモンスターに向かつて、  
ガシャコンブレイカーを構え、ゲーマードライバーのスロットから  
マイティアクションXのガシャットを抜き、

『G A S H U N . . . 』

ガシャコンブレイカーのスロットに挿し込む！

『 G A   S H A T !   』

『 K I M E   W A Z A !   』

決め技という音声と共にガシャコンブレイカーにエネルギーをチャージし、  
オレはガシャコンブレイカーの持ち手にあるトリガーを押す  
すると――

『 M I G H T Y   C R I T I C A L   F I N I S H !   』

その音声が流れ、先程取つたエナジーアイテム マッスル化の効果が  
ガシャコンブレイカーを持つ右腕に発動し、

『一気に決める！

はあああああ……

ハアアアアアアアアアツ!!』

オレは目の前に落ちてきたモンスター目掛けて  
ガシャコンブレイカーの必殺の一撃を放つッ！

「G Y U A a a a a a A A A !?」

『K A I S I N    N O    I P P A T S U ! 』

モンスターはその攻撃で思いつきり吹き飛び、  
空中で消滅した。

『つしやあ！ゲームクリアッ！やつたぜ!!』

オレはガシャコンブレイカーを

右手で持ち左手でVサインを決めた。

「やつたわね。エグゼイド」

『おう、やつてやつたぜ！』

パチン！とオレはネプテューヌとハイタッチをする。

「やつたです。やつぱり強いですね、えむえむ！」

「ほんとにね……」

『というよりあのメダルつて飾りじやなかつたのね……』  
『あー、あれはエナジーアイテムつってな。』

『言つちまえば、赤い配管工のキノコや花や星とかそんな感じのやつ』  
『凄くわかりやすい例えね……』

オレの説明にアイエフは苦笑するのだった。

「……ふう。

『しても意外と楽勝だつたわね』

『ま、いくら強敵でも数の暴力にや勝てないつてことだろ』

『そうですね、ねぶねぶ達のおかげで楽勝だつたですね！』

『今回のエナジーアイテムのマッスル化のおかげだけどな  
あれ無かつたらもうちよい時間は掛かつてただろうし』  
ほんとにエナジーアイテム様様である。

『どんでもないアイテムつてのがよくわかるわね……』

『まあ……実際どんでもないぜ？ 鋼鉄化と伸縮化っていうエナジーアイテムは物理攻撃ほぼ無効化できるしな』

「まさにバランスブレイカー級のアイテムじやない……」  
オレの説明にネプテューヌは苦笑する。

まあ、その通りだな……レベルが高い相手もアイテムを上手く使えば互角に戦えるし。

つてあれ？……オレなんでこんな事知ってるんだ？

というかレベル差つて……何の事だ……？

オレ、何の事言つてるんだよ……

「エグゼイド？どうかしたの？」

『あ、ああ……悪いなんでもない……ちよつと考え方を……な』

「そう？なら良いのだけど……」

ネプテューヌは不安そうに、オレを見つめていた。  
心配掛けちまつたかな……

にしても、後ろの視線すげえ気になるな……  
さつきから岩陰でコソコソしてるけど。

「ふと思つたんだけど、変身したネプ子が  
わたしたちを飛んで運べば早く着くんぢやないかしら？」

「嫌よ。

ただでさえこの姿を維持するのに疲れてるのに、  
三人なんで運べないわよ」

アイエフの意見を却下するネブテユース。

まあ……大変そうだし。仕方ないだろうな

『オレは別に運ばなくとも良いけどな……』

「タクシー代として、片道1プリンでどうですか？

3個入りの安いプリンじゃなくて、

1個100円の高くて美味しいプリンを奮発するですよ」

3個入りの安いプツチンプリンも

美味しいと思うんだけどなあ……

「うつ……。

とても魅力的な提案だけど、断らせてもらうわ」

「そうですか……。ねぷねぷが飛んでくれたら、とつても楽できたんですけどねえ」

「それじや、いい加減元の姿に戻るわね」

『あー……悪いけどネプテューヌ。もうちよい待つてくれ』

オレは頭を搔きながら、ネプテューヌにそう言う

「何よ? この姿の方が良いから。とか言う気なの?」

『いや……たしかに美人だし色気とか色々な意味でそっちの方が男のオレとしては嬉しい……』

つてそうじゃなくてだな……おい、そこでコソコソしてゐる奴。

とつとと出てこいよ』

オレは後ろに振り返り、岩陰に向かつて話し掛ける。

上手く釣られてくれると良いが……

「つ!」

ネプテューヌもそれで気付いたのか岩陰の方向を見て警戒する。

ただ、顔が赤いので台無しである。え? オレのせい? 是非もないよネ!

「よく気付いたわね。褒めてあげるわ!」

そんな声と共に岩陰から誰かが飛び出でくる。

出てきたのは……白い髪 そしてネプテューヌと同じような服装。

ネプテューヌと同じ模様の瞳をした少女だった。

「久しぶりね、ネプテューヌ。

⋮⋮もつとも、あなたは覚えてないかも知れないけどね!!  
W  
H  
A  
T,  
S  
T  
H  
E  
N  
E  
X  
T  
S  
T  
A  
G  
E?  
—

# V S B L A C K G I R L ! 黒い太陽だつたら勝て なかつた……

「久しぶりね、ネプテューヌ。

……もつとも、あなたは覚えてないかもしねないけどね!!」

黒いレオタードのような服装に

白い髪 そして、ネプテューヌと同じ模様が入つた瞳の少女がそんな風に言う。

「あいちゃん、この人……！」

「……ええ。

なんとなく変身したネプ子に似ていると思わない？」

『ああ、髪の色や瞳の色こそ違うが

服の感じとか……瞳に入つてる模様がネプテューヌと一緒にだ』

『そう、その独特的のコスチュームに、その瞳

わたしの勘が正しければ――――

『ネプテューヌの事を何かしら知つてゐる。つて事か』

「そういうことよ」

エムとアイエフはそんな風に予想する。

「ええ、ネプテューヌのことなら、  
よく知っているわよ」

そして、その予想は白い髪の少女の一言で確信に至った。

『つ！』

!?

本当なの!?なら、教えて！私は一体何者なの!?!』

「あはははっ！」

ネプテューヌにお願いされるつていうのも悪くないわね！いいわ、教えてあげる!!  
(イイ性格してやがる……さては、友達居ねえなコイツ……)

白髪の少女の笑いにそんな事を考えるエムだった。割と失礼である。  
ネプテューヌの事を言える立場ではない。

「ほんとう!？」

「よかつたですね、ねぶねぶ。

やつと知り合いに会えたです

(ぜつてえ、なんかあるよなあ……

条件の一つや二つ要求してきそうだ)

コンパは自分の事のように嬉しそうにしているが

要求があるだろう。とエムは白髪の少女を疑つていた。

「その代わり、一つ条件があるわ」

『ほら来たよ……』

「条件？ いつたいそれは何？」

予想通りの言葉に肩を竦めるエム。

そして、ネプテューヌはその条件が何なのか質問する。

「もちろん、私に勝負で勝てたらよ！」

『なるほど、それは実にわかりやすい条件だな……

コンパまだいけそうか？』

「……ちよつと無理かもです」

エムはコンパに聞く、

コンパは無理そうだ。とエムに答える

『分かった。なら下がつてろ

コイツの相手はオレ達がする……！』

コンパを下がらせた後、

エムは仮面の下で何処か獰猛な笑みを浮かべ、黒い少女に向かつて行つた。

『こいつはどうだ!!』

エムはそう叫び、ガシャコンブレイカーを

白髪の少女目掛けて振るう。

だが、少女もそう簡単に喰らうわけがなく……

「甘いわよッ！」

エムの攻撃を躊躇し、自分の持つ黒い剣をエムに目掛けて振るう。

『チイツ！そりやネプテューヌと同じぐらいの強さはあるよなア！』

エムはそう叫びながら、白髪の少女の剣の一振りを転がつて回避する。  
誰もが予想できるだろうがこの白髪の少女はネプテューヌと同じか、  
それ以上の実力は持ち合わせているだろう。

そんな少女の一撃を貰えば確実にひとたまりもない。

だからこそエムも避けるしかないのだ。

「あなた、それなりに強いのね。私相手にここまで戦えるなんて思わなかつたわ。  
ただの人間なのかはともかくね！」

『そりや嬉しいね……！

だけど、生憎……オレはただの人間さ！ちょっと特殊な力を宿しただけのね!!

まあ、それより――――――

「なにがしら?」

『オレばかりに気を取られてて良いのかい?

此処にネプテューヌは居ないぜ?』

白髪の少女に対して、エムは何処か煽るようにそう笑つた。

「つ!?

白髪の少女は思い出したかのように周囲を見る。

だが――――――

「居ないツ!?

そう、エムの言つた通り

そこに居たはずのネプテューヌとアイエフが居なくなつていたのだ。

彼女が意識をエムに向けていたのが原因だ。

エムが先に攻撃したが故にそちらに集中し過ぎたのだ。

『ありがとよ、お前がオレに気を取ってくれてたおかげで……上手くいった』

エムは仮面の下でニヤリと笑つた

「やつてくれたわね……!』

『まんまと引っ掛けたお前が悪いんだぜ?

ぶちかましてやれよ……アイエフ！』

「ええ、あなたの作つたこの隙……無駄にしないわ！」  
魔界粧・豪炎！』

エムに言われ、空中から現れたアイエフがまず、地面から炎を巻き上げ、白髪の少女の動きを止める

「くつ……この程度なら！」

白髪の少女は炎を振り払うが、

アイエフは余裕そうに笑い……：

「悪いわね……わたしは本命じやないのよ。

頼んだわよ、ネプ子！』

いつの間にか白髪の少女の真上が居たネプテューヌに託す。

「わかってるわー……外しはしない……ツ！

クリティカルエッジ！』

「しまつた……!?

きやああああああああああ！』

さすがの彼女も奇襲に近い形での

ネプテューヌの三連撃は防げなかつたようで

勢いよく吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられた。

『……やつたか？』

「エグゼイド、それはやつてないフラグよ？」

『……あつ』

最後の最後に締まらない辺り彼ららしいと言えるのかかもしれない。

叩きつけられた壁から落ち、

起き上がりながら少女は悔しそうにエム達を見つめる。

「……つく！ 助けがあるとはいえ、

この私が負けるなんて……どういう事なの！？

それとも、やっぱり私の力が……。

ううん……それだけは認めたくない……ツ！』

(……なるほど、何かしらの問題をコイツも抱えてるってわけか。

そうでもなきや記憶喪失とはいえ知り合いに攻撃してきたりしないわな……)

少女が呟いた言葉が耳に入ったエムは

なるほど、……と納得する。

彼女にも彼女なりの理由があるので理解したのだ。

「さあ、約束よ。

わたしのこと說話してくれるわね」

「たつた……たつた一度私に膝をつかせた程度で  
勝つた気にならないでよね！」

ネプテューヌのその言葉に、

少女はネプテューヌを睨みつけながらそう叫ぶ  
(……やれやれ、とんだ負けず嫌いなお嬢さんだな)

少女の叫びに

エムはバレない程度に肩を竦めた。

「こちらの方が多勢に無勢だつてことは認めるわ。

だけど、勝ちは勝ちよ」

『ああ、そうだな。オレ達の勝ちだ。

大人しく教えてくれないか？ネプテューヌの事』

ネプテューヌとエムはそんな風に言うが

彼女からすれば負けを認めろと言つているようなものである。

だからこそ彼女は――

「こんなの……こんなの認めないわっ！」

少女はそう叫び、飛び去つた。

『……っ！ 悪い、先に追いかける!!』

エムは急いで白髪の少女を追いかける。

「待つて！ 二人共!!」

「ネプ子！ 一人を追つて!!」

アイエフはネプテューヌに頼み

ネプテューヌはエムと少女を追いかけようとするが……

「あ、あれれ!?」

「ちょっとネプ子、何で変身といってるのよ！」

何故か、ネプテューヌの姿が元に戻つてしまつたのだ。  
アイエフはどうして!?と疑問に思つたのだが――

「ごめんあいちゃん。

さつきの戦いでエネルギー切れしたみたい。

もう疲れてヘトヘトで無理……」

「だつたら走つて追いかけるわよ！

エムが先に行つてくれたとはいえ……

せつかく見つけたネプ子の手がかりなんだから、

何が何でも捕まえるわよ！」

ネプテューヌ達は走つて白髪の少女を追いかけた——

「はあ……。

ネプテューヌには負けるし、女神化解けるわで今日は踏んだり蹴つたりだわ……まさか、私がネプテューヌに負けるなんて……けど、あれは1対3だつたし、きつと1対1なら私の方が……」

黒髪のツインテールの少女がそんな風に呟いていた。

誰だか分からぬいだろうが……この少女は先程の白髪の少女である。

「たしか…………こら邊で見失つたよな……」

「つ!?」

そんな時、エムが先程の少女を探しにここにやつて來た。

黒髪の少女は彼に気付いて警戒する。

「……君は？」

エムは少女に気付き、黒髪の少女に近付く。

「……大丈夫か?」

「……っ!」

手を差し伸べようとするが、

黒髪の少女は警戒したままだつた。

「つて……そりや、見ず知らずの男が近付いたら警戒するわな……

俺の名前はエム。……君は?」

「……ノワールよ」

エムと黒髪の少女、ノワールは互いに自己紹介をした。

「ノワールか……立てるか?」

エムはノワールに手を差し伸べる。

「ええ……立てるわ……」

「なら、よかつた……つて怪我してるじゃないか。

……ん?こんなとこに薬草?……ちよつと待つてろ」

エムはそう言い、近くで見つけた草を抜き、手で磨り潰す。

「……随分と慣れてるのね」

薬草を磨り潰す様子を見たノワールはそんな風に呟いた。

「いや……分からぬ。ただ……なんだろう。身体が覚えてるんだと思う

「どういう事よ?」

ノワールはエムのその言葉にどういう事だと聞く?

「こういう事を言うのはなんだが……」

「俺……記憶ないんだよ。俺を助けてくれた人達がいるんだけど  
その人達と会う前までの記憶がさ」

「……そう、ごめんなさい。悪い事聞いたやつたわね」

「いや、気にしてないから。大丈夫だ

……このぐらいか、ちょっと染みるけど我慢しろよ」

エムはノワールの謝罪に大丈夫だと返答し、

磨り潰した薬草をノワールの傷に塗る

「ツーーー!?」

ノワールは涙を浮かべて歯を食いしばる。

どうやら、かなり染みたようだ。

「大丈夫か!? やっぱり染みたか!?」

「だ、大丈夫よ……」

エムはノワールを心配そうに見つめ、

ノワールは大丈夫だ、とエムに言う。

「……そうか、なら良かつた

……そういえば、目を覚ました時、結構ボロボロだつたからでコンパから包帯とガーゼ予備の分貰つてたつけ

エムはそう呟き、黒い革ジャケットのポケットから包帯を取り出す  
「ちょっと待つてろ、傷を覆う

そう言いながらノワールの傷口にガーゼを当て、包帯を巻く。

「これでよし」

包帯を巻き終わり、エムは笑う。

「ありがとう……迷惑かけちゃつたわね」

「困つた時はお互い様。だろ？」

でも、どうしてこんな傷を負つてたんだ？」

「うつ……それはその……」

エムの疑問に思わず言い淀むノワール。

それもその筈だ。

自ら、4人組に喧嘩売つてやらされました。なんて言える筈がない。

「……なんか理由あるんだな……なら聞かない」

「え？」

エムのそんな言葉に思わず目を丸くするノワール。

「隠したい、黙つておきたい事があるんだろ？」

あ、でも1個だけ聞かせてくれないか？」

「……なにかしら？」

「簡単な事だよ。

この辺で白い髪に、水色でちょっと特殊な模様の入った瞳をした  
お前ぐらいの身長の黒い女の子見かけなかつたか？」

「ぶーつ!?

ノワールは思いつきり吹いた。

それもその筈。互いに変身している状態だつたため知る筈もないが  
ノワールがその例の白髪の黒い少女なのだ。

そして、エムはノワールが先程戦つたマゼンタ色の戦士。エグゼイドである。

そう、言つてしまえば555の序盤の木場　勇治と乾　巧の関係のような状態である。

互いに面識はあるが、その正体が戦つていた相手だとは気付いていないという状況なのだ。

「わっ!? ちよ!? 大丈夫か!? てかなんで吹いた!?

まさかノワール……ひよつとしてお前……？」

「ななななな、何の事かかしら!?

わわわわ、私は、そそそんな人、しし知らないわよ!?」

エムはもしや?とノワールに聞く。  
が

ノワールは慌てて違うと否定する。

噛みまくつている時点で答えてるようなものだが……

「噛みすぎイ！動搖し過ぎイ！」

おい、ノワールウ！やつぱお前——」

そして、確証に至ったエムがさつきの黒い少女だろ。と言おうとした瞬間だつた。

「捕まえたー!!」

エムにとつてもノワールにとつても聞き覚えのある声が耳に入った。

それと同時にノワールはその声の少女にガバッと抱きつかれた。

いや、抱きつかれたというよりは捕まえる為にしがみついた。というべきだろう。

W  
o  
w  
.  
.  
.  
I  
t  
,

こう見えて、彼は意外とオープニングベースケさんである。

「のわあああああああつ!?」

「とつたどー!!」

ノワールは急な事に油断していたのか、

神な次元の自分が良く叫ぶ特徴的な悲鳴を上げ、

聞き覚えのある声の少女は何処ぞの良い子な最早無人島生活が本職な芸人の決め台詞を口にした。

「…………はああああああああ」

そして、エムは頭を片手で抑え、大きな溜息を吐いた。それはもう大きな溜息を。

「な、なに!? ちょ、ちょつと！」

「いきなりなんなの!?」

「洗い浚いぜーんぶ話してくれるまで、

ぜーつたい離さないよー!!」

(うーんこのぐだぐだ……シリアルスはいつ現れるんだろうか?)

ノワール達の微妙に噛み合つてない会話を聴きながらエムはそんな、どうでも良い事を考えていた。

「……つて、あれ? 違う人だ」

ノワールにしがみついていた少女、ネプテューヌはふと、しがみついた少女を見る。すると自分の探していた少女とは全く違う人物だと気付き、ノワールから離れる。

「ど、どうしてあなたがここにいるの?!」

「えーっと、人を探してるんだけど、こっちの方に飛んでこなかつた?」

微妙に噛み合つてるようで噛み合つてるない会話をするネプテューヌとノワール。

この二人は決してコンビを組んでいて

芸名がア○ジヤツシユだつたりはしないので。お忘れなきよう。

「黒くてツヤツヤしてて空を飛ぶから目立つと思うんだけどさ、なんか見なかつた?」

「うう……なんか嫌な例えね……」

「ネプテューヌ、言い方言い方……

それだと台所に存在している黒光りしているGの名を持つモノじやねえか……

あ、ちなみに俺はGはGでも怪獣王のGが好きです。

仮面ライダーのGや光の巨人のGや守護神のGも好きだけどネ」  
ネプテューヌの例え方に少々嫌な顔をするノワール。

それもその筈。

その例え方はエムが言つた、

唯一と言つていい絶滅危惧種ではない生きた化石であり、

女性の天敵 台所の帝王 黒い悪魔 などと恐れられている  
黒光りするGと同じような例え方である。

女性であるノワールからすれば嫌な例えなのは当たり前である。

「え、えつと……そ、それなら、凄いスピードであつちの方向に飛んでいったわよ。  
も、もう追いつくのは無理ナンジャナイカシラ（棒）」

「そつかあ。

せつかくの手がかりだつたんだけどなー」

（いやいやいや気付けよ!? どう聞いても棒読みだよ!?

絶対怪しいだろうが!? なんで気付かねえの!?)

エムは何やらツツコミたそうにしているが……

ノワールにもノワールなりの理由があると、

それなりに理解しているため黙つておくことにしたようだ。

「はあ……。逃したつてなると

あいちゃんに起こられるんだろうなあ……

エム君も追つかけて行つちゃつたから見失つちゃつただろうし……

「いや、俺さつきからずつどこに居るんだけど!?」

ネプテューヌの発言に思いつきりツッコミを入れるエムであつた。

「あれ?! エム君いつの間にここに?!」

「さつきから居たからな?! 僕ずっと居たからな!?

ツッコミいれてたよね?! お前に!!」

この二人、相変わらずの漫才コンビである。

平常運転でなによりではあるが。

ちなみにこっちもアン○ヤツシユだつたりはしない。

「…………」

そんな二人の会話を見て、どう言えば良いのか分からず無言になるノワールだつた。

初めて見る人からすれば普通の反応ではあるが……

「つて、なんかわたしの話ばっかりでごめんね

ところで、あなたはどうしてこんな所に一人で……

つてよく見たら包帯だらけだよ!? 大丈夫!?

「へ?」

ネプテューヌに言われ、ノワールは自分の今の状態に気付く。

そう、先程……エムに薬草を傷口に塗られ、ガーゼを当て包帯を巻かれた箇所が幾つもあるのだ。

「本当に包帯だらけ……」

きつとモンスターにやられたんだね。

けど、安心して！このあたりにいた悪いモンスターは、このわたしが倒したから！」

「トドメは俺だつたけどな」

「……あなたたちにやられたんだけどね」

エムとノワールがそれぞれ別の事をボソッと呟くが、  
「ん？なんか言つた？」

「いや、別に何も？」

ネプテューヌの耳には入つていなかつたようだ。

「つて、それよりも包帯だよ！」

「というか凄いね。綺麗に結んで……自分でしたの？」  
「え……ええつとこれは……そのお……」

言い淀むノワールを見兼ねたのか、

エムが助け舟を出す

「俺がやつたよ」

「え？ エム君が？」

「ああ、幸いこの辺には薬草が生えてたし、

コンパに貰つてたガーゼと包帯があつたからな。

それに、目立つた外傷はなかつたし骨が折れてる様子もなかつたな。内臓の方もおそらく大丈夫だろう」

エムがそんな風にスラスラと言うと、ネプテューヌが疑問を口にする

「エム君つてもしかして……割と多芸多才？」

「だつたのかもな。記憶ないからわからないけど

記憶がないのでわからないと苦笑しているが、

実際割と多芸多才なのだろう。普通、素人が薬草を見つけたりできるものではない。

「それはそれとして……本当に大丈夫？」

「す、擦り傷ぐらいだし、このくらいなんてことないわ

包帯をしつかり巻いてくれたし」

心配そうに聞くネプテューヌにうわずつた声で返答するノワール。

清々しい程に怪しさ満載である。

「怪我や病気の素人診断は危険なんだよ！」

「あれ？俺つてそんな信用ない？」

エムが少し不安そうにそう言うが

ネプテューヌは慌ててそれを否定する。

「いや!? エム君の事を言つたんじゃないよ!?

ただ……記憶喪失のエム君より

本当にその道のプロフェッショナルである

「こんなに頼んだ方が良いんじやないかなあ……」「で」

……………まあそりゃ一理あるな。」

アテニーの意見に一理あるとエムは呟く

「え? ちよつ……いや、その……」

ほんとうにこのくらい大したことないから……」

ネプテューヌのそんな言葉に慌てて大丈夫だ。と言うノワールだが……

「だいじよーぶ！」

いや、そういうことじゃなくて！」

「そんな叫んだだけで都合よく来るわけないでしょ」

コンパを呼ぶネプテューヌにノワールはそうツッコミを入れるが

(それが都合よく——)

「呼んだですか、ねぶねぶ?」

(来るんだよなあ……)

呼ばれてすぐに現れるコンパ。

そして、エムは 都合よく来るんだよなあ。と呟いていた。

「うそお!?

「驚いた?なんてつたつて主人公だからね!

あ、この小説では主人公兼ヒロインだけど!

わたしの主人公スキルは108式まであるんだよ!!

「やれやれ……」

ノワールの信じられないといった表情を見て、ネプテューヌはドヤ顔をし、エムは肩を竦め苦笑した。

「何一般人に馬鹿なこと吹き込んでるのよ。

ちようどアンタが叫んだタイミングで追いついただけよ」

アイエフが馬鹿な事言うんじやないとツツコミながら

たまたま良いタイミングで追いついただけだと説明する。

それでも狙つたようなタイミングになつた辺り彼女の主人公補正が効いているんだろう。

「ところで、わたしに何の用ですか、ねぶねぶ」

「うん。この子……ええーっと、そうだ。まだ名前聞いてなかつたね。  
わたしネプテューヌ。で、こつちがこんぱで、こつちがあいちゃん！」

それでこつちがエム君！」

「アイエフよ、よろしく」

「コンパです、よろしくです」

「改めてだが、俺の名前はエム

とはいえ記憶喪失だから仮名で……本名は不明なんだがな」

ネプテューヌ達の紹介に便乗してエムは苦笑しながら改めて自己紹介する。  
「で、あなたの名前は？」

「……」

「え？」

ノワールの小さな声にネプテューヌは聞こえなかつたのか、  
え？と首を傾げる。

「……ノワールよ」

「へえ、ノワールって言うんだ。なんか友達がいなさそうな名前だね」

「割と失礼だよな……お前……」

ノワールの名乗りにネプテューヌは割と失礼な事を言う。

そして、エムはそれを聞いて苦笑する。

が、エムも少し前にそんな事を考えていたのでブーメランが刺さつていたりするのである。

「ぶつ!?

あ、あなたねえ！普通初対面の相手にそんなこと言う!？」

「ハハハ……（こいつ割とそういうこと言うんだよなあ……普通に）」

ノワールのツッコミにエムは苦笑しながら

ネプテューヌは割と失礼な事言うんだよな……と考えていた。

「ごめんごめん、冗談だつて、冗談。

もう、ただのネプリカンジョークなのにー」

「ネプリカンジョークつてなんだよ……ネプリカンジョークつて……」

ネプテューヌの冗談に、エムはいつも通りツッコミを入れる。が、ネプテューヌは何処か納得のいかない表情を浮かべ……

「エム君！」

「なんだよ？」

「ツツコミのキレがあまい！」

「I G A A A A A !! 黙らつしやいいいい！」

そんな事を言うネプテューヌに、エムはウガアアアア！と怒る。  
決して、何処ぞの魔界城の製作会社の名前を意図して叫んだわけではない。  
「苦労してるのね、あなた……」

「……なんかもう良いかなって思い出したよ」

ノワールの同情の目にエムは哀愁を漂わせながら嘆いた。

「全く……初対面の人がネプ子のノリついていけるわけないでしょ。

コンパ、この子のこと診てあげて。

あと、できればエムが手当てしたところのカバーをしてあげれる？」

「はい、任せます！」

アイエフのお願いにコンパは胸を張つて答える。

ちなみにその時、胸が色々な意味で凄かつた（小並感）とエムは思っていたそうだ。  
「あーっ！ あいちゃんするい！ わたしのセリフとったー！」

「いつまでもあんたに任せると話が進まないのよ」

ネプテューヌの講義にアイエフはため息を吐きながら答える。

「ほんとこんなんで大丈夫だろうか……」

エムのそんな呟きにアイエフとコンパ、そしてノワールは苦笑するしかないのであつた。

—WHAT, S THE NEXT STAGE?—

# Joining a group! 黒い少女は何者?

「はい。これで治療完了です。

と言つてもえむえむができるなかつた部分に消毒して絆創膏を貼つただけで、  
たいしたことはしていませんが」

「小さな傷全然見えてなかつた……視力悪いんだな、俺。

なんで今戦てるのか疑問だけど……眼鏡要るかな……？」

コンパがノワールの傷の手当てを終えたところで

エムは眼鏡買うべきかなあ……とボヤいていた。

「いえ、そんなことないわ。ありがとう。

……えー……つと、確か、コンパ、つて言つたわよね。

あなたは、その……ネプテューヌのお友達なの？」

ノワールはコンパにお礼を言い、気になつた事を質問する。

どうやらネプテューヌとどういう関係なのか知りたいようだ。

「はいです。プラネットューヌにいた頃に、倒れていたねぷねぷを介抱して以来、

ねぷねぶとはふかーい仲ですう！」

「それはまだ言う程深くないというツッコミを入れるべきなのだろうか……」  
コンパの発言にエムは小声で呟く。

「エム、それはツッコミはない方が良いと思うわよ？」

ところで、ノワールはどうしてこんな危険なところに一人でいたの？」

エムの呟きに返しながらアイエフはノワールに問いかける。

「それに傷だらけでした」

コンパも疑問に思つたのか少々不安そうにノワールを見る。

「そ、それは……」

ノワールは流石に答えづらいらしく、口籠る。

当たり前だろう、今はバレていないとほいえ……

自分が皆を襲つて返り討ちにあつた者です。なんてあつさり言えるものではない。

言えるとすればそれはよっぽどの怖いもの知らずか、天然か、大馬鹿者だろう。

それを見たアイエフはノワールに疑いの目を向ける

「……怪しいわね」

(おい、どうするんだノワール……)

お前完全に疑われてるぞ……容疑者Xならぬ容疑者Nになつてるぞ……)

ある程度気付いているエムはどうするべきか悩みつつ不安そうにノワールに視線を

やる。

「え、つと……そのお……それは私もよく分からないというか、何ていうか……」  
「そ、ソレって……もしかして!?」

(あちゃあ……こりや駄目だ……完全に……アウトだ。

ノワールエ……ネプテューヌに気付かれるつて相当駄目じやねえか……)  
口籠つていたノワールにもしや!?となるネプテューヌ。

エムはそれを見て、バレないよう頭を抱える。

口には出してないが、何処ぞの八時に集いそうなドリフのリーダーよろしく、  
ダメだこりや。と言いそうな顔だつた。

「もしかしなくとも……記憶喪失仲間!?」

「ズコオーッ!」

だが、ネプテューヌの答えはエムの予想の斜め上をいつたようだ。  
そして、エムは何処ぞの新喜劇よろしく思いつきりズツコケた。

それはそれは綺麗にズツコケた。

「え? あ、そ、そうそう! 記憶喪失!

ああっ! 思い出せない! きつとモンスターに襲われたせいだわ、ドウシヨー!？」  
(いやいやいや!? 無理あり過ぎるんだろ!?)

棒読み過ぎるし！完全ダウトじやねえか？）

ノワールはネプテューヌの答えに便乗して言うが無理があつた。

それこそ普通なら簡単に嘘だと見抜ける程に。

エムはそれ故に口には出さないがツツコミを心の中で入れている。

「……何、そのわざとらしい演技」

アイエフは少し引きながらノワールにツツコむ。

（デスヨネー、やっぱり即席過ぎてバレバレだよね！）

エムはですよね！と心の中でツツコミを入れる。

ちなみにこの時、エムの顔は——▽——といった感じで目が横一本線になつていたりする。

「記憶喪失じゃお家の場所が分からないです！？」

それだと帰れないですね……困ったです」

「うんうん、わかるよ。記憶喪失って、本人はなんともないのに、

やたらと周りが気を使つたり、同情されたりしていろいろ大変だよね」

「え？」

「あー、たしかに……しかも記憶喪失系主人公になると基本的に闇抱えてるしなあ、

ちよつと共感できr……つて……え？今なんて言つた？」

コンパが心配そうにノワールを見つめ、

ネプテューヌが頷きながら、記憶喪失あるあるを言う  
それを聞いたアイエフはえ?と驚いた顔をし、  
エムはネプテューヌの言葉にわかるわかる。と頷いた後、  
あれ?と首を傾げる。自分の聞き間違いだろうか?とエムは思つたのだろう。  
だが、残念。聞き間違いなどではない。

「そうだ!困つたことがあつたら何でもわたしに相談してね。

記憶喪失の先輩として、相談に乗つてあげる!」

(駄目だー!? 天然<sup>コンパ</sup>&おバカ<sup>ネプテューヌ</sup>コンビが完全に騙されていらつしゃいますノオーウ!?)

もうちよつと疑う事を覚えてエー!?)

ネプテューヌのその言葉聞いたエムは嘘だろ!?とネプテューヌ達を見る。

というか、あつさり騙されてるネプテューヌ達の事を考えると不安になつてているよう  
だ。

頑張れ、我らが主人公。いづれやつてくる胃痛と頭痛にも負けるんじやないぞ!

「そ、それは助かるわ……」

ノワールはこんな簡単に騙されるとは思つていなかつたのか  
少し笑みを引き攣らせながら感謝の言葉を述べる

「ところで、これからノワールさんはどうするです？」

お家がわからないと、どこに送り届けていいかわからないです」

「……そうね……ハア。

試しに教会にでも届けてみたら？ 教会なら保護してくれるんじゃないかしら？」

コンパの困った様子に

何処か呆れたようにアイエフはため息を吐き、教会はどうだ？と案を出す、だが……

「ええつ！」

「教会は駄目です！」

女神さんを呼び捨てにするような人たちがいる所に安心して任せることなんてでき  
ないです！」

ノワールは流石にそれはまずいと思ったのか驚き、

コンパはあの時の教会の職員の態度を思い出し、猛反対する。

「俺もコンパの意見に賛成だ。今のあそこはきな臭い。

信頼に値できる組織ではないと思うぜ」

「……つ」

エムもコンパの意見に賛成する、がその言葉を聞いたノワールは少し暗い表情をする。

まるで何もできていない自分が悔しい。そんな雰囲気を漂わせていた。

結局どうすべきか。と悩んでいるところで、ネプテューヌから一つ案が出る。

「そうだ!

記憶が戻るまで、わたしたちと一緒にいようよ!」

(あ、危なかつたあ……)

(いや、そんな表情しても普通の人には勘づかれるからね?)

あの二人が例外なだけで、俺とアイエフは気付いてるからね?・)

それを聞いたノワールはホッと安心して息を吐く。

が、それを見たエムは心の中で再びツッコミを入れるのであつた。

「(教会なんかに連れて行かれたら正体がバレるどころか、保護されたなんて

説明されたら今以上に私の立場がなくなつちゃうじやない

ひとまず、ここはネプテューヌの言葉に甘えてしばらく一緒に……) つて

……ええつ!? 一緒お!?

ノワールは色々と思考していたが、ネプテューヌの意見が予想外だつたのか目を丸くする。

彼女はラステイションの教会とは深い関わりがあるだけでなく、

記憶喪失になる前のネプテューヌとはそれなりの腐れ縁でもあるのだ。

いきなりは色々と心の準備がいるだろう。

「もしかして嫌だつた？」

「けど、せつかくの記憶喪失仲間同士なんだし、仲良くしようよ！」

「そうです。その方が教会に任せるよる、ずーっと安心です。」

「それに、人数が増えたほうが楽しそうです！」

（多分そういう意味じやないと思うぞ……）

ネプテューヌとコンパの言い分にエムは心の中でツツコミを入れる。  
事実、エムの予想通りである。

「あ、いや、嫌とかそんなんじやなくて……」

えーっと、その、驚いたつていうかなんていうか……」

流石に本当の事は言えないのか、徐々に声が小さくなつていくノワールだつた。無理  
もないが。

「じゃあ、決まりー！改めて、よろしくね。ノワール！」

ネプテューヌはそんな風に笑つた。

（それにもしても……教会に連れていくつて話した時やけに反応したな。  
まるであそこに行きたくないつてレベルで。

……ラステイションを治めるのはブラックハートって女神様だつたか?

……黒色メイン……それにあの白髪の少女はおそらくノワール。

変身できる……つまり……いや、まさか……な)

ノワールの慌てようなどから、エムは一つの予想に至る。

だが、まだ予想なだけで確信にも至っていないので口には出さないようだ。

こう見えてこの男。割と頭の回転が早く、勘が鋭い。

ただ、異性からの好意にはまあまあ鈍いのが玉に瑕である。

「さて、そろそろラステイションに帰ろうぜ。

シアンに報告もしないといけないしな」

いくら考えても仕方がないと思つたのか、エムは話を切り替える。

「あ！ そうだつた！ わたしたち、シアンの依頼を受けてここに来てたんだ！」

「忘れてんのかあああい！」

すっかり忘れていたネプテューヌに思わずツッコミを入れたエムだった。

今日も平常運転である。

「……いつもこんなやり取りをしてるの？」

「……そうなのよ」

「……大変そうね。主にエムが」

「そうね……」

それを見た、ノワールとアイエフがそんな会話をしていたのを  
エムとネプテューヌは知らない。

| W H A T ;   S   T H E   N E X T   S T A G E ? |

# 無事Return!～これから行う事を整理しよう

「ラステイションよ、わたしはかえってきたぞー！」

「恥ずかしいから……突然街中で呼ばないでくれる？」

「そうだそだ、タダでさえ1回やらかしてんのにまた目立つのがめんどぞ……俺」

そんなわけで、道中何事もなく

ネプテューヌ一行はラステイションに帰ってきたのであつた。

「いやー、ちょっと出かけてただけなのに、なんか懐かしさ感じちゃつてさ

まあ、リアルでは二週間経つてるからおかしな話じやないんだけどねー！」

「メタいわ!? リアルの話すんなし?!

てか作者が新生活で色々大変なんだから仕方ないだろ!?

唐突にメタ空間に入るネプテューヌにツッコミを入れるエムであつた。

作者のリアル事情を暴露するのも困ったものである。

「あ、そだ。ノワールはさ、なんか思い出せた? この街に見覚えとかない?」

「べ、別に、何モ思イ出セナイワ」

(綺麗な棒読みでいつそ清々しいな……)

ネプテューヌの質問に上擦つた声で答えるノワール。

清々しいほどの棒読みと動搖でいつそ開き直れば良いのに。とエムは苦笑いするのであつた。

「そつかあ。さつきのダンジョンからも近いし、

この街の人かと思つたんだけど違つたみたいだね」

ネプテューヌは少し残念そうに言う。

こういつた他人の事を自分の事の様に心配するところがネプテューヌの良い所である。

のだが、今回は完全に騙されているのでなんというか残念に見えてしまう。

(ネプテューヌエ……良い所全面に出してるシーンだけど……)

騙されてるから……完全におバカっぷりを見せちゃってるだけだぞ……)

ネプテューヌの様子を見て色々と複雑そうな表情を浮かべるエムなのであつた。「そういえば、あなた達も記憶喪失らしいけど、あなた達の方はどうなの?」

ノワールはふと思い出したようにネプテューヌとエムに質問する。

それを聞いたネプテューヌとエムは互いに顔を見合わせ、苦笑する。

「いやー……それが……」

「俺達もさっぱりなんだ、ただ……プラネットューヌをなんか懐かしく感じたから

もしかすると、プラネテュースの住人だったのかな。つて俺は思つてる

「え?! そうなの?! わたしつて、プラネテュースの住人だったの?!」

「いや、あくまで俺であつて、ネプテュース、お前じやないぞ?」

他人の記憶の事を俺が分かるわけねえだろうに

(まあ……あの予想が正しかつたら……)

ネプテュースは十中八九、そういう存在なんだろうがな)』

エムの予想に驚くネプテュース。

だが、ネプテュースではなくエム自身の予想であるので

ネプテュースが何処の国の住人なのかはいつさい分かつていない。

ただし、エムは己の考えが正しければ、

ネプテュースがいつたいどういう存在なのか。ということは確信に至るようだ。

「そつかあ、そだよねー。」

あ、そうだ! ノワール! 試しに二人で一緒に何かに頭をぶつけてみようよ!

わたしは豆腐の角で、ノワールはタンスの角とか!」

「いやよ! なんであなたが豆腐で私がタンスなのよ!」

ネプテュースの意見にノワールはツッコミを入れる。

ノワールのぶつける角が明らかに記憶を取り戻すより、死ぬ可能性の方が高い角なの

である。

これには流石に文句の一つも言いたくなるだろう。

「ほら、わたしの頭つてとつてもデリケートな感じでしょ？」

それに比べてノワールのは石頭っぽいっていうかさー」

ネプテューヌのその言葉を聞いたノワールは青筋を額に浮かべ笑う

「……なら、私があなたを力チンコチンに凍つた豆腐の角で殴つてあげましようか？」

「ねぶつ!? や、やだなあ、ノワール。ただの冗談なのに目がマジだよ、目が」

ただし、ネプテューヌの言う通り、目がマジだつた。笑つていなかつた。

「絹ごし？ それとも木綿？ 最後くらいあなたの好きな豆腐を選ばせてあげるわよ」

「いやいや、食べ物を鈍器にしちや駄目だつてば、ノワール！」

黙つてないであいちゃんもこんばもエム君も助けてよー！」

ノワールの言葉に冷や汗をかきながら

ネプテューヌはアイエフとコンパとエムに助けを求めるのであつた。

「ねぶねぶ、さつそくノワールさんと仲良しですね」

「それにもしても、豆腐豆腐連呼されるとお腹が減つてくるわね」

「それなー……泰山の真つ赤な激辛麻婆豆腐食いたくなつてきたぜ」

「……何故かしら、今頭の中で人の不幸でメシウマするエセ神父が思い浮かんだわ」

コンパは仲が良さそうでよかつたと笑い。

アイエフとエムは食事の話をする。

ちなみにエムが話題に出した麻婆豆腐を出す中華料理店「泰山」は何故かラステイションに実在するのである  
どういう理屈なのかは不明であるが、

あの世界のモノが存在することにはツッコミを入れてはいけない。

『温めますか?』

「……奇遇だな……話題出した俺もその神父、思い浮かべた。

というか月ではお店開いてたり、異世界ではラーメン屋営んでそうだよなその工セ神

父

エムは頭の中で 良い声 で 温めますか?と聞いてくる目の死んだカソックを着た男を思い浮かべながら呟いた。

そんな話題でアイエフとエムが苦笑していると  
コンパがはつと思いついたように案を出す

「そうです！今夜はお豆腐を使ったお料理でノワールさんの歓迎会をしましょー！」  
「あ、それいいかも。歓迎会なら鍋にしてみんなで食べましょー！」

「いいね！鍋があ……色々あつて悩むなあ……」

キムチも良いし……ちゃんこも良いし……選り取りみどりだ……！」

コンパの案にアイエフは賛成し、鍋はどうだ。と言い、エムはそれに便乗する形で鍋料理を口に出す。

ちなみに涎が少し口から出ていたりする。

「ねぷつ!? わたしもしかして忘れられてる?」

もしかしなくともである。

「たつだいまーー！ ちゃんとモンスター倒してきたよーー！」

そんなわけで、シアンの工場（食堂）に帰ってきたネブテユース一行。

今回は迷わなかつたと追記しておこう。

「ほんとか!? 助かるよ、これで部品不足に悩まされる心配がなくなるつてもんだ」

「ラステイションでの初めての仕事は無事に完了ね」

シアンの感謝の言葉にアイエフは満足そうに頷く。

それを聞いてエムは苦笑する。

「途中色々あつて一時はどうなるかと思つたけどな……」

「まあ、何事もなかつたし結果オーライよ」

エムの言葉にアイエフも同じように苦笑する。

「そういえば……」

「ん? どうした、シアン?」

シアンはふと疑問に思つたのか、ノワールの方を見て  
「一人増えてる気がするんだが、その子は誰なんだ?」

と言つた。それもそうだろう。

行つた時より一人増えているんだから疑問を持つのもおかしくはない。

何処ぞの大手RPGシリーズのVでは

道中でモンスターを仲間にして増えるなんてよくある事だが……

あいにくこの世界は天空な装備もなければマスターなドラゴンも存在しないのである。

「ああ、そういえば紹介がまだだつたわね、彼女はノワール。

交易路で出会つたんだけど、どうも記憶喪失みたいだから連れてきたの」

「そうなのか。……つて、あれ?

……その子、どこかで見たことがあるような……?」

そうなのか。と納得しけたシアンだが

うん?と首を傾げ、思い出したのか顔を少し青くして  
「あ、ああ、も、ももももしかして……女神のプラックハート様!?  
そんな風に叫んだ。

「ギクッ!?」

そしてノワールは図星なのか。ギクッ!?と声に出した。  
そう、声に出してしまった。

(出したあーっ?!思いつきり口に出したあーっ?!もう隠す気ねえだろノワール!?  
いや、予想通りだつたけど口に出すなよお!?)

それを聞いてエムは頭を抱え、

コンパは目を丸くして聞いてくる

「ノワールさんがプラックハート様です!!」

「な、なんだつてー（棒）

ちなみにネプテューヌは何処ぞの饅頭のような顔でそんな風に棒読みで言い、  
「あ、ありのまま今起こつたことを話すぜ。

”拾つた記憶喪失の女の子が実は女神様だつた。  
何を言つてるかわからねーと思うが以下略ー!!」  
一旦落ち着いてから困惑した様子で

銀の戦車の幽波紋を持つてそうな男の台詞を言うネプテューヌだつた。

「そ、そんなわけないでしょ!」

ノワールは慌てて否定するが声が上擦つてゐるのでバレバレである。エムはもう見てられないとノワールから目を逸らしている。

「私のこれは、そ、その……コスプレが趣味で、

それで……ブラックハート様が好きだから、その……

(とつさとは言え、さすがに記憶喪失でこれは無理があるわよね……)

ノワールは慌てて理由を言うが、即席で作つた理由の為。

本人でも流石に無理があるな……と思う程のバレバレの嘘だつた。

「ああ、なんだ。それでブラックハート様そつくりの格好をしてたんだな。あまりにもそつくりだつたからてつきり本人だと思つたよ」

「残念ですう。ノワールさんが女神さんなら、

シアンさんのお願いを聞いてもらえたかも知れないのに……」

「まつたくノワールつたら人騒がせなんだからー」

「ンガアツ!」

だが……シアン、コンパ、ネプテューヌは簡単に騙された。

そしてエムが再びズツコケた、今回は何処ぞの忍者の卵のアニメよろしくズツコケ

た。

「ん？ エム君。どつたのー？」

「い、いや……なんでもない……なんでもない……うん……なんでもないぜ……  
 （駄目だこの天然<sup>コンパ</sup>&おバカ<sup>ネプテューヌ&シャン</sup>コンビ……早くなんとかしないと……）」

ネプテューヌがズッコケたエムを見て、どうしたのか聞いてくる。  
 だが、言い難い事の為、黙つておくことにしたようだ。

（あ、危なかつたあ……）

ノワールは安心したようにほつと一息吐いた。

エムは全然安心できていないので……

「けど、普段から女神様のコスプレをしているなんて、

ノワールって意外と痛い趣味なんだね」

「ぶーっ！」

ネプテューヌの割と失礼な発言にノワールは思いつきり吹く。

「痛いって言うな！ しようがないでしょ、これにはそれなりの事情があるんだから！」

ノワールは怒った様子でネプテューヌに言う。

「まあまあ、こんなところで騒ぐのはやめましょ、二人共

シアン、わたしたちはもう帰るけど、他に用はないわよね？」

「もう帰るのか?なら、飯でも食つてけよ。お礼にご馳走してやるよ」

シアンはアイエフが帰ると言うと、今回の依頼のお礼に食事をご馳走する。と言う。

「じゃあ、お言葉に甘えるかね……痛てて……」

エムはシアンのその言葉に頭を擦りながら言う。

「えむえむ、大丈夫ですか?」

コンパは心配そうに、エムを見る。

「うん……大丈夫だ……てか自業自得だしな……」

「はむはむはむ……。おいしー!」

シアン、このハンバーグ、すつごく美味しいよ

「ステップも体の芯から暖まつておいしいです」

ネプテューヌはシアンのご馳走してくれた、ハンバーグを頬張りながらそんな風に笑う。

「ほら、ネプテューヌ。ソースが口についてるぞ。それと食べながら喋んなよ?」

エムはそんな風にネプテューヌの口についているソースをハンカチで拭き取りながら、そんな風に言う。

その様子は手間のかかる妹の面倒を見る兄のようだった。

「ん、ありがとエム君！なんかこうして見るとお兄ちゃんみたいだねー」「お、おう……そ、そとか……そう言われると割と恥ずかしいな……」

ネプテューヌの笑顔に、

少しエムは恥ずかしそうに頬を搔いてネプテューヌから目を逸らす。  
「ははは、うちの母親の自信作なんだ。気に入つて貰えて嬉しいよ」

シアンは、嬉しそうに胸を張る。

「凄く豪華な料理だけど、私まで御馳走になつていいのかしら？」

「そんな細かいこと気にしないで食つてくれよ。

「飯はみんなで食つた方が旨いんだからさ」

ノワールの不安そうな言葉にシアンは笑いながら答える。

「そうよ。これはあなたの歓迎会なんだから、遠慮しないで。

もつとも、あなたの大好きな豆腐パーティじやなくなつたけどね」

「あ、あれはネプテューヌのせいだ、

私は別に豆腐が好きな訳じゃないわよ。誤解しないで」

ノワールは少々ムスツとした顔でそんな風にアイエフに抗議をする。

「豆腐……麻婆豆腐食いたかつたなあ……」

「はいはい。そういうことにしてあげるわ

それとエム、あなたが豆腐の事を引っ張つてどうするのよ」

アイエフは呆れながら、エムにそうツッコむ

「うつ、悪い……泰山の麻婆豆腐食べてみたくってさ……」

「泰山の!?」

エムの一言にノワールとシアンは驚いたように叫ぶ

「ウエ!? なに!? え!? 俺まずいこと言つた!?」

「あ、いや…………まずいことつて言うよりは…………そのー…………」

「あそここの麻婆豆腐を食べて無事で居れた奴は少ないんだよ…………」

茶色の制服を着た女子と黒い制服の男子。それとカソックを着た男ぐらいなんだ

……

ノワールは口籠り、シアンは少し青い顔をしながら理由を述べる。

「なんでかしら…………その人達知ってる気がするわ…………」

アイエフは頭を抱えて呟く。どうやら中の人のナニカを受信したようだと、そんな話題で話している時だつた。

「うげええー…………!?

誰!? この料理にナス入れたの！ 万死に値するよ！」  
ネプテューヌが嫌そうな顔をしてそんな風に言う。

「ねふねふ、もしかしてナスが嫌いなんですか？」

コンパは、ナスが嫌いなのか？とネプテューヌに聞く。

ネプテューヌはそれを聞き、とても嫌そうな顔で言う。

「嫌いってレベルじゃないよー！」

こんばこそよくこんなにグニョグニョしたの食べれるね！

そうだ！何か思い出すかもしれないし、このナス、ノワールにあげるー！

先輩から後輩へのプレゼントだよ！」

そして、思いついたかのようにナスをノワールの皿に置く。

「……えつ」

「ネプ子、子供じやないんだし、好き嫌い言わず全部食べなさい！」

(オカンか……)

ノワールは一瞬理解できなかつたように固まり、

アイエフは母親のように注意する。

ちなみにアイエフの注意を聞いてエムは母親かな？と思つていた。

「何言つてるのさ、あいちゃん！」

ナスを食べると名人だつてダメージを受けるほど凶悪な食べ物なんだから、か弱き可憐な乙女なわたしが食べたらどうなつてしまふことになるか……

うう……想像しただけでも恐ろしいよー……」

「だつたらそんなもの他の人にあげちゃ駄目でしょ！言い訳はいいから、好き嫌いはせずにちゃんと食べなさい！」

ネプテューヌは早口で説明しながら青い顔になる。

アイエフは少々ムツとした顔になり無理矢理ナスをネプテューヌの口に突っ込む

「むぐつ!?あ、あいちやん……や、やめ……！」

「もしかしたら、ナスがきつかけで何か思い出すかもしれないわよ」

ネプテューヌが顔を青くしながら口をもぐもぐさせ、

アイエフは少し悪戯じみた笑みを浮かべてナスをグイグイとネプテューヌの口に突っ込む。

「むぐむぐつ！あ、あいちやん……お願……や、やめ……!?」

字だけで見れば百合の花が咲きそつだが、決して百合の花が咲くような様子ではない。

ちなみにこんな事をしているアイエフだが、

後々別次元の自分がナス嫌いになるとは思いもしないだろう。

「なにしてんだあいつら……」

てかナスって……田楽にしたり漬物にすると美味しいんだけどなあ……」

「……」

エムはそんな風にボヤきながら、ナスを食べ、

ノワールは無言でネプレテュース達、二人の様子を見ていた。

「……もしかして、騒がしいのは苦手ですか？」

「いえ、そんなことないわ。……なんかこういう賑やかな食事つて初めてだから、つい」

コンパは不安そうにノワールを見て、

ノワールは恥ずかしそうに頬を染めながら笑う

「そうだつたのか……ま、これからしばらくは一緒に居れるだろ？」

ノワールの言葉を聞いたエムはニヒヒと笑う。

「……その件なんだけど、私にあなたたちを手伝わせてくれないかしら？」

「ノワールさんが、わたしたちのお手伝いです？」

ノワールの意見にコンパはきよとんとして聞き返す。

「おおー！なになに、ノワール一緒に戦ってくれんの!?」

「ええ。ただあなたたちと一緒にいるのも気が引けるし、それに意外と強いのよ、私が  
いつの間にかアイエフから逃れたネプレテュースの嬉しそうな声にノワールは微笑んで答える。

(まあ、それは俺が一番経験しましたし……)

エムは聞こえない程度に呟いた。

「どうか、ネプテューヌ」

「んー? なに? エム君?」

そんな時、ふと思い出したのかエムはネプテューヌに声を掛ける。  
ネプテューヌも何事かとエムに聞く。

「ナスはどうした?」

「うつ……」

エムのその言葉に口籠るネプテューヌ。

その様子を見て、エムは察したのか眉間に片手で搞んでため息を吐く。

「残したのな……」

「はい……」

少々申し訳なさそうに、ネプテューヌは答える。

「はあ……仕方ない……」

「俺がナスは食うからお前はハンバーグ食つとけ。俺の食いかけだけど」

エムは仕方ない。と自分の皿にあるハンバーグをネプテューヌの皿に置き、  
ネプテューヌの皿にあつたナスを自分の皿に置いて口にした。

「え?! いいの?! やつたー! エム君大好きー!!」

「ぱっ!? 女の子が軽々しくそんな事を口に出すんじゃねえよ……」

恥ずかしいだろうが……」

ネプテューヌの一言に頬を赤く染めて、ネプテューヌから目を逸らしながらナスを食べました。

アイエフはそれを見ながら苦笑してノワールに答える。

「やれやれ……」

まあ、コチラとしてはあなたが仲間になつてくれると頼もしいわ」

「……え!？」

アイエフの言葉にノワールは目を丸くしてアイエフを見る。

「そろそろわたしとエムだけじや、

この二人にツツコミを入れるのに疲れていたのよ。主にエムがね」

「ああ……そういうことね」

「やめて、ちょっと悲しくなる……」

アイエフのその言葉にノワールは同情の目をエムに向ける。

エムは顔を手で覆い、涙声でそんな風に言う。

「いやあ、まさかこんな序盤で5人目が仲間になるなんて、幸先調子がいいね!」

「なあ、俺らつて馬車持つてたつけ? 五人以上だと馬車いると思うんだけど……」

「エム君、その辺は大丈夫だよー！」

「ネプティューヌシリーズはどれだけ人數居ても馬車なしでダンジョン攻略できるからね！」

「メタいつての……まあ、たしかにそららしいけどな……」

「ネプティューヌとエムは微妙にメタい話をする。

「ははは！なら、その幸先ついでにまた仕事を受けてくれないか？」

「今年開催される総合技術博覧会に出展する武器のモニターを頼みたいんだ」

「それを聞いてシアンは笑いながら、もう一つ仕事を受けて欲しいと頼む。

「……そうこう、ギジュツ……博覧会？」

「それってなんですか？お祭りでもあるんですか？」

「コンパ、言えてない言えてない……総合技術博覧会な」

「……えーっと……しようこう、ギジュツ博覧会！」

「あ、うん……俺が悪かつた……シアン続けてくれ……」

「エムはコンパに言えてないぞ。と正そうとするのだが、

「噛み噛みなコンパを見てシアンに続けてくれと頼んだ。

「どうやら諦めたようだ。

「ああ、ラステイションでは四年に一度、総合技術博覧会つてのがあって、

いろんな会社が決められたジャンルで展示を行う催しがあるんだ  
目的は技術交流らしいが、それだけじゃない。

出展したモノの中で、もつとも優れた展示品には女神様から直々にトロフィーが贈ら  
れるんだ」

「へー……そりやまた豪華な催しだな。

四年に一度つてのが運動とかの競技で競いそうな感じがあるけど……」

シアンの説明にエムは感心する。

ただし、四年に一度というワードに何かを感じたようだ。

「……でも、トロフィーでアヴニールさんをやつっかけるですか？」

「いやそんな聖杯みたいな事は流石にできないだろう……」

コンパの天然発言にエムは苦笑してツツコミを入れる

「違う違う、重要なのは女神様の方だ。

博覧会で女神様に会つて、直談判しようつて事さ！」

シアンはそんな風に言う。

どうやら彼女には彼女なりの考えがあつたようだ、

いやおそらく彼女だけでなく他のアヴニールと敵対している企業も同じ考え方なのだ  
ろう。

(さて……そんなに上手くいくもんかね……)

現にその女神様は此処に居るし……それに、教会の職員の態度を見る限りじや……女神を祀る教会の実権は実質アヴニールが握つてると考えた方が良い……頼んだところで……一人の女神だけでどうにかできる問題の域を既に超えている可能性が高い……)

エムはそんなシアンの考えを聞き、少々難しそうな表情を浮かベノワールに視線を向ける。

そのノワールはというと……

「…………」

少し複雑そうな顔で沈黙していた。

そしてシアンの考えを聞いたコンパは合点がいったのかポンと右手を拳の形にして、左の掌に叩く。

「なるほどです！」

それで、シアンさんが博覧会に出展するわけですね』

「ああ。その為の武器のモニターをお前たちに頼みたいんだ」

シアンは頷いて、ネプテューヌ達を見る。

「そんなのお安い御用だよ！」

それで、武器のモニターって何をすればいいの？」

「ネプテューヌは胸を叩いて答える、どうやるのかシアンに聞いた。

「とにかくこの武器を使って、その感想をフィードバックしてくれればいい」「なーんだ、今度は意外と簡単そうだね」

「これなら、他のお仕事と一緒にできそうです」

シアンの説明にネプテューヌとコンパは安心したように言う。

「……なら、アヴニールの仕事を受けてみるのはどうかしら？」

「何言つてゐのさ、ノワール！ アヴニールは悪いやつなんだよ！」

そんなのに協力するなんてぜーつたい嫌！」

ノワールの提案に猛反対するネプテューヌだが、

「いや、……その案、意外と良いかもしないぜ」

「そうね、たしかにいい提案だわ」

エムとアイエフは意外と良い案だろう。と睨んだ。

それを不思議に思つたコンパは二人にどういうことかと聞く。

「どういうことですか？えむえむ、あいちやん」

「中小企業がモンスターのせいで部品や原材料の流通に困つてゐるのなら、きつとそれはアヴニールも一緒にいるはず」

「もしかしたら受ける仕事の内容によつては、

アヴニールが博覧会に何を出展しようとしているのかもわかるかもしれないわ

(そして、上手く行けば教会が私に隠しているアヴニールの実態や企みもきつと……)

「ああ、それに相手から信頼されるようになつたら

俺たちが疑われる可能性が少なくなつてそれなりに行動もし易いし……：

更にいえばどういう輩がアヴニールを経営しているのかも知れて今後の対策にもな

る。

上手く行けば一石二鳥にも三鳥にもなる案だ」

アイエフ、ノワール、エムが順番にどういうメリットがあるかを説明する。

「うー……ん。

でも、なんか釈然としないんだよなー……」

だが、それを聞いてもネプテューヌは納得のいく表情を浮かべない。

「まあ、それはあるな……俺も妙にモヤモヤしてる。

なんか小骨が喉に刺さつてる気分なんだ……」

「まつたく、贅沢言つてないの。

わたししだつて、アヴニールの為に何かしてあげるのは嫌よ。

けど、時には相手を知ることだって大切なのよ」

エムは頭を搔き、難しそうな表情を浮かべる。  
アイエフは少々嫌そうな表情を浮かべる。

「ねぷねぷ、今は我慢するです」

「ううー……ん、こんばがそう言うなら仕方ないかあ……」

コンパの言葉に仕方がないと妥協するネプテューヌ。

「おい、わたしは無視かよ」

「あはは……まあまあ……怒るなつてアイエフ……」

それを見たアイエフは青筋を額に浮かべて機嫌悪そうに呟き、

そんなアイエフの言葉を聞いたエムが苦笑してまあまあ。と咎めていた。

「……あなたたちも苦労してるのね」

ノワールは二人の様子を見て苦笑しながらそう言つたのだつた。

—WHAT, S THE NEXT STAGE?—

# ときめき!? デートのPromise!?

此処はラスティイションのホテル——

ネプテューヌ達が泊まっている場所である。

そこで鼻歌を歌つている機嫌が良さそうな少女がいた。

「じゃじゃーん。メガネ買っちゃったー

これさえあれば、私の正体を怪しまれることはないはずだわ！」

その少女の名はノワール。

このラスティイションの女神、ブラツクハートなのだが……

訳があり正体を隠しているのである。

こうして見るとただの少女にしか思えないのだが、女神である。……女神なのである。

女神のイメージが崩れそうだが……

これがゲームギョウ界では当たり前なので覚悟して欲しい。いや、ほんとに。

「もう……今なんだか不名誉な紹介のされ方をした気がするわ……」

さらつと地の文を読まないでいただきたいものである。

「まあ、良いわ。さつそくかけてみましょ。  
え……と、鏡、鏡は……つと、あつた」

ノワールは早速鏡を見つけ、

鏡の前でメガネをかける。

ここでいう鏡は 等身を写す鏡ではなく

化粧などをする時に使う、よく女性の部屋にある鏡だと補足しておこう。

「……うん。我ながら良く似合ってるじゃない♪

これなら、完璧に正体を隠せそうね！」

赤い四角のフレームのメガネをかけながらノワールは自信満々に笑う。

だが、よく考えて欲しい。メガネをかけた程度で正体を隠せるだろうか？

答えは否。隠せるわけがない。

これで騙されるとなれば……よっぽどの馬鹿か、目が悪い者である。

こういうところが抜けている、

うつかり者の女神、ノワールなのであつた。

うつかりと言えど、

アイエフと似たような声をしたアカイアクマではないのであしからず。

ちなみにこの時、アイエフが可愛らしいクチュン！というクシヤミをしていたと追記

しておこう。

「今までメガネってかけたことなかつたけど、意外と似合うわね」  
ノワールはそんな風に呟いて、鏡の顔でいろんな表情を作る。  
笑顔だつたり、しかめつ面だつたり、苦笑いだつたりと。

「…………うん、なんかいかにも出来る女つて感じでかつこいいかも。  
目にも良いつて聞くし、デスクワークの時はかけてみようかしら。ふふつ」  
そんな風に笑っている時だった。

「ノワール、シアンがプリンをくれたんだが、ネプテューヌ達と……あつ  
「ふえ？」

コンコンと扉を叩いてエムが入ってきた。そう扉を開けて入つてきたのだつた。  
メガネをかけて鏡の前で微笑んでいるノワールを見てエムは何を思つたのだろうか、  
そつと扉を閉めながら帰ろうとする。

「……悪い邪魔したな」

「待つて!? 待つて!! 何か勘違いしてない!?」

エムの様子を見て、ノワールは慌ててエムを引き留める。

「いや、大丈夫。俺は別にお前が眼鏡を掛けて鏡の前で

妖しい笑みを浮かべても気にしないから。それでも俺は友達だと思ってるから！」

サムズアップをして歯を見せながらエムは笑顔を作る。

「やつぱり思いつきり勘違いしてるじゃない!?」

別に妖しい笑みは浮かべてないから!?

ちょつと似合ってるなあ……って思つてただけだから!?

ノワールは慌てて誤解だと、エムの腕を引っ張りながら訴える。

「わっ!? ちよ、おま!? そんな引っ張つたら……うお!?」

「へ? ……きや!?

慌ててエムは言うが、それでもノワールは引っ張り続けた為に、

エムは思いつきりバランスを崩して、ノワールの上に覆い被さつてしまう。  
「痛たた……ノワール……大丈……夫……か……」

「え……ええ……大……丈……夫……?」

エムは、頭を擦りながら目を開けて、固まる。  
同じくノワールも目を開け、固まる。

お互いの顔がとても近くに見えたのだ。

そう、正にその体制は……エムがノワールを押し倒している状態だった。

「…………」

無言だつた、すぐに理解などできる訳もない。

そして、一周まわって冷静になつたのか、お互に顔を赤く染める。

「な……な……な……!?」

「…………ふう。

…………ごめんなさいすぐ退きます!!」

ノワールはパニックになつたのか口を魚のようにパクパクし、エムは一呼吸おき、敬語になつてノワールの上からすぐに退いた。そして床に座り込んだまま、

また、しばらく無言になりある程度の時間が経過する。

それは彼らにとつては数分か、数時間か……

少なくとも彼らの体感ではとても長い時間だつた。

「…………あの…………さ」

「…………なにかしら」

これ以上の無言は耐えきれないとエムは感じたのかノワールに話し掛ける。

「その眼鏡つてさ…………変装のつもりか?」

「そうだけど…………つてなんであなたが知つてるのよ!まさか!」

エムの言葉にまさか!?とノワールは身体を腕で抱き締めて顔を赤くする

「ちげーよ!覗いてねえからな!

お前の立場上変装が必要だろうな。と思つただけだつづーの!?

「へ?……まさか気付いてたの?」

エムは弁明しながら何故そう思つたのか述べる。

それを聞いて、ノワールはきよとんとした顔になり聞いてくる。

「……気付いてないのはネプテューヌとコンパとシアンぐらいだぞ?」

「うそお……バレてたの……」

エムはノワールの言葉に呆れた表情を浮かべて答える。

それを聞いたノワールは顔を手で覆い隠した。

「まあな、でも言わねえよ……お前がラステイションの女神様だつて事は」

「え?……良いの?私はあなたたちを襲つたのよ?なのに……」

エムの言葉にノワールは驚いた様子で何故なのかと聞いてくる

「……お前が襲つたのには理由があるだろ?」

例えば……教会の職員達の信頼を取り戻す為。とかな」

「うつ……そうね……それで合つてるわ……」

エムは苦笑して答え、

ノワールは何処か恥ずかしそうに顔を赤くする。

「あ、でも聞きたい事が一つだけある」

「一つ……？」

エムは人差し指を立てながら、ノワールにそう告げ、ノワールはそれを聞き首を傾げる。

「ああ、つっても些細な事なんだけどさ

ズバリ聞くぜ。ノワール、ネプテューヌはプラネテューヌの女神で間違いないな？」

確信を得た表情でノワールに聞いた。  
ノワールは俯き、少し言うべきか悩む表情を見せたが、

すぐ顔を上げエムの目を見て答える。

「……ええ、間違いないわ。  
ネプテューヌはプラネテューヌの女神。パー・ブル・ハートよ」

「やつぱりか……」

ノワールの答えにエムは片手で頭を抑えて天井を見上げる。

予想通りと言えば予想通りなのだが、やはり信じられないのか、ため息を吐く

「はあ……パー・ティリーダーが技術力面では圧倒的な国であるプラネテューヌの女神様  
だつた。とか……」

後から主人公が勇者でした。つて真実を聞かされるレベルじやねえぞ……

予想通りと言えば予想通りだつたが……困つたなあ……」

エムは俯いて、ため息を吐く。

女神だという真実をそう簡単に打ち明けれども苦もないからだ。しばらく、エムは悩んだ様子だつたが。

ふと顔を上げ、頷く。

「……よし、この事実は本当に明かす必要がある時まで黙つておこう。下手に混乱されるよりはよっぽど良いしな……」

エムのそんな言葉にノワールは一瞬驚いた様子を見せるが、すぐに微笑んで、

「エム……あなた……」

「ん? なんだよ?」

「ネプテューヌの事が本当に大切なね」

そんな風に言った。

「ばつ!……べ、別にそんなんじやねえよ!」

アイツが暗いと……その……パーティ全体の雰囲気が暗くなりそうだし……」

エムは顔を赤くして、目を逸らしながらボソッと呟く。

「ふふつ、違ひないわね。あの様子だとネプテューヌがムードメーカーみたいだし」

そんなエムの様子を見てクスクスと笑うノワールだつた。

「あー！もう！笑うんじゃねえ！恥ずかしいだろ？！それとノワール！！」  
エムは顔を赤くして頭を搔き、ノワールの名前を呼ぶ

「いきなりどうしたのよ？」

「……眼鏡だけじゃ、変装にはならねえぞ？」

ノワールの不思議そうな顔に一瞬言うべきか悩んだエムだったが、  
一拍あけて、ハツキリと真実を伝えるのだった。

「へ？……嘘でしょ？」

「いや、マジで。服とかも変えないと変装にはならんぞ。

多分普通の人気が見ても、いつも見てる人が眼鏡かけた程度の認識しかないと思うぞ。  
劇的な Before After してねえよ。びふおく、あふたく！つてレベルだよ  
？」

信じられない。といった表情のノワールに  
エムは呆れた表情で答える。

そんなエムの言葉にノワールは納得がいかなかつたのか  
顔を俯かせ、プルプルと身体を震わせ……

「じゃあ……付……な……よ……」

小さく何かを呟いた。

え? ノワール、今なんか言つた?

エムはノワールの声を上手く聞き取れなかつたらしく、聞き返す。

「だから……それだったら、付き合いなきいつて言つてるのよ!!」

「…………は？」

ノワールのそんな言葉に一瞬理解できなかつた様子で固まつたエム。しばらくエムは沈黙がするが……脳が追いつき、理解できたのか目を

大きな声で叫んだ。

ちなみにこの声はラステイションのいろんな場所に響き渡り、  
しばらくしてからラステイションの七不思議の一つ

狼男がホテルで叫んでいる。そして語られたそうだ。

あ!?いや、別に深い意味はつ!?

言つた事の重要さ。  
そして大事な部分が抜けていた事に気付いたノワールは顔を赤

くして慌てて

両手をあわあわと振りながらそういう意味じやない。と否定するのだった。

「ああ……なるほど、つまり変装用の服選びに付き合えって事な……ならしつかりその部分を抜かないで言つてくれよ……焦つたわ……」

ノワールからしつかりと説明という名の弁明を聞いてエムはため息を吐き、ほつ。と胸を撫でおろしたのだった

「ごめんなさい……まさか一番大事な部分が抜けけるとは思つてなかつたわ……しゅん……とした表情でノワールはエムに謝罪するのだった。

「いや、別に気にしてないし……大丈夫だ」

「うつ……あつさり気にしていないって言われるのも複雑ね……」

なんだか女として負けた気分だわ……」

当然だろう。解釈の仕方を変えれば、

今エムの言葉は自分はノワールを異性として見ていない。

もしくは、女性としての魅力がない。と言つているようなものである。

いや、彼女の場合は充分に魅力はあるし、

女の子らしいところもあるので、女性としての魅力は充分にあるのだが。

というかエムの場合、彼女の服がいろんな意味で際どいので、

意識しないようにする事に理性をフルに使つて抑制する程である。

オープニングスケはこういう時、大変なのだ。

「……それで？ いつ行くんだ？ やっぱり明日か？」

「ええ、明日行くわ。依頼に行く前に寄つてくれたらそれでいいし」

エムは明日行くのか。と質問し、ノワールはその通りだ。と頷く。

まあ、タイミング的にもそこぐらいしか買える時がないのだが……。

「分かった。……じゃ、明日な。

「か……やっぱりこれ、デートじゃね？」

エムはそれを了承して、立ち上がる。

が、その時、そういえば。と、ある意味では余計な事をふと口に出してしまった。

「え？ ……デ……デデデ、デートオ！？」

「そうそう、環境破壊は気持ちいいZOY☆……じゃなくて……

「だつてそつだろ？ 異性と買い物に行くつて、デートそのまんまじやないか」

「う、うう……言われてみれば……たしかにそつだつたわ……」

顔を真っ赤しながらノワールはエムの言葉にたしかにそつだと頷く。

(ああああ……なんて事言つてくれたのよお!?)

言われなかつたら気付かなかつたし……変に意識する事もなかつたのにい!?

ただ、内心は凄く焦っているようだ。

「ははっ！ そう真に受ける事ないだろ？ ま、明日楽しみにしておくぜ。女神様？」  
ニットとエムは笑つてそう言つた。

「……ええ、せいぜい楽しみにしてなさい。虜にしてやるんだから！」  
ノワールはエムの言葉を聞いて何処か挑発的に笑うのだった。  
(わー!? わー!? 私は何を言つてるのよー!?)

これって……そその……エムの事を遠回しに好きつて……!?

違う違う違う！ 絶対そんなのじやない！ 絶対違うんだからー！

たしかに優しいし、強いし、面倒見もいいしと魅力的ではあるけど……！

知り合つて一日も経つてないのよ!? これじやあ私がチョロいみたいじやない！  
ぐぬぬぬ……これも全部ネプテューヌのせいだわ……!)

ただし、とんでもない事を口走つたと内心後悔していたようだ。

そして、責任転嫁されるネプテューヌであつた。

場を搔き乱す事が多い彼女だが、今回はいつさい関係ないのである。

「エムくーん！ ノワール！ 早く一緒にプリン食べよー！」

「ひやう!?」

「ふあつ!?」

そんなやり取りをしている中、唐突に乱入者が現れた。

噂をすれば。というべきだろう。ネプテューヌが扉を開けて入ってきたのだ。エムとノワールはビックリして体制を崩す。

「あれ？ もしかして驚かせちゃった？」「めん」「めん」

「……もしかして、今までの聞いてた？」

「今までの？ なになに？ 何か話してたの？」

「あ、いや……聞いてないなら良いんだ。……うん。

ちよつとしたどうでも良い雑談だつたからな！ な！ ノワール！」

エムは冷や汗をかきつつ、ノワールに目配せして話を会わせろと合図を送る。

「え、ええ！ そうね！ どうでも良い雑談だつたわね！！」

「えー！ きーにーなーるー！」

慌ててノワールはエムの話に合わせるが、やはりそう言われると気になるのが人の性。

いや、この場合は女神の性だろうか。

とにかくこういう時は気になつてしまふのが基本である。

ネプテューヌはどんな話なのだろうか。と妄想しだす。

「うわー！ なんだろう、エム君とノワールの会話つて！」

もしかして、禁断の愛の話とか?!きやー！恥ずかしい!!

「してねー一つづうの?!誰が禁断の愛について語るんだよ!?

つうか俺をそつち系の趣味に巻き込むな！俺はノンケだ！ノーマルだ!!「ちょ!? それだと私がレズみたいじゃない！私もノーマルよ！ノーマル!!」

「ノワールだけに？」

「上手くない!!」

二人の必死の弁明を聞いたネプテューヌのボケに

息ピッタリでツツコミを入れるエムとノワールだった。

「はあ……はあ……はあ……というか……」

何か用があつて……来たんじゃないのかよ……ネプテューヌ

興奮のあまり、息も絶え絶えになつたエムはそのままネプテューヌに聞く。

「あ、そうだった。はい、これ！」

「…………何よ、これ？」

「プリン？…………あつ」

ネプテューヌは思い出して、プリンをエムとノワールに渡す。

エムはその手渡されたプリンを見て、あつと思いつ出す。

「プリンだよ。とつても美味しいんだよ！」

「いや、それは見ればわかるわ」

「えっとね、シアンからプリンをもらつたから皆で一緒に食べよつて話をしてて、エム君が言いに行つてくれた筈なんだけど……」

「すまん……すっかり忘れてた……他の事に集中し過ぎたわ……悪い……」

こめかみを押さえてエムは謝つた。

「あ……そういえばあの時そんな事言つてたわね……」

ノワールはエムが部屋に入つて来た時言つていた事を思い出して呟く。

「……断るわ。あなた一人で食べればいいじゃない？」

「えー？わたしはノワールと一緒に食・べ・た・い・な・？

なんちやつてー！」

「何故にお・も・て・な・し風？」

ノワールの拒否の言葉に

ネプテューヌは冗談半分、本音半分で答え、

エムはネプテューヌの言葉にツッコミを入れる。

「……はあ。

あのね、私はこんな時間まであなたに付き合つてあげるほどお人好しじゃないの」

ノワールはそんなネプテューヌの言葉にため息を吐いて、呆れた様子で答える。

「俺の会話には付き合ったのにな」

「何か言つたかしら?」

「( ; 0 w 0 ) イエ!!<sup>いえ</sup> マリモ!?<sup>なにも</sup>」

エムの余計な一言にノワールはイイ笑顔で拳を作りながら問いかけ、エムは慌ててなんでもないと否定する。滑舌が悪くなっている時点でバレバレだが。「……まあ、いいわ。もう一度言うけど、

プリンなら一人で食べなさい。それか他の人とね。私は出かけてくるわ」「……あれ? ノワールどつかいくの?」

「散歩よ。一人になりたいの」

ネプテューヌの問いに不機嫌そうにノワールは答えたのだつた。

「……で、どうしてあなた達がついてきてるのよ。

言つたでしょ、一人になりたいって」

ジト目で着いてきたネプテューヌとエムを見る。

「いやあ。記憶喪失のノワールが一人夜道を歩くとなると

いろいろ心配でさー。親心つてやつ?」

「誰が私の親よ!」

「ハハハ、まあ俺は……暗い夜道を美少女二人に出歩かせる程  
最低な男でもないんでな。一緒に居たら、いざとなつた時に俺が庇つたりできるだろ  
?」

ネプテューヌのボケにツツコミを入れるノワール。

そんなやり取りを見ながらエムは笑つて、さも当然のように言う。

「び、美少女つて……や、やだなー! エム君!」

事実だけどそんなさらつと言うものじやないよー?」

「び、び、び、美少女つて……今、美少女つて……」

ネプテューヌとノワールは顔を赤く染める。

やはり、この男。一級フラグ建築士である。

「はて……? 俺は何か間違つた事を言つただろうか?」

「ごく普通に当たり前の事を言つたつもりなんだが……?」

その、ごく普通の事が中々言えるものじやないんだぞ。エムよ。

「ん?……今、誰か俺に話し掛けたか?」

と、そんな風にやり取りをしている時だつた。

帰宅途中であろうシアンが声をかけてきた。

「よう、お前ら。相変わらず仲がいいな。けど、夜はあんまり騒ぎすぎるなよ?」「ちょっととネブテユース! あなたのせいで怒られたじゃないの!」

ノワールはシアンの言葉を聞いてネブテユースに怒る。

「あははは。ごめんね、シアン。うちのノワールが迷惑かけちゃって!」

「誰がうちのノワールよ!? 誰が!!?」

ネブテユースのボケにツッコミを入れるノワール。

なんだかんだ息が合う二人であつた。

(ツッコミをしないってこんなに楽なんだなあ……)

エムは一人の様子を見ながら少し涙を浮かべて何やら感動していた。

「ところで、シアンはこんな時間にどうしたの?」

「知り合いの町工場連中との会合だよ。博覧会に向けて技術交換をしてきたんだ。

小さな町工場でもアヴニールより優れた技術を持つている奴らたくさんいるからなみんなで協力して良い物作つて女神様に会おう、つて作戦だ!

しかも、潰れてしまつた工場の奴らも力を貸してくれるだとよ!」

シアンはネブテユースの質問に嬉しそうな表情を浮かべて答える。

それを聞いたネブテユースは目を輝かせて言う。

「おお、まさに総力戦つてやつだね！」

「ああ、今回の博覧会に

ラステイションの未来がかかつてているといつても過言じやないからな  
だから、お前らにも期待しているんだ。しつかり頼むぜ！」

「大船に乗つたつもりで任せてよ！ねえ、エム君！・ノワール！」  
シアンの言葉に胸を張つてネプテューヌは答えた。

エムとノワールもその気なのだろう。大きく頷いたのだった。  
— W H A T , S T H E N E X T S T A G E ? —

# どたばた！Data time！

「ふああ……おはよー……エム君……あれー？ノワールは？」

ホテルで朝を迎える。起きてきたネプテューヌは目を擦りながらノワールを探す。「ノワールはちょっと服を買いに行くつてさ」

エムはポリポリと頭を搔きながらネプテューヌに答える。

「んー、そつか。エム君も行くの？」

「おう、流石に一人じゃまずいんだろうしな

先に行つて待つてから後で来いつて言つてたし、そろそろ行くわ。

アイエフやコンパには先にアヴニールの依頼を受けに行つてくれつて言つといてくれる

ネプテューヌの疑問にエムはいつもの黒いライダースジャケットを着ながら答える。

「りょーかーい！気を付けてねー、エム君」

「はいよ、じゃあ行つてくるわ」

ネプテューヌの見送りに、エムは手を振つて外に出たのだつた。

「……お出かけかあ……羨ましいなあ……ノワール」

エムが出掛けてしまふから

ネプテューヌは少し頬を膨らませて、そんな風に呟いた。

勿論、この言葉は誰にも聞こえなかつた。

そんなわけでラステイション街中。

デートの約束をした（というかしてしまつた）ノワールは

先に行つてエムを待つていた。

「……先に待つていてる……と言つたのは良いけど。どうすれば良いのかしら……

男の人と買い物なんて今までした事がなかつたし……

これつてやつぱり……デート……なのよね……？

あー！もう！なんでこんなに恥ずかしい思いをしなくちゃならないのよー！？

待つてているのはいいが……頬を赤く染めてもじもじしたり、

ボソッとジト目で眩いたり、顔を赤くして怒つたように叫んだりと、穏やかではな  
かつた。

女神であれ、やはり未だ夢見る乙女なのだろう。

「うわ！すっげえ可愛い子ハツケーン！」

「マジ？……うつわマジじやん！」

と、典型的なチンピラの三人組がノワールに声を掛けってきたのだつた。

「何よ? 私、人を待つてるんだけど?」

(うわ……典型的なチンピラね……)

というかラステイションにこんな奴ら居たのね……我ながら頭が痛いわ……( )

ノワールは声を掛けってきたチンピラにムツとした表情で

如何にも話し掛けられて不愉快です。というオーラを出しながら、チンピラを見て色々と考える。

「え? マジ? 彼氏待ち?」

「ち、違つ!? アイツはそんなんじや……!」

チンピラAの言葉を聞いて顔を赤くして否定する。

やはりといふか意識していたようだ。

「お? まさかのツンデレ? やつベえマジストライク!

ちょっとぐらい良いじやん! ほんとちょっと遊ぶだけだし!」

「い・や・よ! あなた達みたいなチンピラに構つてる程、暇じやないの」

男の軽々しく吐く胡散臭い言葉に大声で断るノワール。

だが、その一言が男達を刺激したのかチンピラの一人が顔を真っ赤にして怒る。

「ツテメエ……下手に出てりやいい気になりやがつて……!」

「あら？ 瘋に障つたかしら？ なら、何処かに行きなさい  
はつきり言つて……邪魔よ、あなた達」

「このつ……！」

「ちよい待ち！ 兄貴！ この女……ブラックハート様にそつくりじゃねえですか？」

ノワールの言葉に今にも男は襲い掛かりそうだつたが、

ずっと黙つて考える素振りをしていた三人目が男を止めて、そんな風に言う。

「ツ……！（しまつた！）」

「あん？……そろいえば、瓜二つだな……ハハツ！ マジかよ！」

女神様が男待ちつてかあ！ コイツは傑作だなあ、おい！」

「ち、違うわよ！ 私は女神様じやないわっ！」

ノワールはうつかりしていた。

変身前の姿で民衆の前に出た事があるのでから

たしかに見覚えがあつてもおかしくはなかつた。

そこがすつかり考え方から抜け落ちていたのだ。

それを聞いた他の人々もコソコソと喋り出す。

内容は全て彼女が本当に女神なのでは？ という事だつた。

（下手に抵抗すれば……それこそバレちゃうし……）

だからといって何もしなければコイツらの思う壺……  
どうすれば良いのよ……！）

ノワールは心の中で頭を抱える。

どちらを選んでも、デメリットが大き過ぎたのだ。

たしかに、ノワールならこの男達を追い払うぐらい簡単だ。

だが、此処には他の人の目がある。

此処でこのチンピラを強硬手段で追い払えば、

それこそ大事になつて、教会の職員がやつて来てバレてしまう。  
だからといって抵抗しなければ今度はこの男達の思う壺なのだ。  
それこそこの男達に何をされるか分かつたものではない。

そう、将棋やゲームで例えるならば今の状況は「詰み」なのである。

「まあ、俺達には関係ねえ事だな！ほら、このアマ！とつとと行くぞ！」

「痛つ!? ちよつと！離しなさいよ!!」

男はどうでもよさそうに笑つて、ノワールの腕を掴んで引っ張る。

ノワールは慌てて、男の手を外そうとするが……力が強いのか中々外せない。  
(本当にどうすれば……誰か……私を助けてよ……！)

ノワールがそう願つた時だった。

ガシツ！と共に、

ノワールの腕を掴んでいた男の腕を誰かが掴んだ。

「おい、……さつきから……誰の女に手を出してんだ？クズ野郎」

「あん？ んだテメエ？」

「エ……ム……？」

その誰かとは、ノワールが知る人物。エムだつた。

エムはチンピラの疑問に頭をボリボリと搔き、ため息を吐く

「はあ……聞こえなかつたのか？ 耳悪いな、お前。なら、もう一度言つてやるよ。なに人の女に手を出してるんだつて言つてるんだよ……このクズ野郎……！」  
「ガキが……調子に乗つてるんじや……ねえ！」

「エム！？」

チンピラは癪に障つたのか右手を拳にしてエムに殴り掛かつてくる。

ノワールはそれを見て、慌てるが……

「はあ……遅いんだよ、お前」

エムはそうため息を吐き、

「んなつ！？」

飛んできた男の拳を避け、右腕を両手で掴んで止める。

そして左足で男の足を払い、体制を崩させる。

そしてそのまま掴んだ腕を持つて背負い……

「ふっ！」

「ガツ！」

地面に叩きつけた。

無駄のない洗練された動きだった。

「ふん、こんなもんか」

叩きつけられた男は強い衝撃だったのかそのまま気を失っていた。

「て……テメエ！」

もう一人、ノワールに声を掛けていた男が

果物ナイフを服のポケットから取り出し、エムに突き刺そうとするが、

「……！」

エムはそのナイフを避けて、

左腕でナイフを持った男の腕をロツクする。

そして、右肘で男の腹を思いつきり突く。

「ふんっ！」

「ゴハツ！」

そのまま左腕を離し体制を崩した男の前でしゃがみこんで、右手を主軸にして足払いをする。

「ギャッ!?」

男は地面に頭を打ち、そのまま気を失つた。

「ひ……ひい!」

三人組の最後の一人が怯えて足を竦ませたところでエムは残った男を睨み、話し掛ける。

「おい」

「は、はいい!なんでしょうかあ!?」

「コイツら連れて失せろ。……次はないぞ」

エムは殺氣を飛ばして警告した。

先程の果物ナイフの刃を折るというオマケ付きで。

「りよ、了解しましたああああああ!?」

男は氣絶している二人の男を引つ張つて、全速力で逃走した。

「大丈夫だつたか、ノワール?」

エムはライダースジャケットを着直してながら聞く。

「ええ……ありがとう……助かったわ」

「ならよし、まさか……テンプレ的な事が起きるとは思わなかつたぜ。  
どうせ、余計な事言つて煽つたんだろ、ノワール？」  
「うつ……その通りだわ……」

エムはノワールの感謝の言葉聞いて満足そうに頷くが。  
何処か呆れたようにノワールに質問する。

すると、ノワールは図星だつたためか、少し俯いて呟く。  
「でも……」

「?」

「無事で良かつたぜ。ノワール」

ニツつと、ノワールに向けてエムは笑つたのだつた。

「ツ――!?」

その笑顔を見てノワールは恥ずかしそうに顔を赤くするのだつた。

「そ、それより！早く服を買いに行くわよ！」

「お、おい!? ちょ!? 引っ張るなつて!?」

フイツと顔を逸らしてノワールは言い、エムの腕を掴んで歩く。

今はただ、この周りの人達の微笑ましい視線から逃れたかったのだろう。

「……此処で良いのか？」

「大丈夫よ、とはいえ……いつも一人で内緒で来てたのよね……」

エムの質問にノワールは大丈夫だ。と答えるがいつもと違うので不安そうだった。

エムはそれを聞いて、少々不安そうに呟いた。

「それいいのか女神様……」

「う……偶にはいいでしょ……」

「いや、まあ気にしないけどさ……」

やれやれ。と苦笑してエムはノワールを見るのだった。

「それより、早く入るわよ！」

「はいはい」

服屋に入る二人。

そこで待ち構えていたのは……：

「あらあ〜！ノワールちゃんじゃないの！」

いらっしゃい！今日も服を買いに来たのかしらん？」

漢女オネエだつた。

顔はイケメンなのに、女口調のTHE オネエだつた。

「ゲツ……今日はあなただつたのね……」

「もう、露骨に嫌がっちゃつて！」

ノワールちゃんつたらツンデレなんだから♪』

「誰がツンデレよ！ 誰が！」

「ぽかーん……」

そんな店員であろうオネエと、

ノワールの会話を見て置いてけぼりにされているエムであつた。  
「あら？ そちらの男の方は……」

「はつ！ まさかノワールちゃんのO・TO・KO!?」

「な!? ちちち、違うわよ！ エムとはそんな関係じや!?」

「既に名前呼びですって……!?」

いやあく!? 私のノワールちゃんが穢されたく!!」

「ちよつと!? 誤解を呼ぶ言い方しないでくれる!?

誰がいつ、あなたのになつたのよ!?」

当たり前のようコントをしている二人。

こんなやり取りを後々、別次元で見掛けたりするのだが……

それはまた後のお話。

「……言つておくけど、ノワールとは別に彼氏彼女の関係じやないぞ？」

「え……

「……え、ええ！ そうよ！ 私とエムはそんな関係じやないわ！」

(なんで今私はガツカリしたのよ！……これじゃあ本当に好きつて……!?)」

エムは落ち着いたのか、店員に告げる。

それを聞いたノワールは少しガツカリしたような素振りを見せたが、すぐにエムに合 わせる。

内心で思つてることは顔には出さずに。

「な……ノワールちゃんに魅力がないですつてえ!?」

「うわ、この店員、超めんどくせえ!?」

店員の怒つたような発言にエムは思わず考えていた事を口に出す。

「もう！ 私の事は良いでしょ！ それより！ 早く服を買わせなさいよ!!」

「ごめんなさいね。私とした事がついムキになっちゃつて……」

「あ、うん……気にしてないし……別に良いよ……」

店員の謝罪に疲れた様子でエムは呟く。

「全く……ごめんなさい、エム……こんなくだらない事付き合わせちゃつて……」

「大丈夫だ……気にしてない……うん……」

ノワールの謝罪に大丈夫だとエムは返す。

「それより……そろそろ服選ばないのか?」

「あらいけない!…そうだつたわ!」

ノワールちゃんに着て欲しかった服がちょうどあるのよ!」

エムの疑問に店員はパンと手を叩き、ノワールに言う。

「え? 私に着て欲しい服?」

ノワールは店員の言葉に首を傾げた。

「ささ、早く着替えてノワールちゃん! 絶対似合うから!」

「え? ちょ、ちょっと!?

店員はその服を取つてきてすぐに試着室にノワールを押し込む。

「着替えたら言つてちょうどいね!」

「分かつたわよ……もう!」

そんなやり取りを終えた後、店員はエムの方に振り返る。

「それで……あなたはノワールちゃんのなんなかしら?」

「……ノワールの……ね……さて、何なんだろう?」

「ノワールと会つたのはノワールの知り合いが切つ掛けだつたし」

「ふーん、そうなの……あなたはノワールちゃんの敵じゃないみたいね」

「エムの悩んだ答えに店員は笑う

「……その様子だとやつぱりノワール、何かあるみたいだな」

「まあね……私は元教会の職員だつたんだけど……」

噂のアヴィニールに、教会は乗つ取られちゃつてね。

ノワールちゃんの周りは敵ばつかりつてわけ

店員のそんな言葉に、エムは頷き、胸を叩いて笑う。

「……そういう事か。ようやく繋がつたよ。

任せとけ、何かあつても……俺がノワールを助ける」

「…………そう、じゃ、ノワールちゃんの事、任せたわね。

あなたなら安心して任せれそうだわ。それに……あなたよく見るといい男ね♪」

クスリと笑う店員にエムはブルリと震える

「うげえ!……それだけは勘弁してくれ」

「うふふ、冗談よ。そんな事したらノワールちゃんに嫌われちゃうもの」

「冗談でも寒気立つからやめろ……マジで……」

「…………」

エムの言葉に顔を赤くしながら服を着替えていた。

そう、先程のやり取り。全て丸聞こえだつたのだ。あの店員の仕業なのだが……  
 （あ、あんな事言われて……へ、平氣でいれるわけ……！？）

守るつて……ううう……！たしかに、さつきも守つてくれたし……俺の女つて……  
 あああ……なんで思い出しちやうのよおおお!?）  
 声に出さないだけで色々と焦つているようだが。

やはりこの女神、乙女である。

「お、終わつたわよ……」

着替え終わつたノワールは顔が赤いまま、店員に言う。

「あら、終わつたのね♪

さ、ご対面といきましようか。エムちゃんも一緒に、ね？」

「お、おい!?」

「え!?ちよつと待つて!?まだ心の準備が!?」

「いいから、いいから♪」

「よくない!!」

二人の静止の言葉を無視して店員は試着室のカーテンを開ける。

そこに居たノワールは

黒いスカートを履き、腕には黒い大きめの振袖。

大きな青いリボンが胸についている黒色の服を着ていた。

「あ……」

「あら、やつぱり似合つてたわね、私の思つた通りだわ♪  
さ、エムちゃんも感想を言つてあげて！」

「うえ?! いきなり言われても!?」

店員にいきなり振られ、

着替え終わつたノワールを見てボーッとしていたエムは慌てる。

「エム……その……似合うかしら？」

「え……えと……凄い神次元っぽいな!!」

「何よ、その感想……」

ノワールが頬を染めながらエムに聞くのだが、

エムはすぐに感想が出なかつたのか、よくわからない感想を述べるのだつた。  
それを聞いて少しムツとしてジト目でエムを見るノワールだつた。

「ははは！ 悪い悪い、でも……」

「?」

「すっげえ可愛い。似合つてるゼノワール」

「ふえつ!?」

エムは笑つて、可愛いとノワールに告げたのだった。  
無論、これを聞いてノワールはまともでいれるはずもなく……  
顔を真つ赤にする。

「あら～♪これは恋の予感ね！」

「そ、そんなんじやないわよー!?」

店員のからかいにノワールは顔を赤くしながら、店から出ていくのだった。  
「あ!?ちよ!!ノワール!!

ああ、もう！店員さん！これ代金な!!待てよノワール!!

エムは慌てて追いかけようとするが、

服のお金を払つていないので思い出し、

クレジットを店員に渡す。

「またのこ来店お待ちしております♪

ノワールちゃんの着てた服は

こつちで預かっているからまた後で来るようについておいてねえ～♪」

「分かった！サンキューな！店員さん！」

エムは店員の声を聞いて大声でお礼しながらノワールを追つて走つていくのだつた。

「ふう……こつちのノワールちゃんも友達が居るようで良かつたわ。  
ま、男が居たのは予想外だつたけど、テレテレしちやうノワールちゃんの可愛かつた  
わねえ……」

「……満足したかい？」

ニヤニヤと笑つていた店員の後ろに何処からともなく現れた  
黒いコートを着込んだ誰かが話し掛ける。

声から察するにおそらく男だろう。

フードを深く被つてゐるため、顔は見えないが、何処か呆れている様子に思える。

「はあ……もうそんな時間なの？」

「いや？まだ時間は充分にあるさ。だが……」

ため息を吐く店員に、謎の男は笑い……

「ツ！」

「今は良いが……あまり助言をするような事はしないで貰いたいな？」

右手で握つていたグリップに装着した紫色のゲームパッドのようなモノについている、  
赤い銃口を店員の首筋に当てて警告する。

フードから少し見える赤い瞳は店員を鋭く睨んでいた。

「あ、あらあら……怖い怖い……

あなたを怒らせるとどうなるか分からぬもの」

「ふん……ま、しばらくは滞在していくも構わないさ。この次元のエムは本当に意味での絞りカスだからね

……そのうち消える存在だ。捨て置けばいいさ。

ただ、何故そんな存在が L v. 3 の力を持つてゐるのか気になるが……まあ、すぐにあのガシヤツトも手に入るだろう」

冷や汗をかいて両手を挙げる店員を見て、

一度息を吐き、銃口を下ろして男は再び笑う。

「そこまで欲しいのね？ 彼の持つ力が」

「当たり前だろう？ アレは……彼女に必要なんだ。彼女が復讐する為にね……！」

……些か喋り過ぎたな。わたし 僕は一旦帰る事にさせて貰おう。

せいぜい……今のうちに満喫しておくんだな。アノネデス」

そう言つて、男は姿を消すのだった。

男が去つた後、店員……いや、

アノネデスと呼ばれた男は両手を下ろし、ため息を吐いた。

「やれやれ……肝が冷えるわね……まだ彼の目的を私達は知らないし……」

うーん、信頼されてないっていうのは分かるけれど……  
なんだか危ういわねえ……彼。焦つてるというよりは……必死?  
まあ、考えても仕方がないし……これは後回しね。

さてと、お仕事お仕事♪

色々悩んでも仕方がない。と

アノネデスはスイッチを切り替えて、仕事に移るのだった。

……謎の男。そしてアノネデスが関わってくるのはもつと先の話である。

そして、この謎の男こそがエムの真実を知っている事をまだ……誰も知らない——

—W H A T , S    T H E    N E X T    S T A G E ? —

# 仕事の依頼前のPreparation movement next!

「さて、大変不本意ではありますが、アヴィールの仕事をするとしますかー」

「お願いだから、そう思っていても絶対口に出さないでよ?」

「ねふねふは正直者ですからねえ……」

ネプテューヌの不服そうな、やる気のなきそうな言葉を聞いて

アイエフは冷や汗をかきながら、それを絶対口に出さないでくれ。と釘を刺す。  
そんな二人のやり取りを見て苦笑するコンパだつた。

「にしても、遅いわねえ……あの二人、大丈夫かしら?」

「えむえむが居るので何かあつても大丈夫だとは思うんですけど……」

依頼の場所に向かう為に待ち合わせてているネプテューヌ達。

待ち合わせ時間が近くなつてきていたためか、

アイエフは携帯の時計を見ながら少々不安そうに、

コンパは大丈夫だろうと思つてはいるが遅い二人の身を案じていた。

その時、ネプテューヌは遠くに居たエムとノワールを見つけ、手を振つて二人を呼ぶ。

「あ！居たよ！おーい！エム君！ノワール！こつちこつちー！」

二人はその声に気付きネプテューヌ達のもとに走つてくる。

「悪い、遅くなつた」

「ごめんなさい。待たせたわね」

エムとノワールは遅くなつたことを謝罪した。

まあ、向こうでゴタゴタしていたので遅くなつたのは仕方ないのだが……

「大丈夫、だいじょーぶ！気にしてないよ！でも、遅かつたね？なんかあつたの？」

ネプテューヌは大丈夫だ。とフオローしつつ

遅くなつたことが気になつたのか二人に聞いてくる。

「ま……まあな……」

「え、ええ……ちょっとね……」

二人は一瞬、顔を見合わせるが

目が合つた瞬間、顔を赤くして互いに目を逸らした。

少々氣まずい空気が二人の間に流れ、小さな声でボソボソと呟くのだった。

「なにがあつたの？教えてほしいなー！」

「こら、ネプ子！言いたくないつて空氣出してるんだから説明を要求しないの！」

プライバシーの侵害よ?」

ネプテューヌは元々好奇心旺盛な為、何があつたのか気になり

エムとノワールに説明を求めるが、アイエフがあまりプライバシーに関わることを聞くじゃない。とネプテューヌを抑える。

「ぶー……あいちゃんのケチ!」

「はいはい、ケチで悪かつたわね。

それよりも今は、アヴニールの仕事でしょ!」

「ははは……まあ気にしてねえし、そんな怒らなくとも大丈夫だぜ。アイエフ?」

ネプテューヌの抗議を

アイエフは子供の文句をあしらうようにスルーして本題に戻そうとする。

エムは二人のやり取りを見て苦笑しながら、大丈夫だと答える。

「そうね、今はそつちに集中しましょ」

ノワールの言葉で、なにか気付いたのか

ネプテューヌはノワールに声をかける。

「あ、そういうえばノワール!」

「急にどうしたのよ、ネプテューヌ?」

「その服、すごく似合ってるね!」

「そういえば……たしかに似合つてゐるわね」

「ノワールさん、可愛いです！」

「え？……そ、そうかしら？……褒められて悪い氣はしないわね」

ネプテューヌはノワールが買った服を見て素直に褒めるを述べる。

アイエフもコンパも気付いたらしく、似合つてゐる。とノワールを褒める。

ノワールは少々照れくさそうに頬を赤らめて、嬉しそうな顔をする。

「うんうん！まさに神次元で V<sup>icktリー</sup>！って感じがするよ！」

「…………」

ノワールはジト目で、エムは少々複雑そうに感想を述べたネプテューヌを見つめる。

その様子を見て、ネプテューヌは首を傾げて二人にどうしたのかと聞く。

「んー？ノワール、エム君、どうしたのー？」

「いや……あなたまでその感想なのね……予想できてたけど……」

「いや……俺の感想とネプテューヌの感想が同じつて事に

悲しいというか、複雑というか……」

ノワールはジト目でネプテューヌを見ながらボソッと呟き、

エムは腕を組み、色々と複雑そうな悲しそうな顔をして告げた。

それを聞いて、ネプテューヌはムーッと頬を膨らませる。

「むーつ！二人共、わたしを何だと思つてゐるのさ！」

「え？ プリン好きのシリアスブレイカージやないの？ （か？）」「うぐつ？……ううつ……間違つてないから否定できない……！」

「はいはい、この辺りで一回止めなさい。收拾がつかなくなるわ。」

早く仕事に向かうわよ！」

これ以上は流石にまずいと見兼ねたのか、

アイエフは三人を止め、目的地に行こう。と言うのだった。

「彼処に居る男がそれっぽいな……」

眼鏡をかけた一見、

好青年に見える男性が依頼の待ち合わせ場所で待つていたのを確認してエムは呟く。  
「…………！」

「……怖いのか、ノワール？」

顔が強ばつていたノワールを見てエムは心配そうに見つめる。

「……ええ、ちょっと……ね」

「そつか……でも心配すんな。何かあつたら俺が守るからな」

「……ツ！……ありがとう」

ノワールは不安そうな顔を見せるが、エムの笑顔を見て、少し頬を赤らめるが安心した顔を浮かべる。

「むー……」

「なんだよ、ネプテューヌ？」

「べつとにー？」

「いや、ほんとなんなんだよ……」

二人のやり取りを見て面白くなさそうに頬を膨らませるネプテューヌ。

その様子が気になつたのかエムは疑問を浮かべるがネプテューヌは答えない。嫉妬しているのだが、その気持ちはネプテューヌ本人もエムも知りえない。

ネプテューヌ達に気付いた男は、お辞儀をして挨拶をする

「はじめまして、お待ちしておりました。

あなたたちが弊社の仕事を請け負つてくれた人たちですね」

「ええ、そうよ。あなたが依頼人のガナツシユ？」

「はい。この度、依頼を出させてもらつたアヴニール社のガナツシユと申します」

アイエフの質問に眼鏡を掛け直しつつ男、ガナツシユは答える。

「そして、こちらが弊社代表のサンジユ」

「……」

ガナツシユの紹介にサンジユは無言で少し鼻息を鳴らす。

傲慢な態度だつた。

「この二人が、アヴニールの……」

「……」

「代表自ら外受けの仕事に出てくるなんて珍しいわね。

それとも、よほど期待されているとか？」

ノワールとエムは警戒するよう二を見つめ、

アイエフは皮肉じみた笑みを浮かべて冗談を言う。

「はつはつは。これはこれは冗談がお上手で」

「……雑談はそのくらいにしておけ。時間がもつたいない」

ガナツシユの笑い声に、サンジユは不機嫌そうに告げる。

「おや、これはすみませんでした

」

それでは、今回あなたたちに依頼する仕事になります

「待つてました！」

ネプテューヌの掛け声に

ガナツシユふつと笑い、仕事の説明に入る

「この辺りは近々我が社の新プラントの設立予定地となつてているのです  
しかし、工場着工前にして

少々厄介なモンスターが棲みついてしまつて困つてしているのですよ」  
「なるほど。つまりそれを倒すのが私達の役目という事ですか」

そのガナツシユの説明にエムは頷いた。

エムの言葉に、ガナツシユはその通りと頷く。  
ちなみにエムは素の自分を偽つて会話している。

敬語の方が問題ないだろう。と判断したのだ。

「はい、その通りです。この後、私と社長はこの辺りの視察があるので、  
それが終わるまでにモンスターの討伐をしていただきたいのです」

「討伐さえ出来れば手段は貴様らに任せる」

「倒せさえすればどんな手を使つても良いという事ですか

では、この辺りの土地が少し壊れても問題ないので?」

サンジユの言葉にエムは悪戯じみた笑みを浮かべて質問をする。

「いえ、それは少々困りますね……プラント設立予定地なので……」

「おつと、それは失礼……配慮が足りていませんでしたね」

ガナツシユは苦笑して、それは困ると答え

エムはわざとらしく笑みを浮かべ謝罪する。

「なーんだ。思つたより簡単な内容だね！」

てつきり、手作業で部品とか作るような面倒臭いのかと思つてたよ  
「わたしも細かい作業は苦手なので助かりました」

コンパはどうやら細かい作業が苦手らしく、安心したように一息ついた。  
ネプテューヌはそれを聞いて苦笑した。

「あー……こんばつてそういうの苦手そうだもんね」

「そうなんです。

前にアルバイトでお刺身にタンポポを乗せる仕事をしていたのですが、  
なかなか上手く出来なくつて……」

「あー、わかるわかる。

……つて、あの仕事つて実在したの!?

「いや、あれは実際には職人とか板前がするとかではなく

スーパーにある刺身などをバイクの店員などが飾るもので、  
ちなみに時給は安いのでも1000円はするそうです。

細かい作業をずっと続ける分。それ相応の値段だと思いますね

後、言っておきますけど……

あれタンポポではなくて食用菊ですからね。食べれますからね？  
食べる人少ないですか？」

コンパの話で噂の刺身にタンポポを乗せるだけの簡単なお仕事が存在していた事に驚愕するネプテューヌ。

エムはそれに補足する形で「豆知識を教える。

博識なのは良いが、ドヤ顔で説明するものでのないと思うのだが……後、いつも使わない敬語を使っているので気持ち悪い。

「ネプ子がツツコミに回るなんて珍しいわね……」

アイエフはネプテューヌの様子を見て少し珍しそうな顔をする

「あの……そろそろよろしいでしようか？」

「おっと、失礼。すっかり忘れていました。申し訳ない。

いつもこんな感じなので……多少慣れてくれると助かります」

忘れかけられていた、ガナッシュは全員に話し掛け、

エムは苦笑して、こんな感じだから慣ってくれ。と申し訳なさそうに謝罪した。

「いえ、まあ……愉快な方々だというのは理解できましたから

……コホン、説明はこれで以上です。くれぐれもミスをして

例のモンスターを我々が視察している方に逃がさないよう気をつけてください」

ガナツシユは苦笑してから、一度咳払いをし忠告をした。

「了解しました。細心の注意を払わせていただきます」

エムはそう言い、お辞儀をした。

「では、私達はこれで……」

ガナツシユはお辞儀を返し、  
ガナツシユ達は去っていく。

「…………」

その去る姿を何かに気付いているように目を細め、見届けるエムだった。  
そんな中、ネプテューヌはふと思い出したかのようにエムに話し掛ける。

「そういえば、エム君」

「ん？どうした？ネプテューヌ」

「敬語凄い使い慣れてたね。まるで別人みたいだつたよ！」

不思議そうにネプテューヌの話を聞くエム。

その通りだつた。敬語を使っていたエムはまるで別人のようだつたのだ。  
エムもあまりよくわかつてないのか腕を組んで悩んだ様子で告げる。

「俺もなんとなくしかわからないんだけど……」

なんだか会社同士の付き合いつていうの？それを経験したような感覚があるんだ」

「へー、もしかして何処かの会社の社長だつたりして！」

「いやいや……それはさすがにないだろ？」

ネプテューヌの予想に有り得ないだろう。とエムは否定するのだつた。

エム達の姿が見えなくなつたところで  
ガナツシユはサンジユに話し掛ける。

「……社長、あの黒髪の少女ですが」

「お前も気付いていたか」

サンジユは目を細めて、ガナツシユに答える。

どうやらある程度、気付いていたらすう

「はい。やはり、あの方に似すぎているかと……」

「確か、数日前から失踪していたんだつたな」

「なので、その可能性も十分かと。……どうしますか？」

「どうするもなにも、本人かどうかわからんことにはどうしようもない

ただ、目だけは離すな」

「了解しました」

ガナツシユはサンジユの命令に眼鏡をスッと掛け直して命令に従つた。

その様子を見ている男が居たことに気付かずに……

「……次は、あのガシャットだ。

せいぜい……上手く動いてくれよ。アヴニール？」

木の陰にいた、黒フードの男は紫色のゲームパッドの画面を見る。

そこにはマイティアクションXのガシャットと同じ絵と文字が描かれた画像の他に  
……

七つのモノクロの絵が描かれていた。

男はその絵の中で、マイティアクションXの横に描かれている

剣を持つた騎士の絵を指でタッチする。

その絵には『TADDE QUEST』という字が刻まれていた。

「残るガシャットは……あと七つ。

この次元で……四つはデータの入手ができる。

その他は……こちらで補える……せいぜい上手く利用させてもらおうか。

こちらの犯罪神も向こうの犯罪神もね……フフフフツ……」

男は謎めいた発言を残し……跡形もなく姿を消したのだった。

「うー……ん。やっぱ、そう都合よくアヴニールの出典物がわかるはずないかー」「ま、そんなに順調に物事が進むわけないわよね。

幸い、依頼がモンスターの討伐なわけだし、

シアンの武器のテストくらいはして帰りましょ

「そうだな。それが一番良いだろう」

ネプテューヌは難しそうな顔し、

アイエフは仕方ない。と苦笑し、エムはアイエフの意見に頷き賛成する。

「そういえば、今日からノワールも一緒に戦ってくれるんだよね？」

「ええ、そうよ」

「だつたらさ、あいちやん

ちようど手頃なモンスターもいることだし、ノワールの実力を見るためにもこの辺りでテキトーに一回戦つて行こうよ！」

「ずいぶん私も甘く見られたものね。

……いいわ、私は実力、その目に刻むといいわ」

「お、いいねえ……じゃ、モンスターの討伐数で競争といこうか」

ネプテューヌの意見にノワールは自信満々に笑う。

二人のその様子を見てエムは競争といこうぜ。と獰猛な笑みを浮かべた。

エムの意見にネプテューヌ便乗し、意見を出す。

「じゃあ、買つた方が負けた方のプリンをもらうってのはどう?」

「望むところよ。ま、当然勝つのは私だけどね」

「おいおい、俺を忘れてもらっちゃ困るぜ。勝つのは俺だ!」

ネプテューヌの意見に望むところだと闘志を燃やすノワールとエム。  
「それはどうかなー。わたしだって負けないもんねー! 変身!」

「おま!?」

ネプテューヌは女神の姿に変身する。

エムは目を丸くして、ネプテューヌを見る。変身するとは予想していなかつたのだ。

「わたしも本気を出させてもらうわ」

「ちよつと!? あなただけ変身するなんて卑怯よ!」

「なら、あなたも変身すればいいじゃない」

「つ!?

(自ら地雷を踏むノワールエ……)

ノワールの抗議に、

ネプテューヌは嫌味つたらしい笑みを浮かべる。

変身できるといえばできるのだが、

正体を明かすことになるのでノワールは変身できないのだ。

それを知っているエムは何処か同情的な目をノワールに向けたのだった。

「ねぶねぶ、普通の人はねぶねぶみたいに変身できなくてよ？」

「相変わらず酷い無茶ぶりをするわね」

「あのそれって俺は普通の人じやないカウントされていらっしゃいます？」

コンパとアイエフの言葉にエムはしょぼんとした顔で呟く

「あ!? えむえむの悪口を言つてるわけじゃないですよ!?」

「どうか、特撮的な変身できてる時点で普通の人間じやないでしょ……」

コンパは慌てて否定するが、アイエフは呆れたようにエムにツツコミを入れる。

「いやまあ……たしかにそうだけども……」

(び、びっくりしたあ……)

てつきりバレてるのかと思つたじやないの)

エムはボソボソと呟いたが、渋々納得したようだ。

一方ノワールは冷や汗をかいたが安心して胸を撫で下ろすのだった。

「けど、勝負は勝負よ。手加減しないわ」

「プリンが関わっている時のねぶねぶは、相変わらず妙に本気ですねえ……」

ネプテューヌの真剣な表情にコンパは苦笑いをするのだった。

「ネプテューヌが変身するなら俺も変身する！」

エムはしごれを切らしたのか、そう言つて

ゲームドライバーを腰に出現させ、マイティアクションXのガシヤットを取り出す。

『大変身！』

エムはマイティアクションXのスイッチを押しガシヤットを起動する。

そして、ガシヤットをゲームドライバーに挿し込み、レバーを左に倒す。

G A S H A T ! 』

G A C H A N ! 』

L E V E L U P ! 』

『 M I G H T Y M I G H T Y A C T I O N — X ! 』

エムはキャラクター選択でエグゼイドの顔を選び

そのまま出現した桃色の壁をくぐり抜け、

仮面ライダーエグゼイド アクションゲームLV. 2に変身した。

『よーし……やってやるよ……！』

【】

『なんだよ、ネプテューヌ？』

不思議そうに見つめてくるネプテューヌが気になつたのか  
エグゼイドはどうしたのかネプテューヌに聞く。

「変身音短くなかったかしら？」

『特撮によくある変身音省略だよ。省略。

長い変身音が毎回流れるのも飽き飽きするだろう？その配慮だとさ  
ネプテューヌの言葉にエグゼイドは説明をいれるが……  
割とどうでもいいメタな会話だつた。

『そらそらそらそらア！

逃げてるだけじゃ、意味ないぜモンスター共オ！』

「グオオオー！」

エグゼイドは大声で叫びながら

鎧を纏い、斧と盾を持つたモンスター、ボスリザードを追いかけ回す。  
ボスリザードはこのままではジリ貧だと悟つたのか、  
方向転換をし、斧をエグゼイドに目掛けて振り落とす。

『ハツ！考えが甘いんだよ…』

〔STEEL!〕  
鋼鉄化

エグゼイドは仮面の下で笑い、折れた剣が描かれた灰色のメダルを取る。するとどうだろう、エグゼイドの身体が銀色に変色する。そして斧がエグゼイドに直撃する。

「ガキンッ！」

「グワ!?」

筈だつた。

ボスリザードは信じられないようにエグゼイドを見る。

何故なら、斧がエグゼイドを攻撃した時に折れたのだ。

そう、このエナジーアイテムは「鋼鉄化」

このエナジーアイテムを取得した者は身体が金属に変化するのだ。

斧の刃を容易く折れる程の硬い金属に。

『そういえば……コイツを試してみるか……！』

△ J A K I N ! △

エグゼイドは手に握っていたガシャコンブレイカーについている

マゼンタ色のAと刻まれているボタンを押す。

すると、ガシャコンブレイカーの槌の中心から剣が現れ、マゼンタ色の刃が展開され

る。

そう、ガシャコンブレイカーはハンマーから剣に変化したのだ。

『おっし、なら……コイツでどうだ?』

『G A S H U N . . . 』

エグゼイドはゲームドライバーからガシャツトを抜き、  
ガシャコンブレイカーに挿し込む。

『 G A   S H A T !   』

『 K I M E   W A Z A !   』  
『 M I G H T Y   C R I T I C A L   F I N I S H !   』

ガシャコンブレイカーのトリガーを押す。

すると、ガシャコンブレイカーの刃にマゼンタ色のオーラが纏う。  
エグゼイドはガシャコンブレイカーを振りかぶり……

『これでフィニッシュだ!』

「グアアアアアアア!」

雄叫びをあげるボスリザードに斬りかかる。

『デエリヤアアアアアア!』

「グギヤアアアアアアア!」

『K A I S I N    N O    I P P A T S U ! 』

一閃。一閃だつた。

その一撃でボスリザードは消滅した。

消滅していくボスリザードを見てふつと笑つた後、

『ま、中々だつたぜ。オマエ。……でも、オレと戦うにはちょっと弱かつたな』

背を向けて、エグゼイドは離れていった。

「「どどめ！」」

ネプテューヌとノワールは叫び、剣を振るい蜘蛛のモンスター。スパイダーを斬り裂く。

「G y u i : i !?」

スパイダーは断末魔をあげ、  
ネプテューヌとノワールの攻撃で消滅した。

そこに、エグゼイドがボスリザードを討伐して帰ってきた。  
アイエフはそれに気付いてエグゼイドに話し掛ける。

『お、終わつたみたいだな』

「エグゼイド、終わつたの？」

『おう、雑魚かつたぜ。アイツ』

「一応この辺りじや強い筈なんだけどね……ボスリザードって」

エグゼイドのピースサインにアイエフは苦笑する。

事実この辺りではボスリザードは強敵に入る部類なのだ。

『で、こつちはどうだつた?』

『ご覧の通りよ、数は多かつたけど……

殆どネプ子とノワールが片付けちやつたわ』

エグゼイドの質問にアイエフはネプテューヌとノワールを指差して苦笑する。

『プリンになるとマジで本気なのな……ネプテューヌのやつ』

「好きな物を賭けに出したら大体の人がそうなると思うわよ?』

『違ひないな』

呆れたようなエグゼイドの声にアイエフは苦笑し

エグゼイドは違ひない。と肩を竦め笑うのだつた。

「わたしの勝ちね』

「何言つてるのよ、私の方が早かつたわ!』

「いえ、わたしの方がコンマ二桁早かつたわ』

ネプテューヌの自信満々そうな様子に

ノワールは納得がいかないのか不服そうな表情を浮かべる。

『ハツ！数だけじゃたしかに勝ちかもしけれねえけど

強敵はオレが倒したんだ、強敵の分のポイントを加算して、オレの勝ちだろ？』

先程のやり取りを聞いてエグゼイドは二人を煽るように鼻で笑う。

その煽りを聞いたネプテューヌとノワールはムツと顔を顰め、エグゼイドを睨む。

「なんですか？」

『なんだ？文句あんのかよ？』

エグゼイドは二人の視線に負けじと睨み返す。

『「…………」』

三人が無言で睨み合う。

そう、彼らは全員負けず嫌いなのである。

ネプテューヌはノワールは勿論の事なのだが……

エグゼイドこと、

エムは「勝利するなら完封勝利」という座右の銘を自分で掲げているらしく

何事にも本気で勝ちを取りに行く。

こう聞くと質が悪いが……相手が強い時、負けは負けとあつさり認める節もあり、

負けを認めた場合は更に強くなつてリベンジに来るという向上性を持つていたりす

る。

そう、エムは敵に回すと厄介な主人公体質持ちなのである

「はいはい、ストップ！三人共同点だつたわ。

だから、この勝負は引き分け。いい？」

三人のやり取りを見兼ねたアイエフは仲介に入る。

エグゼイドはそれを聞いて、肩を竦めるが

『ま、アイエフがそう言うならそれでいいや』

### 『 G A C H O N 』

### 『 G A S H U N . . . 』

仕方ないがない。と納得してゲーマードライバーのレバーを右に倒し、  
ガシャットを抜き、変身を解除した。

だが、ネプテューヌとノワールは納得がいかないらしくアイエフに抗議をする。

「そんなはずないわ！」

「そうよ！私がネプテューヌやエムと互角なわけないわ！」

「なんだよ!?俺がお前らに負ける訳ねえだろうが!!」

その言葉を聞いて、

エムは気に入らないのか、叫ぶ。

「あーもう！三人共しつこい!!」

「「ひい!?」」

三人の喧嘩に堪忍袋の緒が切れたアイエフは怒鳴った。  
いつもの倍以上の声量で。

三人はその怒鳴り声にビックリして、肩を縮める。  
「審判さんが引き分けって言つたら引き分けです！」

でないと、三人のプリン、わたしとあいちゃんで没収するですよ？」

「「それだけはやめて!」」

コンパの最後の言葉が効いたのか、慌てて謝罪する三人だつた。  
全員、プリンを食べたかつたらしい。

「「……はーい」」

「聞こえないですよ？」

「「はい！分かりました！二度としません!!」」

コンパの目の笑つていない微笑みに三人は敬礼して謝罪するのだつた。  
この時、三人の中で怒らせてはいけない人にコンパが刻まれるのだつた。  
普段優しい人が怒ると怖いというのはどうやら本当の事だつたらしい。

W  
H  
A  
T,

S

T  
H  
E

N  
E  
X  
T

S  
T  
A  
G  
E?  
|

# C r a z y M a g i c i a n 登場！

「そういえばさ、今日のお仕事ってどんなモンスターを倒せばいいんだっけ？」

「大型のモンスターみたいよ」

目的のモンスターは探していたネプテューヌ一行だが、

ネプテューヌはふと、疑問に思つたのかアイエフに聞き、

アイエフはガナツシユから受け取つていた資料に目を通しつつ答える。どうやら大型らしい。

具体的な大きさとかは書いていないのだろうか。

「他に特徴は？」

「ないわ。さつきもらつた書類にはそれしか書いてなかつたわ」

「あなたを責めるつもりはないのだけど、この情報だけじゃわからないわね……」  
たしかにその通りだ。

もうちよつと特徴を書いてくれても良かつたと思う。

大型という情報だけではわからないものである……  
だから、こういう時は――

「そんな時は誰かに聞いてみるです」

コンパの言う通り、誰かに聞くのが一番良いということになる。  
「さすがに、そんな都合よく誰かいるわけ……」

「ノワール、それフラグだ」

ノワールはコンパの案にまさか。と肩を竦め、  
エムはさらりとツッコミをいれる。

そういう事を言うと大概――

「ほう、まさかこんなところで見知った顔に出会うとはな」

ほら、こういう風に来てしまうのだ。

多分ネプテューヌの主人公補正（仮）とかが原因なのだろうが。

「…………あなた、誰？」

「私の名か？…………そうだな、ここでもMAGE<sup>メイジ</sup>S.<sub>ス</sub>」

「でも名乗つておくとするか」

ノワールの最もな質問に答え、自己紹介をするMAGES. と名乗つた如何にも魔術師ですつて格好をした

青髪に左目の目元に泣きホクロがある少女。

名乗つておくとするか。つてそれは偽名なのか？と考えるが、

——いや、俺自身偽名だし。他人のことを言えなかつた。とエムは思うのだが  
た。

「M A G E S ?」

「M A G E S . だ。それでは最後の・<sup>ピリオド</sup>が抜けている」  
・は要らないと思う。

いや、無くなつたら会社名じゃなくなるとは思うが……  
とメタな事を考えているエムなのであつた。

「うー……ん、あまり発音上関係ない気がするんだけど……。  
M A G E S . だね、おつけーい！」

「ふつ、お前はあの時もそう言つていたな」

M A G E S . はネプテューヌを見て笑う。

あの時、つまりネプテューヌと会つた事があるということだろうか……  
「ねぷ？あれ？もしかして、わたしを知つてる人？」

ネプテューヌも同じ疑問を持つたのかM A G E S . に問いかけている  
「よかつたですね。ねぷねぷ。やつと知り合いに会えたですよ！」  
「……その言い方だと、まるでネプテューヌが記憶喪失のようだな」

コンパの嬉しそうな様子を見て、一つの仮説に至つたのか……。

M A G E S . はそんな風に聞いてくる。

実際その通りでなんとも言えないが

——いや、本当に俺が一番ビックリしている。

プラネテユースの女神が記憶喪失とか本当に大丈夫なんだろか。とエムは考えていた。

実際不安なのである。いろんな意味で。

「そのとおり！ けど、よくわかつたね」

「私くらいになれば、言葉の断片から真実を導き出すなど容易いことだ」

まあ、M A G E S . のこの言葉から察せれるとと思うが、間違いなく……あれである。お年頃の少年少女によくあるアレである。

まあ、そんな事は置いて  
黒歴史確定なヤツである。ちなみに本人はほぼ自覚なしだつたりする。

閑話休題

「しかし、残念だが、私はお前たちの力になれそうにはない」

「……どうということです？」

M A G E S . の言葉にコンパは疑問を浮かべる。

「話せば長くなるが、私はここではない世界から超えてきたのだ  
故に、私の知っているネプテュースは、そこのネプテュースではない」

「どういうことです？何を言つてゐるかわからないですう」

M A G E S. の説明に尚更困惑するコンパ。

たしかに理解できるような内容の説明ではないだろう。

次元を超えるなど可能なのか。そんな疑問も浮かんでくるだろう。

「……つまり、M A G E S. はここではない別世界から来たつてことよ。そうでしょ？」

「ほう……。さすがはアイエフだ。理解が早くて助かる」

アイエフの説明に感心するM A G E S.

だいたい合っていたようだ。

「いや……それなんて世界の破壊者だよ……」

『  
DESTROYER! SEKAI NO HAKAISYA!  
BARCODEWARRIOR!』

「…………ツ!!」

エムはM A G E S. にツツコミを入れた時に、

自分の変身するエグゼイドと似たカラーリングで

顔がバーコードに見える戦士の姿が脳内に現れたらしく、頭の上で手を動かしてそのイメージを揉み消した。

「エム君、どつたのー？」

「いや……マジで世界の破壊者が見えた気がして……」

「……あなたがネプ子の知り合いじゃないのは仕方がないとして、教えてほしいことがあるの」

ネプテューヌが心配そうにエムの顔を覗きこみ  
エムは何やら難しそうな表情を浮かべて、ネプテューヌに答えていた。  
そんなやり取りを尻目にアイエフはMAGES. に聞きたい事を聞くことにしたようだ。

「この付近に大型のモンスターが

棲みついているらしいんだけど、何か知らないかしら？」

「いいだろう。だが、ある情報が欲しいのでな。情報交換だ」  
どうやらMAGES. には心当たりがあつたようだ。

だが、ただで情報を与えるほどMAGES. も甘くはない。  
何やら情報が欲しいようで、情報交換を望んできた。

「いいわよ。で、そつちが欲しい情報って何？ 言つておくけど、  
世界の秘密だと元の世界への帰り方とかそんなだいそれたことは知らないわよ？」  
「なに、簡単な事だ。

ドュクプエの売っている場所を知りたい、ただそれだけだ

「ど、ドュクプエ?……コンパ知つてる?」

M A G E S. の聞いたことのない言葉にアイエフは困惑した様子でコンパに知つているか聞く。

だが、どうやらコンパも知らないらしく首を横に振り、ネプテューヌに回す。「初めて聞く名前です。ねぷねぷは知つてますか?」

「全然知らないよ。ノワールは?」

「私も初耳ね。……その、ドュクプエってのは一体何なの?」

「…………もしやあれか?」

が、ネプテューヌも知らないようで、ノワールに回すがノワールも知らない様子だった。

ただ、エムは心当たりがあるのかブツブツと呟いていた。

「ドュクプエを知らないだと!?」

選ばれし者の知的飲料ことデュクテュアープエッパーを知らないというのか!?

「あ、やっぱそれなのな……」

「うん!……つてあれ? エム君知つてるの?」

M A G E S. は信じられない。と目を丸くするが

エムを除いた全員が知らないらしく、ネプテューヌの言葉に合わせて頷いていた。  
 ただ、エムは一人合点していた。  
 どうやら予想通りだったようだ。

「ああ、一応な」

「何!? エム、お前は知っているのか!?」

「うおう!? 近い、近いってば!? いや知ってるけどね!

てかなんで俺の名前知ってるの!? 別次元に俺いるの!?

何処か嬉しそうに食い気味で顔を近付けてくるM A G E S. にエムは少し後ずさりしながら答える。

そして、何故教えていない自分の名前を知っているのかちやつかり聞いているエム  
 だつた。

「……すまない、私としたことが冷静さを失つてしまつた。  
 それと……一応居るぞ」

「いや、別に気にしてないし大丈夫だけども……

それに、居るのね……なんか変な気分だな」

少し顔を赤くして、M A G E S. は謝罪するが

エムはあまり気にしてない様子で大丈夫だ。と答える。

そして、どうやらM A G E S. の居た次元に、エムは存在しているらしい。

「まあ……ただこの辺じやアレは見かけねえな

というか、昔はあつたっぽいが……今じや存在した痕跡すらないみたいだぜ」「なん……だと……!?

もしもし、私だ。どうやらこちらの世界のドュクプエも機関によつて存在を抹消されたらしい。

……いや、しかしここで諦める訳にはいかない。

きつとどこかにドュクプエが存在した痕跡があるはずだ。

幸いにもドュクプエを知つてゐる人物に出会えたからな……

引き続き、そちらも調査を続けてくれ。それでは幸運を祈る。

ルクス・トユネーヴエ・イメージ・ノイタミナ・システム」

言い難そうな顔を浮かべ、エムはM A G E S. に知つてゐる事を教えたが、M A G E S. はそれを聞き、一瞬驚いた様子を見せた後、悔しげな表情で、何処かと連絡をしていた。

「……つく！」

まさか、あの世界同様、こちらの世界にもドュクプエが存在しないとは「いや、そんな切羽詰まるようなもんでもないだろうに……」

悔しげな表情をしたMAGES. を見てエムは思わず苦笑いをする。

そんな二人のやり取りを見て少々呆れながら、ノワールが本題に戻す。

「……誰との電話か知らないけど、次はこっちの質問に答えてくれるかしら？」  
「……ああ、そうだったな。それで、お前たちが知りたいこととは何だ？」

ノワールの言葉で多少頭が冷えたのか、冷静な表情に戻つて

MAGES. は何が知りたいのか。と聞いてくる。

「この辺りに棲んでる大型のモンスターはいないかしら？」

「なんだ、そんなことか。

そいつならちようどこの前で見かけたぞ」

「本当です!?

どうやらMAGES. は依頼にあつた大型モンスターらしき存在を見かけていたら  
しい。

コンパはそれを聞いて驚いた様子で本当なのか。とMAGES. に言う

「ああ、この辺りにいるモンスターとは明らかに見た目が違うからすぐわかるはずだ」

「ありがとう、助かったわ」

「どうせお前たちのことだ、そのモンスターを倒しに行くのだろう?  
手伝つてあげたいが、私も急ぐ身でな。すまない」

「気にしないで。情報がもらえただけで十分よ」

M A G E S . の謝罪に気にするな。とノワールはフォローを入れる。  
無論、戦つてくれると心強いのだろうが、

情報がもらえただけでも十分な収穫なのである。

「では、私はここで失礼する」

「おう、気をつけてな。M A G E S .」

「おつと、忘れるところだつた。エム」

去ろうとしたところでM A G E S . は思い出したのか  
エムの方を振り返り、名前を呼ぶ。

「ん?なんだM A G E S . ?まだ何か――――」

「ドユクプエの情報が分かつたらすぐに教えてくれ。いいな?」

「お、おう……なんか分かつたら連絡するわ……後、M A G E S . 近い」

エムのどうかしたのか?という言葉を遮り、

グイッと顔をエムに近付けて、真剣な眼差しでM A G E S . は見つめてくる。

さすがにエムも女性がここまで近付いてくるのはあまり慣れていないのか  
笑みを引き攣らせて、返事をする。

「では、今度こそ失礼させてもらおう」

そして、今度こそ、M A G E S. はネプテューヌ達の前から去つて行つたのだつた。

「「むう……」」

「なんでお前らちよつと不機嫌そななの？」

「別に……」

「ええ……」

ネプテューヌとノワールが不機嫌そなうに睨んできた事に気付いたエムは理由を聞こうとするが……

適當にはぐらかされてしまい、少々困惑するのだつた。

「……コホン、どうやら獲物はこの先にいるみたいね

モタモタして何処かに行かれるのも面倒だし、急ぎましょ！」

アイエフはそのやり取りを見て咳払いをし、

本題に戻し、そのモンスターを探しに行くことにするのだつた。

「あ、そうだ。ねーねー、エム君、

結局そのドュクペエつてのはいつたいなんなのさー?」

「あー、分かつたから搖さぶるなつての。酔つて吐くぞ。俺が」

ネプテューヌはふと、思い出したのかエムの身体を搖さぶつて聞いてくる。

「ま、 そう難しい話でもないんだが、

モンスターを探してゐるし……歩きながら説明させてもらうかね」

「わーい！」

「拍手どうも。 ぶつちやけるならドュクペエ……言い難いな……」

普通にド○ペって言わせてもらうが……○クペは所謂炭酸飲料の一種だよ」

「炭酸飲料……です？」

「そ、 三〇矢サイダーだつたりコカ○コーラだつたり。 あんな感じの」

エムの説明に四人はそれぞれ、 違つた表情を浮かべる。

感心しているか。 不思議に思つてゐるか。 など四者四様だつた。

「んで、 ドク○は……まあぶつちやけ甘い」

「甘いつて……炭酸飲料じやおかしくないわよ？」

「あー……そくじやなくてな。 糖分が高いんだよ。 他の炭酸飲料に比べてな」

エムの言葉に何を今更といった様子でノワールは答える。

が、 それを聞いて例え方が悪かつたかな。 と頭を搔き

どういう事が説明する。

「ちなみにどのくらい甘いの？」

「甘さですか？……うーんそうだな。 MAX缶コーヒー、 マツ缶つて知つてゐるか？」

「ええ、知つてゐるわ、胸焼けしそうなぐらい甘いコーヒーでしょ？」  
 エムの例えに、アイエフは飲んだことがあるのか  
 少々嫌そうな顔で答える。

「飲んだことあるのな……」

まあ、ざつくり言うと……炭酸飲料版マツ缶つて感じだな。ド○ペは  
 「あー……そういうことね……よく飲めるわね。M A G E S.」  
 「アレが病みつきになる変わり者も居るんだよ……世の中にはな」  
 アイエフは合点がいったらしく苦笑する。

エムは、マツドでサイエンティストそうな

高らかに笑う男の姿を思い浮かべて、苦笑しながら答えるのだった。  
 「……なんだかそれを聞いたら知つてゐる気がしてきたわ」  
 ノワールは何やら電波を受信したのか、頭が痛そうだった。  
 きっと何処ぞの中の人を受信したのだろう。

「そういえばエム君」

「なんだ?」

「さつきから○クペとかが伏字なのはなんでなの?」  
 「……著作権的な意味だ。それぐらい察しろ」

ネプテューヌの疑問に呆れながら  
エムは氣怠そうに答えるのであつた。

S T A G E? —